岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第438集

北の城館跡発掘調査報告書

きた　じょうやかた　あと

中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査

岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

北の城館跡発掘調査報告書

（きた　じょうやかた　あと）

中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人達の創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。発掘調査により遺跡が消滅することは、まことに惜しいことでありますが、その反面それまで闇に包まれていた先人達の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、中山間地域総合整備事業に関連して、平成14年度に発掘調査を行った安代町北の城館跡の発掘調査をまとめたものであります。北の城館跡は、安代町の中央部を流れる安比川右岸の河岸段丘上に立地しており、調査の結果、平安時代と中世の竪穴住居跡、館跡の郭やテラス、堀跡等が検出されました。特に、堀跡は二重堀であることが確認され、館が堅固に造られていたことが分かりました。また、平安時代の竪穴住居跡から刀剣が出土するなど、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご指導・ご協力を賜りました岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室、安代町教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より謝意を表します。

平成15年10月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県岩手郡安代町字石神43－１ほかに所在する北の城館跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、中山間地域総合整備事業に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室と岩手県教育委員会生涯学習文化課との協議を経て、岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は次のとおりである。

遺跡番号　ＪＥ55－1261　　遺跡調査略号　ＫＪＹ－02

4．野外調査の調査期間・調査面積・調査担当者は次のとおりである。

調査期間　　平成14年７月１日～10月11日

調査面積　　3,920㎡

調査担当者　　佐々木信一、野中真盛

5．室内整理の期間と担当者は次のとおりである。

整理期間　　平成14年12月16日～平成15年３月31日

整理担当者　　佐々木信一

6．各種鑑定にあたっては、次の方々に依頼した。

石質鑑定　　花崗岩研究会

鉄製品の保存処理　　岩手県立博物館

7．基準点測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。

基準点測量　　株式会社土木技術コンサルタント

写真地形測量　　株式会社ハイマーテック

空中写真撮影　　株式会社ハイマーテック

8．野外調査及び本報告書の作成にあたっては、次の方にご協力・ご指導をいただいた（敬称略）。

東本茂樹（安代町教育委員会）

9．本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

10．本遺跡の調査成果は、先に「現地説明会資料」（平成14年９月27日）、「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成14年度分）」に発表しているが、本書の内容が優先するものである。

目　次

序
例言

本　文

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……1
　1．遺跡の位置……1
　2．遺跡の立地と周辺の地形……1
　3．基本層序……4
　4．周辺の遺跡……5
Ⅲ　野外調査と室内整理の方法……9
　1．野外調査……9
　2．室内整理……10
Ⅳ　検出された遺構と出土遺物……19
　1．平安時代の竪穴住居跡……19
　2．中世の竪穴住居跡……24
　3．住居状遺構……25
　4．土坑……27
　5．柱穴状小土坑……33
　6．溝跡……33
　7．堀跡……36
　8．遺構外の出土遺物……43
Ⅴ　まとめ……47
　1．遺構……47
　2．遺物……50

表

第1表　周辺の遺跡一覧表……7
第2表　縄文土器観察表……45
第3表　土師器・須恵器観察表……45
第4表　石器観察表……46
第5表　鉄製品観察表……46
第6表　平安時代の竪穴住居跡一覧表……47
第7表　土坑一覧表……48
第8表　堀跡一覧表……49
第9表　安代町内の館跡（一部）……50

図　版

第1図　岩手県における遺跡位置図……2
第2図　遺跡周辺の地形図……3
第3図　基本土層図……4
第4図　周辺の遺跡位置図……6
第5図　スクリーントーン・土器実測図凡例……11
第6図　郭斜面断面図（1）……12
第7図　郭斜面断面図（2）……13
第8図　郭斜面断面図（3）……14
第9図　地形測量図……15・16
第10図　北の城館跡遺構配置図……17・18

第11図　１号住居跡……20
第12図　１号住居跡出土遺物……21
第13図　２号住居跡……22
第14図　２号住居跡出土遺物……23
第15図　中世の竪穴住居跡……25
第16図　住居状遺構……26
第17図　住居状遺構出土遺物……26
第18図　１号・２号・３号・４号土坑……28
第19図　５号・６号・７号土坑……30
第20図　７号土坑出土遺物……31
第21図　８号・９号土坑……32
第22図　柱穴状小土坑……34
第23図　溝跡……35
第24図　１号堀跡出土遺物……36
第25図　１号堀跡……37
第26図　２号堀跡……38
第27図　３号堀跡出土遺物……39
第28図　３号堀跡……40
第29図　４号堀跡……41
第30図　４号堀跡出土遺物……42
第31図　遺構外の出土遺物……44
第32図　堀跡……49

写真図版

写真図版１　遺跡遠景……55
写真図版２　調査区近景……56
写真図版３　調査区全景、土層断面……57
写真図版４　調査区近景……58
写真図版５　北東部土層断面、作業の様子……59
写真図版６　１号住居跡……60
写真図版７　２号住居跡（１）……61
写真図版８　２号住居跡（２）……62
写真図版９　中世の住居跡……63
写真図版10　住居状遺構……64
写真図版11　１号・２号・３号・
　４号・５号土坑……65
写真図版12　６号・７号・８号・９号土坑……66
写真図版13　柱穴状小土坑……67
写真図版14　溝跡・現地説明会……68
写真図版15　１号堀跡……69
写真図版16　２号堀跡……70
写真図版17　３号堀跡……71
写真図版18　４号堀跡、現地説明会……72
写真図版19　遺構内出土遺物(1)……73
写真図版20　遺構内出土遺物(2)・
　遺構外出土遺物(1)……74
写真図版21　遺構外出土遺物(2)……75

Ⅰ　調査に至る経過

中山間地域総合整備事業浅沢地区は、岩手郡安代町の旧浅沢村を事業区域とし、地域の農業農村の活性化を図るため、ほ場整備、農道整備などの農業基盤整備のほか、集落道、農村公園などの農村生活環境整備を総合的に実施する計画で、平成12年度に事業採択され、平成15年度から着工する予定である。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、当該事業の施行主体である岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室の依頼を受け、調査計画段階の平成11年度から平成13年度にかけて岩手県教育委員会事務局および安代町教育委員会で試掘調査を実施しており、岩手県教育委員会事務局との協議の結果、発掘調査が必要となり、平成14年度、（財）岩手県文化振興事業団に調査を委託することになったものである。

（岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．遺跡の位置

北の城館跡は岩手県岩手郡安代町にあり、ＪＲ花輪線荒屋新町駅の北東約４㎞に位置する。安代町は、盛岡市の北北西約50㎞、岩手県北西端部にあり、東に浄法寺町、西に秋田県鹿角市、南に西根町・松尾村、北に青森県田子町が隣接している。主要交通路は、国道282号とＪＲ花輪線が南から西へ弧状に通り、これとほぼ平行して東北縦貫自動車道が通っている。東北縦貫自動車道安代ジャンクションからは八戸自動車道が接続し、北東に延びている。

本遺跡は、国土地理院発行の５万分の１地形図「荒屋」ＮＫ－54－18－16（八戸16号）の図幅に含まれ、北緯36度7分6秒、東経140度4分39秒付近に位置する。

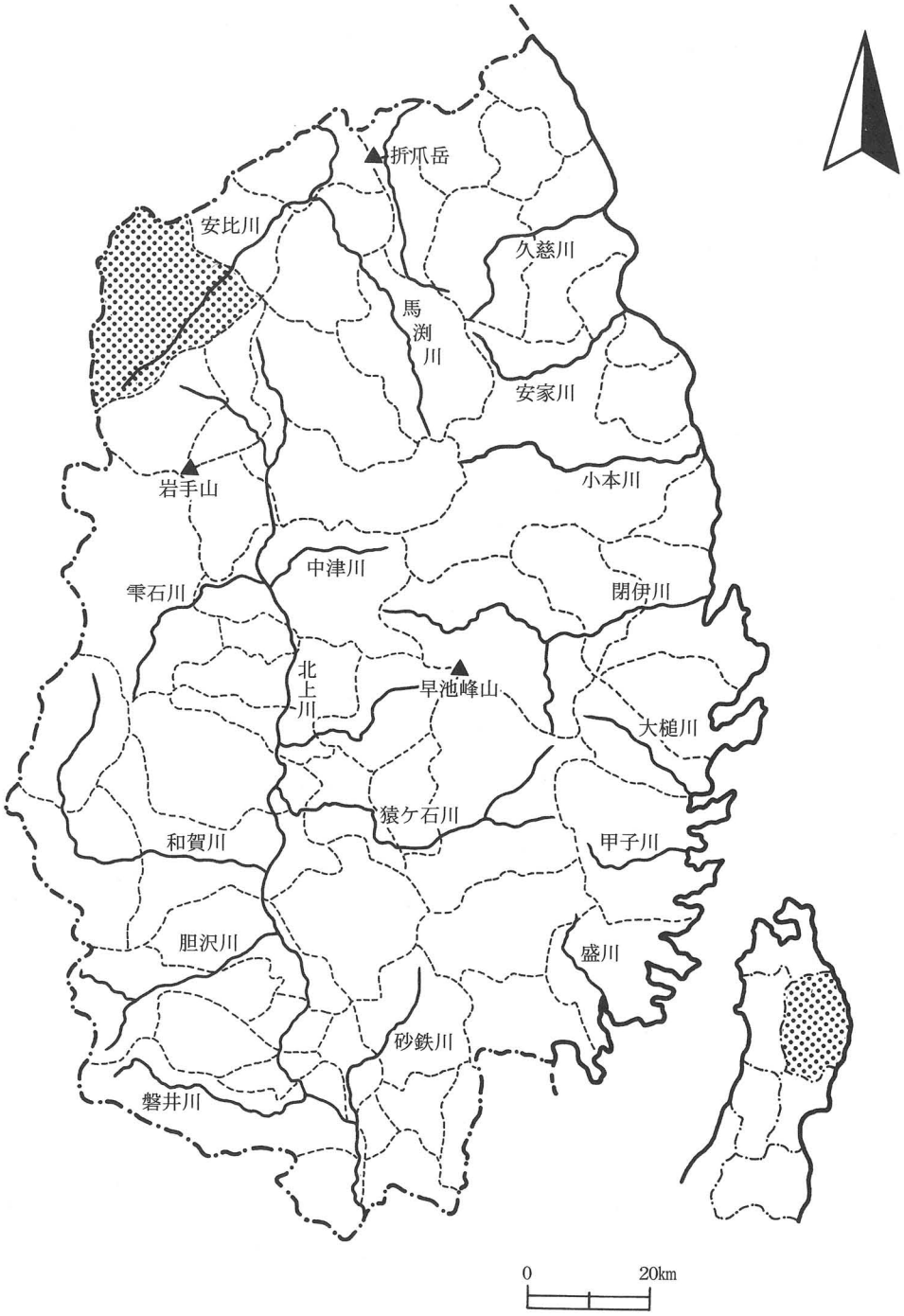
２．遺跡の立地と周辺の地形

安代町は、周囲を四角岳（1,003m）、中岳（1,024.2m）、皮投岳（1,122.4m）、呱子森（1,019m）、八幡平（1,613.6m）、源太森（1,595m）、茶臼岳（1,578m）、恵比須森（1,496m）、大黒森（1,446m）、屋ノ棟岳（1,397.4m）、西森山（1,328m）、前森山（1,304.7m）、七時雨山（1,060m）など、1,000m級の山々に囲まれている。また、町の中央部を南北に走る山々の中には、安比岳（1,458.3m）、比山（1,037.9m）、高倉山（1,051m）のように1,000mを超す山々があり、町の東部を北東に流れ太平洋に注ぐ安比川と、西流し日本海に注ぐ米代川との分水界をなしている。

安比川流域では、赤坂田・扇畑付近の東岸、曲田と目名市沢との合流地点付近、中佐井付近の東岸に河岸

段丘が、荒屋新町・中佐井付近には沖積地がそれぞれ形成されている。標高は280～400mで多くの遺跡がこの地形面に分布している。

北の城館跡は中佐井付近の東岸の河岸段丘上に位置しており、標高は289～291mで、現況は畑地、原野、山林である。



第１図　岩手県における遺跡位置図

第２図　遺跡周辺の地形図

３．基本層序

本遺跡の土層は、南西部の畑部分と北東部の館部分とで若干異なっている。それぞれの基本層序は次の通りである。なお、土層断面図は、それぞれグリッドＣⅡｂ７とＢⅣａ０で作成したものである。

＜南西部の畑部分＞

Ⅰ層　10YR2/2　黒褐色　シルト　表土である。よく締まり、粘性がある。径1㎜未満の砂粒を含む。層厚は10～15㎝である。本層下部が遺構検出面である。

Ⅱ層　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　堅く締まるが、粘性は弱い。層厚は50㎝以上である。

＜北東部の館部分＞

Ⅰ層　10YR1.7/1　黒色　シルト　表土である。よく締まり、粘性がある。層厚は12～19㎝である。

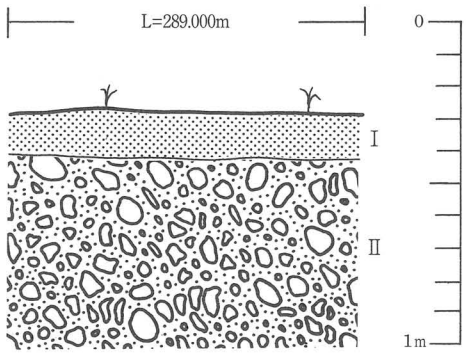
Ⅱ層　10YR2/1　黒色　シルト　よく締まり、粘性がある。黄褐色土粒を10％程度含んでいる。層厚は３～12㎝である。

Ⅲ層　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　よく締まり、粘性がある。黄褐色土粒を15～20％程度含んでいる。層厚は４～35㎝である。本層下部が遺構検出面である。

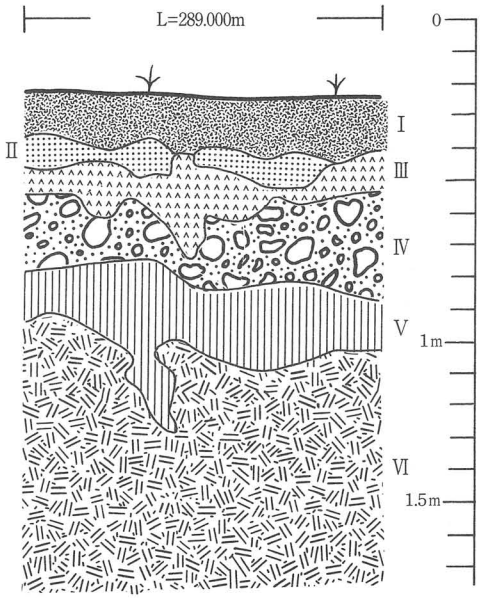
Ⅳ層　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　よく締まるが、粘性は弱い。浅黄橙色の小礫を２％程度含んでいる。層厚は８～34㎝である。Ⅲ層同様遺構検出面である。

Ⅴ層　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　よく締まるが、粘性は弱い。浅黄橙色の小礫を３％程度含んでいる。層厚は17～27㎝である。

Ⅵ層　10YR7/8　黄橙色　粘土質シルト　よく締まるが、粘性は弱い。浅黄橙色の小礫を５％程度含んでいる。層厚は50㎝以上である。



ＣⅡb7グリッド



BⅣa0グリッド

第３図　基本土層図

４．周辺の遺跡

安代町には、現在225カ所の遺跡[註1]が確認されている。時代別では縄文時代が最も多く、次いで古代、中世、近世、弥生時代となっている。これらの遺跡は、安比川と米代川、及びその支流の河川が形成した段丘上や低地に多く分布している。

安代町ではこれまで、有矢野遺跡の一部試掘（1974年）、保土沢遺跡（1975年）、東北縦貫自動車道建設に伴い調査された17遺跡（1978～1984年）、目名市遺跡（1996年）、有矢野遺跡（1998年）が調査されている。

主な遺跡を挙げると、縄文時代では有矢野遺跡（早期・前期）、小屋の畑遺跡、横間台遺跡、曲田Ⅰ遺跡（以上前期）、荒屋Ⅰ・Ⅱ遺跡、越戸Ⅱ遺跡、上の山Ⅶ遺跡（以上中期）、赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡、扇畑Ⅱ遺跡、水神遺跡、上の山Ⅶ・Ⅹ・ⅩⅠ遺跡（以上後期）、上の山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、曲田Ⅰ遺跡（以上晩期）があり、後期・晩期に属する遺跡が多い。

弥生時代では荒屋Ⅱ遺跡、上の山Ⅱ遺跡、水神遺跡、曲田Ⅰ遺跡があり、水神遺跡では竪穴住居跡、曲田Ⅰ遺跡では墓壙が検出されている。

古代では戸沢Ⅰ遺跡（奈良時代）から栗囲式比定の土師器片が出土し、又、扇畑Ⅰ遺跡、上の山Ⅶ遺跡、保土沢遺跡（以上平安時代）からは、竪穴住居跡が検出されている。遺跡数では平安時代のものが多い。

中世では城館跡があり、現在21カ所が確認されている。主な城館跡は田山館（上館・中館・下館の三郭と空堀からなる町内最大規模の館跡）、佐比内館（二重の空堀を持つ単郭式の館跡）、上の山館跡（箱堀・薬研堀・腰曲輪・犬走りなど検出）などがある。立地をみると、山地や丘陵の先端部につくられ、下位の段丘とは30～40mの比高差を持つ館跡が多い。

近世では一里塚や番所跡がある。主なものを挙げると、一里塚は七時雨一里塚、荒屋一里塚、曲田一里塚、番所跡では田山番所跡がある。

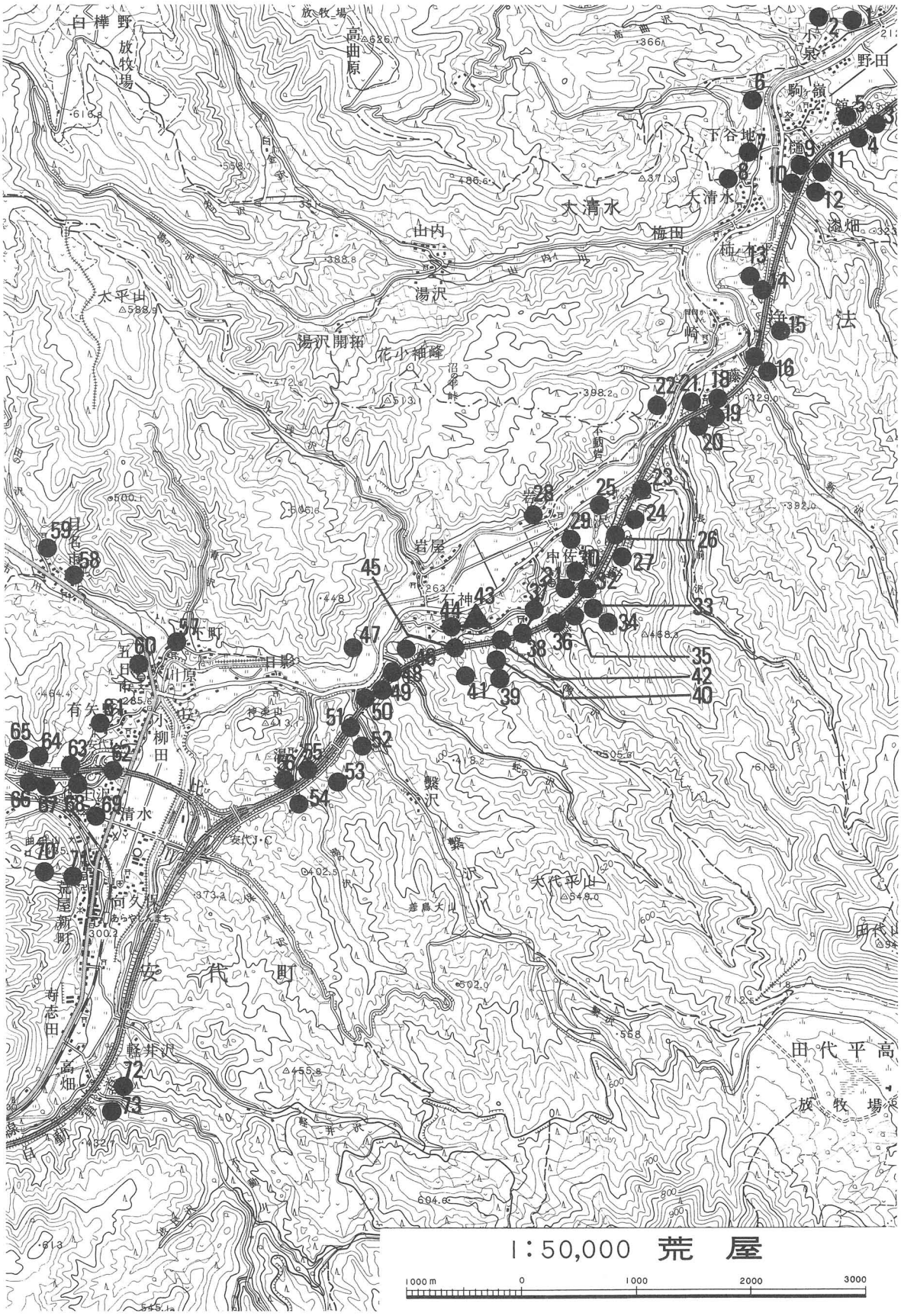
北の城館跡は安比川流域に位置しており、同流域には北の城館跡の他に、石神Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡、水神遺跡、八幡館跡、上の山館跡（以上安代町）、柿の木平Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、五庵Ⅰ・Ⅱ遺跡（以上浄法寺町）などがある。

第１表は、北の城館跡周辺の遺跡（安代町、浄法寺町）についてまとめたものである。なお、遺跡の位置については第４図に示してある。

註１　岩手県教育委員会生涯学習文化課の遺跡台帳2000年度版による。

引用・参考文献

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1985）：『柿の木平Ⅲ遺跡発掘調査報告書』　岩埋文第89集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1986）：『関沢口遺跡発掘調査報告書』　岩埋文第95集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『目名市Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　岩埋文第261集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）：『横間Ⅱ遺跡・谷地田Ⅰ遺跡・有矢野遺跡・有矢野館跡発掘調査報告書』　岩埋文第303集



第４図　周辺の遺跡位置図

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	種　　別	時　　代	遺　構・遺　物　等
1	小泉館	城館跡、散布地	縄文・中世	縄文土器、スクレイパー、単郭、空堀
2	小泉	散布地	縄文	縄文土器
3	五庵Ⅱ	集落跡	縄文～近世	竪穴住居跡（古代、中近世）、掘立柱建物跡
4	五庵Ⅰ	散布地	縄文～近世	竪穴住居跡（縄文、平安）、土坑
5	駒ヶ嶺館	城館跡	中世	二郭（八幡館、大館、西館、新城館）、堀
6	大清水館	城館跡	中世	三郭（建物跡）、空堀
7	下谷地	散布地	縄文	縄文土器（後期）
8	大清水	集落跡	縄文	縄文土器、石器、猿形土製品
9	田余内Ⅰ	集落跡	縄文～古代	陥し穴、竪穴住居跡（平安）
10	漆畑	散布地	縄文	縄文土器（前期末）
11	田余内Ⅱ	散布地	縄文～古代	石器、縄文土器、土師器
12	田余内Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晩期）
13	柿の木平館	城館跡	中世	単郭、空堀
14	柿の木平Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晩期）
15	柿の木平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
16	柿の木平Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
17	柿の木平Ⅲ	狩猟場	縄文	陥し穴、土坑、配石遺構
18	下藤館	城館跡	中世	腰郭、空堀
19	下藤Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晩期）
20	下藤Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
21	下藤Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
22	門崎	散布地	縄文	縄文土器
23	土沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晩期）
24	水神	集落跡	縄文、弥生	縄文土器（中期～後期）、土坑、陥し穴
25	土沢Ⅱ	散布地	縄文、近世	縄文土器（後期～晩期）、石器
26	土沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期～晩期）
27	山岸Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期～晩期）、石器
28	下の田	散布地	縄文	縄文土器（後期）
29	下の田館	城館跡、集落跡	縄文、中世	縄文土器（後期、晩期）
30	中佐井Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器（後期、晩期）
31	中佐井Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器（前期～後期）、石器
32	中佐井Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器
33	中佐井Ⅴ	集落跡	縄文	縄文土器
34	山岸Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器（後期、晩期）
35	中佐井Ⅳ	集落跡	縄文	縄文土器（中期～後期）
36	山ノ神	集落跡	縄文、平安	縄文土器（後期、晩期）
37	古屋敷	散布地	縄文、平安	縄文土器（前期～後期）、土師器
38	関沢口	集落跡	縄文、平安、近世	縄文土器（中期、後期）、墓壙、鍋被り人骨
39	石神Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器
40	石神Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（前期）
41	石神Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器（後期、晩期）
42	石神Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（前期末）
43	**北の城館跡**	**城館跡、集落跡**	**平安、中世**	**縄文土器、竪穴住居跡（平安、中世）、堀跡**
44	八幡館跡	城館跡、散布地	縄文、中世	縄文土器（前期、中期）、平場、土坑、土塁、堀跡
45	石神Ⅱ	散布地	縄文～近世	縄文土器、鉄製品、古銭
46	山口	散布地	縄文	縄文土器（後期、晩期）、石器
47	岩屋	散布地	縄文	
48	日影Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器

番号	遺　跡　名	種　　別	時　　代	遺　構・遺　物　等
49	繋沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（中期）
50	日影Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
51	日影Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
52	繋沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
53	湯の沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
54	湯の沢Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器（中期、後期）
55	湯の沢Ⅲ	集落跡	縄文、近世	縄文土器（中期、後期、晩期）
56	湯の沢Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器（中期、後期）
57	五日市館	城館跡	中世	平場、空堀
58	目名市館	城館跡	中世	
59	目名市Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
60	有矢野館	城館跡、散布地	縄文、中世	縄文土器（後期）、空堀、平場、土師器
61	有矢野	集落跡、キャンプ	縄文、古代	縄文土器（早期、前期、中期、後期）
62	保土坂	集落跡	縄文	縄文土器
63	上の山Ⅹ	散布地	縄文、古代	縄文土器、古代
64	上の山Ⅷ	散布地	縄文、古代	縄文土器（中期、後期）、古代土器
65	上の山Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器（後期）、剥片石器
66	上の山Ⅸ	散布地	縄文	縄文土器（中期、後期）、江戸（スリバチ）
67	上の山館	城館跡、集落跡	縄文、古代	縄文土器（中期）
68	荒屋一里塚	一里塚	近世	
69	保土沢	散布地	古代	土師器
70	荒屋館	散布地	縄文	縄文土器、土師器
71	瀬戸谷地窯	窯跡	近世	近世陶器
72	荒屋Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（前期、中期）
73	荒屋Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（前期、中期）

Ⅲ　野外調査と室内整理の方法

１．野外調査

(1) グリッドの設定

基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。調査区域南西部に基準点１を、中央部に基準点２をそれぞれ設定した。基準点の成果値（日本測地系）は以下の通りである。

基準点１　　X＝13,148.000　　Y＝21,940.000　　H＝290.612m

基準点２　　X＝13,184.000　　Y＝21,980.000　　H＝289.562m

基準点１から西に36m進み、更に北へ128m進んだ点を原点とした。原点から東－西、南－北に平行ないし直行するように40m毎に区切り、大区画とした。大区画を更に4m毎に区切り、小区画とした。

グリッドの名称は南北方向はアルファベッド、東西方向は数字を用い、その組み合わせによった。大グリッド名は大文字のアルファベッドとローマ数字、小グリッド名は大グリッド名を冠した後、小文字のアルファベッドと算用数字を用いて、ＡＩｂ２のように表した。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内の数カ所にトレンチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行った。遺構検出面までの土層の除去は人力で行った。遺構の検出面はⅢ層下部及びⅣ層である。検出された遺構には検出順に１号住居跡のように命名した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は竪穴住居跡・住居状遺構を４分法、土坑・柱穴状遺構を２分法、溝跡・堀跡については数カ所に土層確認のためのベルトを残して掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは、遺構内のものは遺構名、遺構外のものは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実測

実測は簡易遣り方測量で行った。実測図は原則として20分の1の縮尺で平面図・断面図を作成したが、住居跡のカマドなどの細部については10分の1、堀跡の平面図については40分の1の縮尺で図面を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影には、６×７㎝モノクロ１台、35㎜判のモノクロとカラーリバーサル各１台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

２．室内整理

（1）作業手順

遺構については、現地で作成した実測図の点検、合成、第２原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については、接合、復元、仕分け、登録を行った後、原則として実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

（2）遺構図版・遺物図版

本報告書に掲載した遺構図版の縮尺は以下のとおりである。

・竪穴住居跡、住居状遺構の平面図・断面図……1/60　　カマドの断面図……1/30

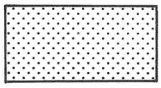
・土坑、柱穴状小土坑の平面図・断面図……1/40

・溝跡の平面図……1/40　　断面図……１/40

・堀跡の平面図……1/80、1/160　　断面図……1/40、1/80

また、遺物図版の縮尺は、土器は1/2又は1/3、拓本は1/3、石器・鉄製品は1/2である。遺物写真は原則として1/3の縮尺を用いたが、これに該当しないものには縮尺率を別に付してある。遺構やその他の写真の縮尺は不定である。なお、遺物図版掲載番号と写真図版掲載番号とは統一してある。

遺構図版における土層断面図には、層位ごとに数字を付して色調、土性、混入物等を記してある。遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの種別と土器実測図の凡例は第５図のとおりである。

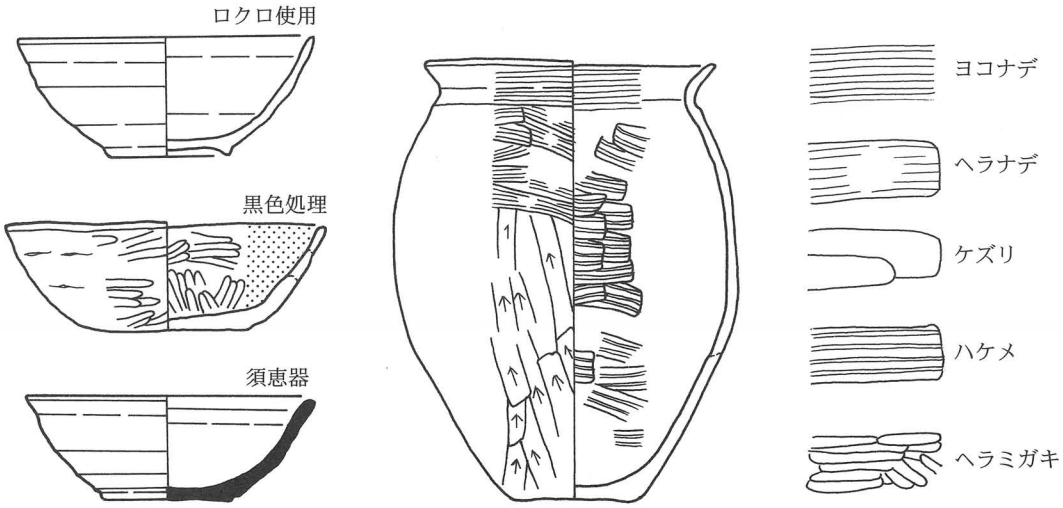


焼土

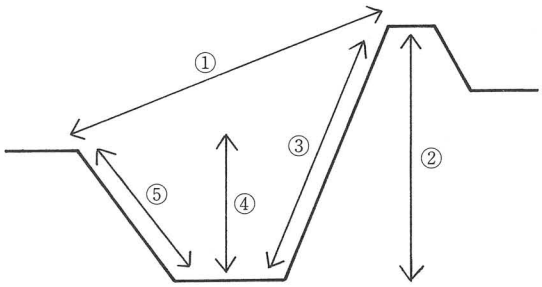
Pm 十和田a降下火山灰

S 礫

P 土器

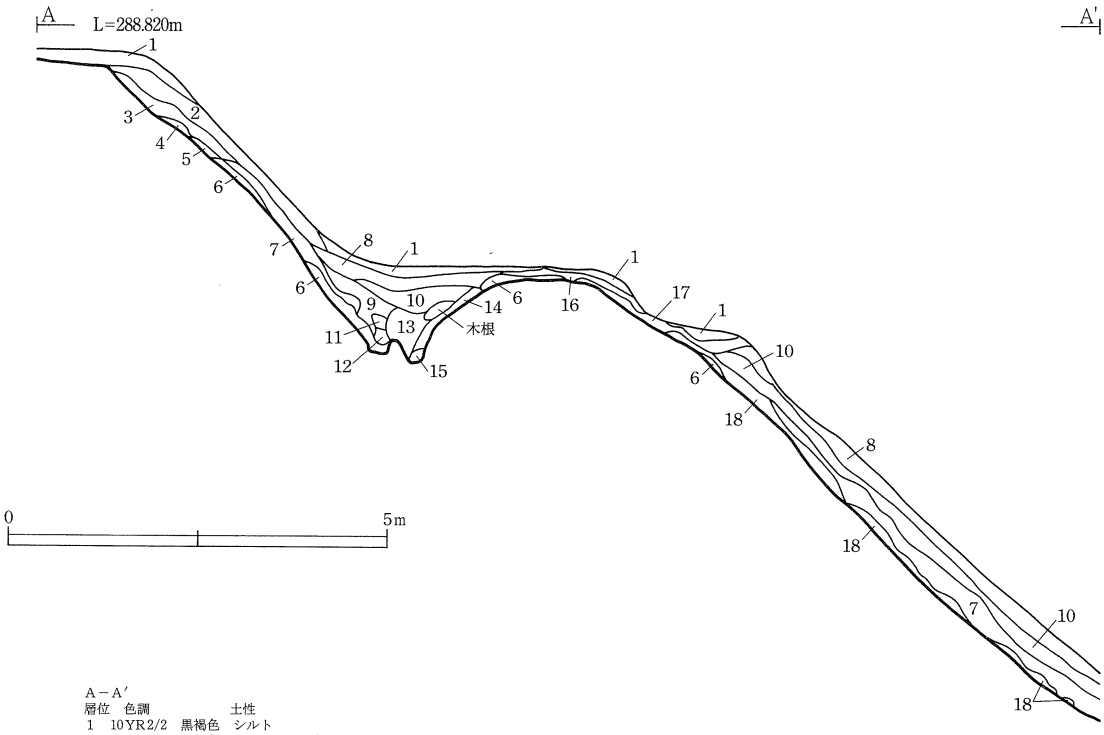


〈堀跡〉



① 実効堀幅
② 垂直塁壁高
③ 実効法高
④ 垂直高
⑤ 外壁法高

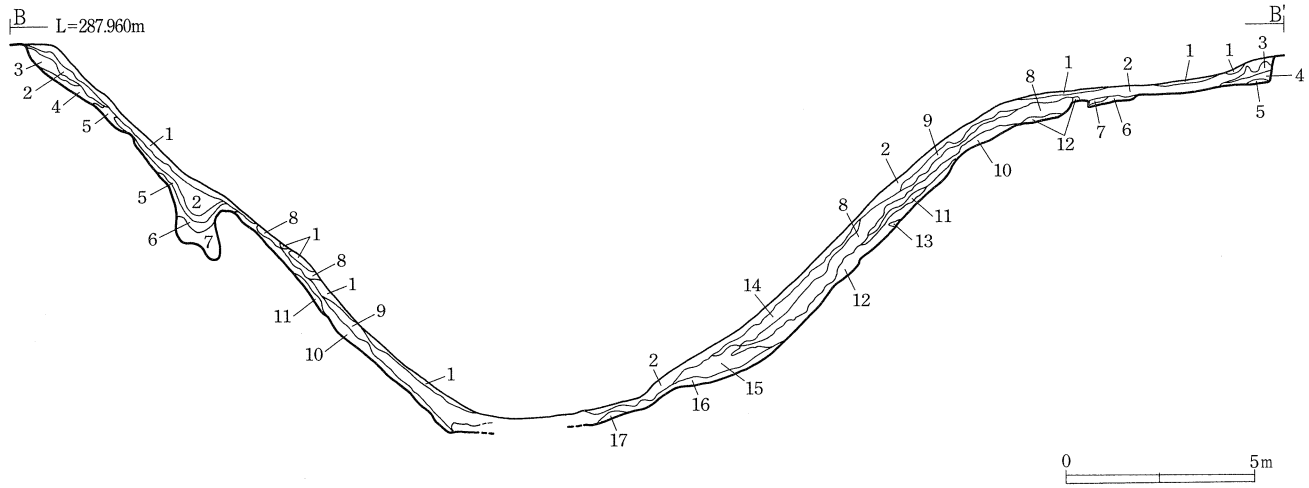
第５図　スクリーントーン・土器実測図凡例



A－A′

層位	色調	土性
1	10YR2/2	黒褐色　シルト
2	10YR2/3	黒褐色　シルト　明褐色土(7.5YR5/8)含(5%)
3	7.5YR5/8	明褐色　粘土質シルト　極暗褐色土(7.5YR2/3)含(1%)
4	10YR6/6	明黄褐色　粘土質シルト　浅黄橙色土(10YR8/4)含(2%)
5	10YR6/3	にぶい黄橙色
6	10YR6/4	にぶい黄橙色　浅黄橙色土(10YR8/4)含(1%)
7	黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)との混土	にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(5%)
8	黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)との混土	黒褐色土(10YR2/2)含(1%)
9	黒色土(10YR2/1)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)との混土	にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(3%)
10	10YR1.7/1	黒色　シルト　暗褐色土(10YR3/3)含(3%)
11	10YR2/1	黒色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(1%)
12	10YR2/2	黒褐色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(3%)
13	10YR2/1	黒色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(3%)
14	10YR6/6	明黄褐色　粘土質シルト　暗褐色土(10YR3/3)含
15	10YR6/3	にぶい黄橙色　砂質シルト　暗褐色土(10YR3/3)含
16	黒褐色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/4)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土	
17	10YR5/8	黄褐色　粘土質シルト　暗褐色土(7.5YR3/4)含(30%)
18	にぶい黄褐色土(10YR5/3)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土	

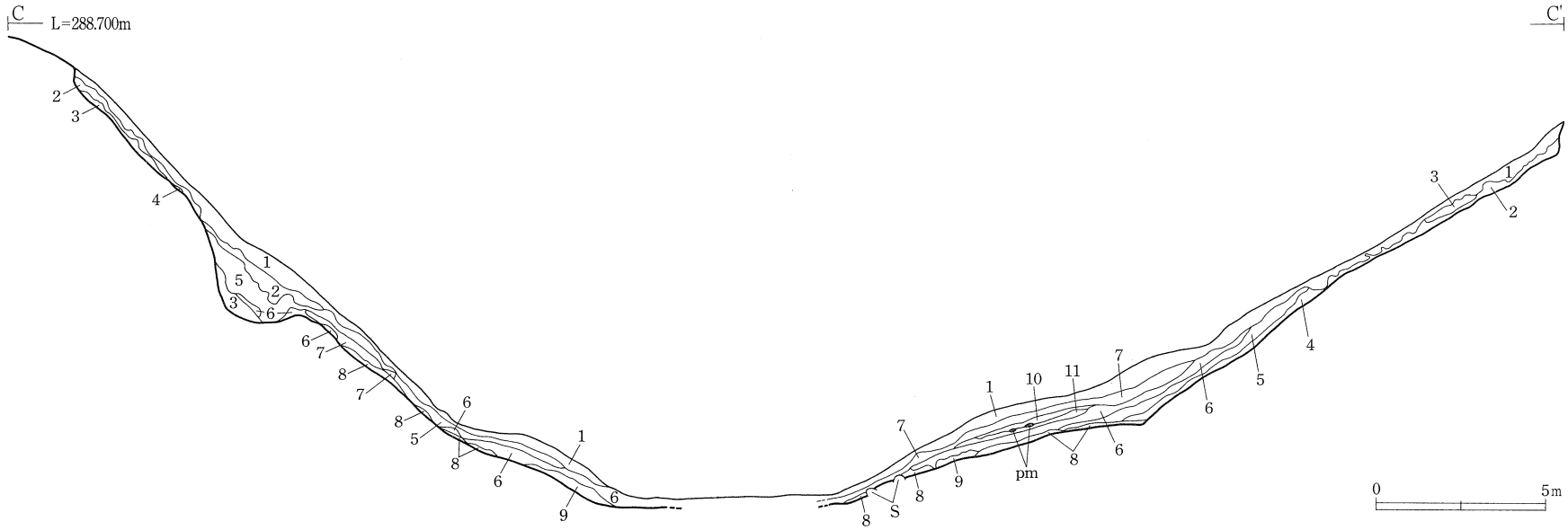
第６図　郭斜面断面図（１）



B－B′

層位	色調	土性
1	10YR2/2	黒褐色　シルト　やわらかく締まりなし
2	黒褐色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/3)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土	
3	黄橙色(10YR8/6)と褐色土(10YR4/6)の混土	
4	明黄褐色土(10YR6/6)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土	
5	にぶい黄橙色土(10YR6/3)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土	
6	明黄褐色土(10YR6/6)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土	
7	褐色土(10YR4/6)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)の混土	
8	褐色土(7.5YR4/4)と黒褐色土(7.5YR2/2)と橙色土(7.5YR6/6)の混土	
9	10YR2/3　黒褐色　シルト　暗褐色土(10YR3/3)含(2%)	
10	にぶい黄橙色土(10YR6/4)と褐色土(10YR4/4)と暗褐色土(10YR3/3)の混土	
11	黄褐色土(10YR5/6)と明黄褐色土(10YR6/6)の混土	
1	10YR2/1　黒色　シルト　灰黄褐色土(10YR4/2)含(2%)	
2	7.5YR2/2　黒褐色　シルト	
3	7.5YR2/3　極暗褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/8)含(2%)	
4	7.5YR2/3　極暗褐色　シルト　褐色土(7.5YR4/6)含(1%)	
5	7.5YR2/3　極暗褐色　シルト　褐色土(7.5YR4/6)含(25%)　黒褐色土(10YR2/2)含(15%)	
6	7.5YR2/3　極暗褐色　シルト	
7	黄褐色土(10YR5/6)と褐色土(10YR4/4)と明黄褐色土(10YR6/6)の混土	
8	10YR3/3　暗褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/8)含(2%)	
9	黒褐色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/6)の混土	
10	10YR2/2　黒褐色　シルト　やわらかく締まりなし	
11	暗褐色土(10YR3/4)と褐色土(10YR4/6)とにぶい黄橙色土(10YR7/4)の混土	
12	10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　褐色土(10YR4/6)含(5%)　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(3%)	
13	にぶい黄橙色土(10YR6/4)と暗褐色土(10YR3/3)の混土　かたく締まりあり	
14	10YR1.7/1　黒色　シルト	
15	10YR2/2　黒褐色　シルト　暗褐色土(10YR3/3)含(1%)　にぶい黄褐色土(10YR5/4)含(1%)	
16	10YR3/3　暗褐色　シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含(5%)　黒褐色土(10YR2/2)含(2%)	
17	暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/6)とにぶい黄橙色(10YR6/4)の混土	

第７図　郭斜面断面図（２）



C－C′

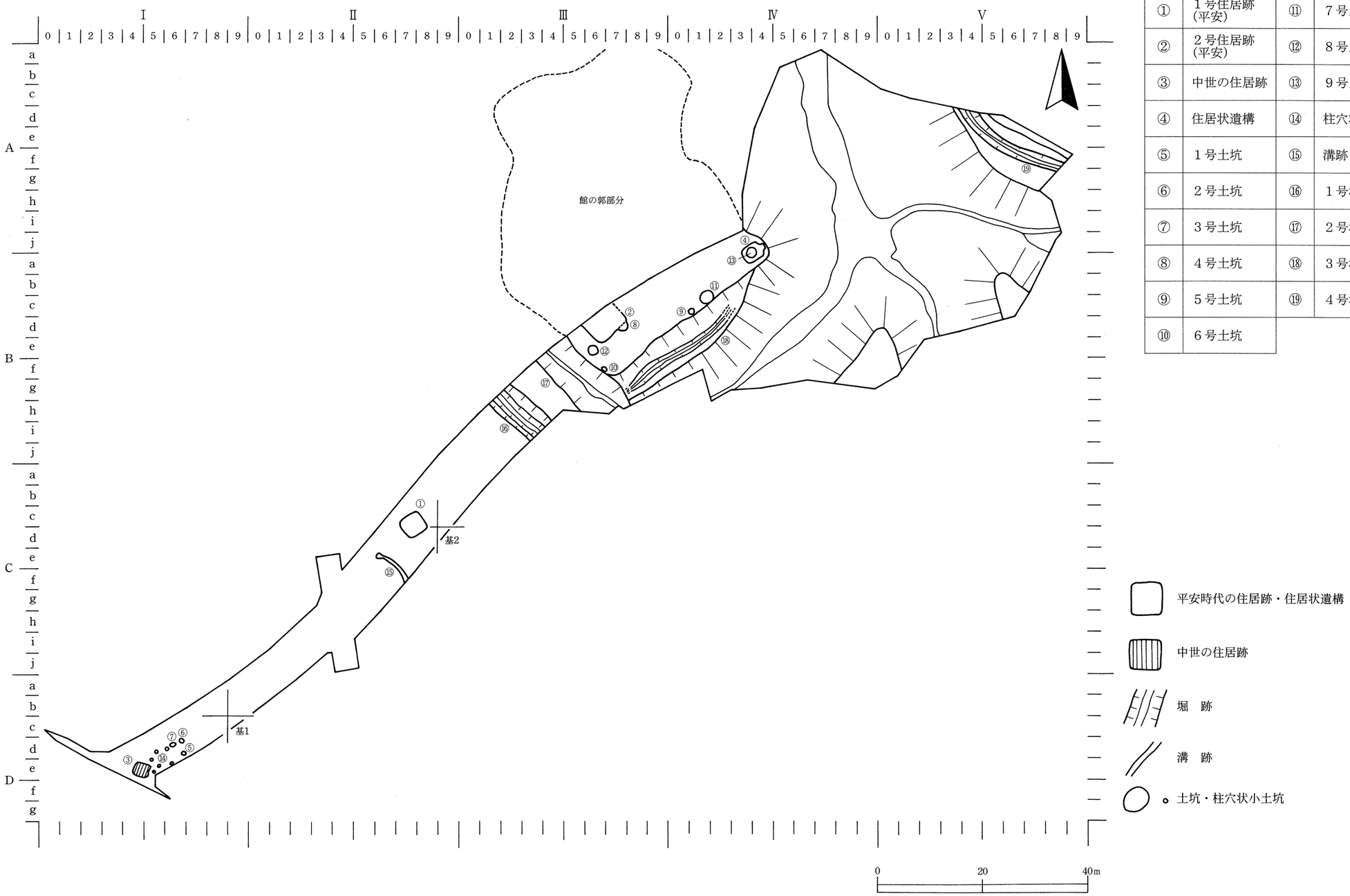
層位	色調	土性
1	10YR2/2 黒褐色	シルト
2	10YR2/3 黒褐色	シルト
3	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト
4	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト
5	黒色土(10YR2/1)と褐色土(10YR4/4)と褐色土(10YR4/6)の混土	
6	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト　黒褐色土(10YR2/3)含(3%)
7	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト
8	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含む
9	黄褐色土(10YR5/8)と褐色土(10YR4/4)の混土	

1　10YR2/3　黒褐色　シルト
2　黄褐色土(10YR5/8)と明黄褐色土(10YR6/6)の混土
3　暗褐色土(10YR3/4)と褐色土(10YR4/4)の混土
4　暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/6)の混土
5　黒褐色土(10YR2/3)と暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/6)の混土
6　黒褐色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/4)の混土
7　10YR2/1　黒色　シルト　かたく締まりあり
8　暗褐色土(10YR3/3)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)の混土
9　黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)の混土
10　10YR2/1　黒色　シルト　砂質のにぶい黄橙色土(10YR6/4)含(2%)
11　10YR2/1　黒色　シルト　砂質のにぶい黄橙色土(10YR6/4)含(5%)

第８図　郭斜面断面図（３）

273.98
273.95
274.76
275.51
276.33
276.74
278.54
278.02
279.05
286.49
287.15
281.12
287.30
287.72
288.56
288.55
288.31
288.60
288.47
288.30
288.68
288.60
287.47
288.68
288.59
286.02
288.62
286.03
288.85
285.48
288.83
288.84
285.00
282.50
280.00
277.50
287.50
A
A'
B
B'
C
C'
0
20m
1:350

第９図　地形測量図



番号	遺　構　名	番号	遺　構　名
①	1号住居跡(平安)	⑪	7号土坑
②	2号住居跡(平安)	⑫	8号土坑
③	中世の住居跡	⑬	9号土坑
④	住居状遺構	⑭	柱穴状小土坑
⑤	1号土坑	⑮	溝跡
⑥	2号土坑	⑯	1号堀跡
⑦	3号土坑	⑰	2号堀跡
⑧	4号土坑	⑱	3号堀跡
⑨	5号土坑	⑲	4号堀跡
⑩	6号土坑		

第10図　北の城館跡遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と出土遺物

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡（２棟）、中世の竪穴住居跡（1棟）、住居状遺構（１棟）、土坑（９基）、柱穴（６基）、溝跡（1条）、堀跡（４条）である。出土した遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品である。

１．平安時代の竪穴住居跡

１号住居跡

遺構（第11図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＣⅡｃ７・ｃ８・ｄ７・ｄ８に位置する。Ⅰ層下部からⅡ層上部にかけて黒褐色土と黄褐色土の混土の広がりとして確認され、床面と掘り方のみの検出である。

＜重複関係＞　なし。

＜平面形・規模＞　平面形は隅丸方形で、規模は4.3×4.45mである。

＜埋土＞　11層に細分される。黒褐色土と黄褐色土の混土が主体で、締まりがなく、粘性は弱い。木根による撹乱を受けている。

＜壁＞　掘り方のみの検出であり、壁高は不明であるが、南東壁及び南西壁が他より深く掘り込まれている。

＜床面＞　黄褐色土である。少し凹凸があるが、ほぼ平坦である。全体に締まりに欠け、粘性も弱い。

＜柱穴・土坑＞　Ｐ１～Ｐ４まで４個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径26×30cm～34×37cm、深さ56.5～72.5cmである。埋土は黄褐色土粒を含んだ黒褐色土や暗褐色土である。この４個が主柱穴と考えられる。柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

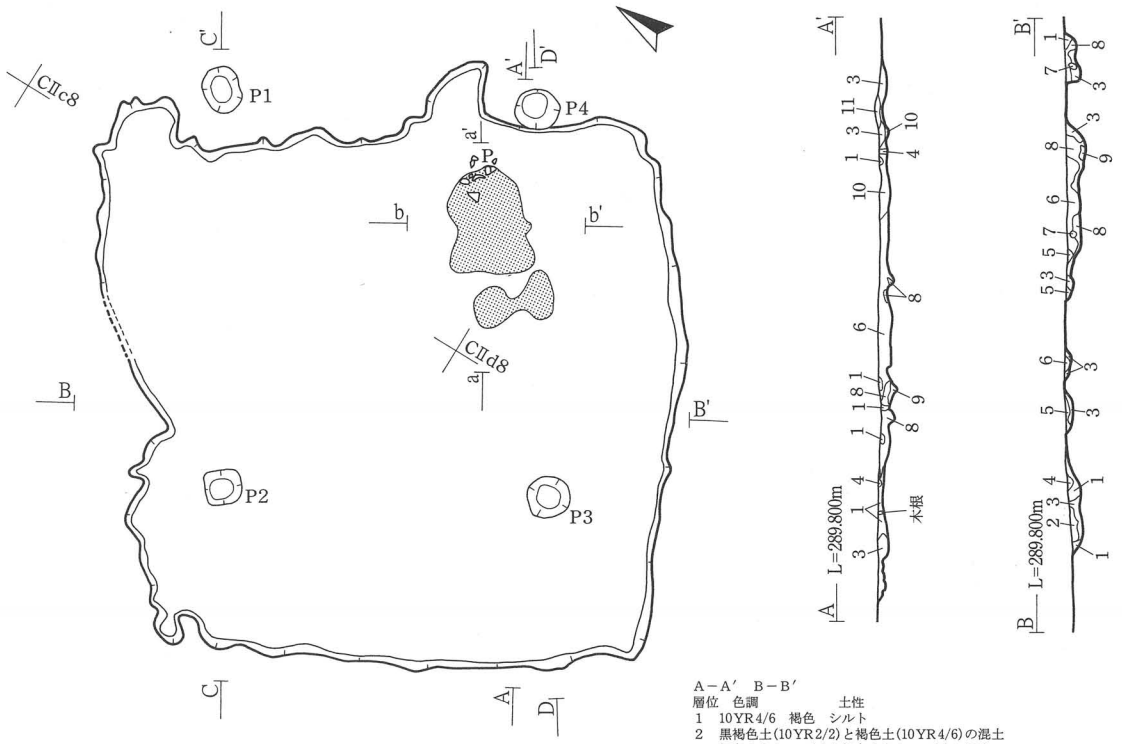
単位：cm

番　　号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４
径	28 × 38	26 × 30	33 × 33	34 × 37
深　　さ	63.7	72.5	63.1	56.5

＜カマド＞　北東壁南東寄りに構築されていたと考えられ、燃焼部の焼土だけが残存している。焼土は２カ所検出された。規模・形状は、壁の近くで検出された焼土が径65×82cmの不整形で厚さ10cm、もう一つは径39×65cmの不整形で厚さ4cmである。どちらの焼土もよく焼成している。

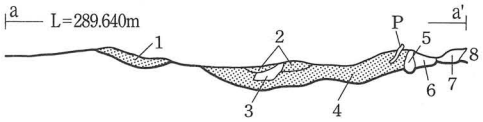
遺物（第12図、写真図版19）

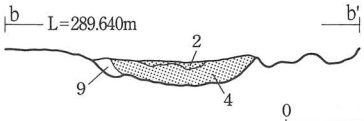
土器１～３が出土している。ロクロ不使用の土師器甕である。１は体部上半部に体部最大径を持つと考えられる。口縁部は約１cmで、頸部から外反している。胎土には径１～４mmの砂粒を多量に含んでいる。内面は頸部から口縁部にかけて煤け、炭化物が付着している。２は底部から僅かに外傾して立ち上がっている。内外両面とも摩耗しており、調整ははっきりしない。外面は一部煤けており、底部には木葉痕が残っている。３は底部から外傾して立ち上がっており、10cm位から僅かに内湾している。外面は煤け、全体が摩耗しており、調整ははっきりしない。いずれもカマド跡の焼土上からの出土である。



A－A′　B－B′
層位　色調　　土性
1　10YR4/6　褐色　シルト
2　黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/6)の混土
3　褐色土(10YR4/4)と褐色土(10YR4/6)の混土
4　10YR1.7/1　黒色　シルト
5　10YR4/4　褐色　シルト
6　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/6)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土
7　黄褐色土(10YR5/6)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土
8　黒褐色土(10YR2/3)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土　焼土粒含(5%)
9　黒褐色土(10YR2/3)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土
10　10YR2/2　黒褐色　シルト　焼土粒含(1%)　褐色土(10YR4/6)含(2%)
11　7.5YR2/2　黒褐色　シルト　黒色土(10YR1.7/1)含(1%)

0　2m

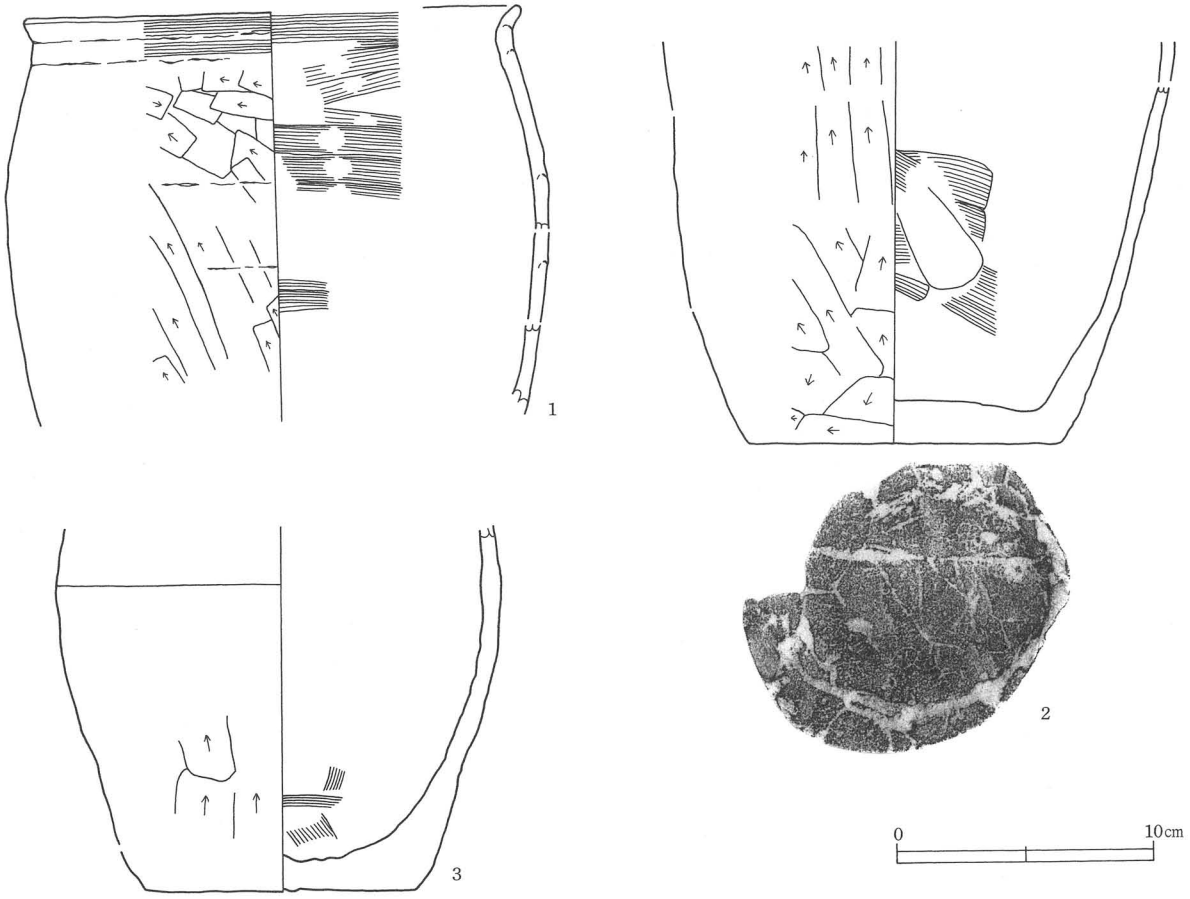




0　1m

a－a′　b－b′
層位　色調　　土性
1　5YR5/8　明赤褐色　シルト　焼土
2　5YR5/6　明赤褐色　シルト　焼土
3　7.5YR3/4　暗褐色　シルト　(木根撹乱)
4　5YR4/8　赤褐色　シルト　焼土
5　10YR1.7/1　黒色　シルト
6　7.5YR3/4　暗褐色　シルト　焼土粒含(5%)
7　7.5YR3/2　黒褐色　シルト
8　10YR3/4　暗褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(5%)
9　7.5YR3/3　暗褐色　シルト　焼土粒含(7%)　黒色土(10YR1.7/1)含(1%)

第11図　1号住居跡



第12図　１号住居跡出土遺物

時期

出土遺物から平安時代と考えられる。

２号住居跡

遺構（第13図、写真図版７・８）

＜位置・検出状況＞　調査区域グリッドＢⅢｄ６・ｃ７・ｄ７にまたがって位置する。Ⅲ層面で黒色土の広がりとして検出された。遺構の北西側半分は調査区域外に延びており、北東部の一部は撹乱されている。

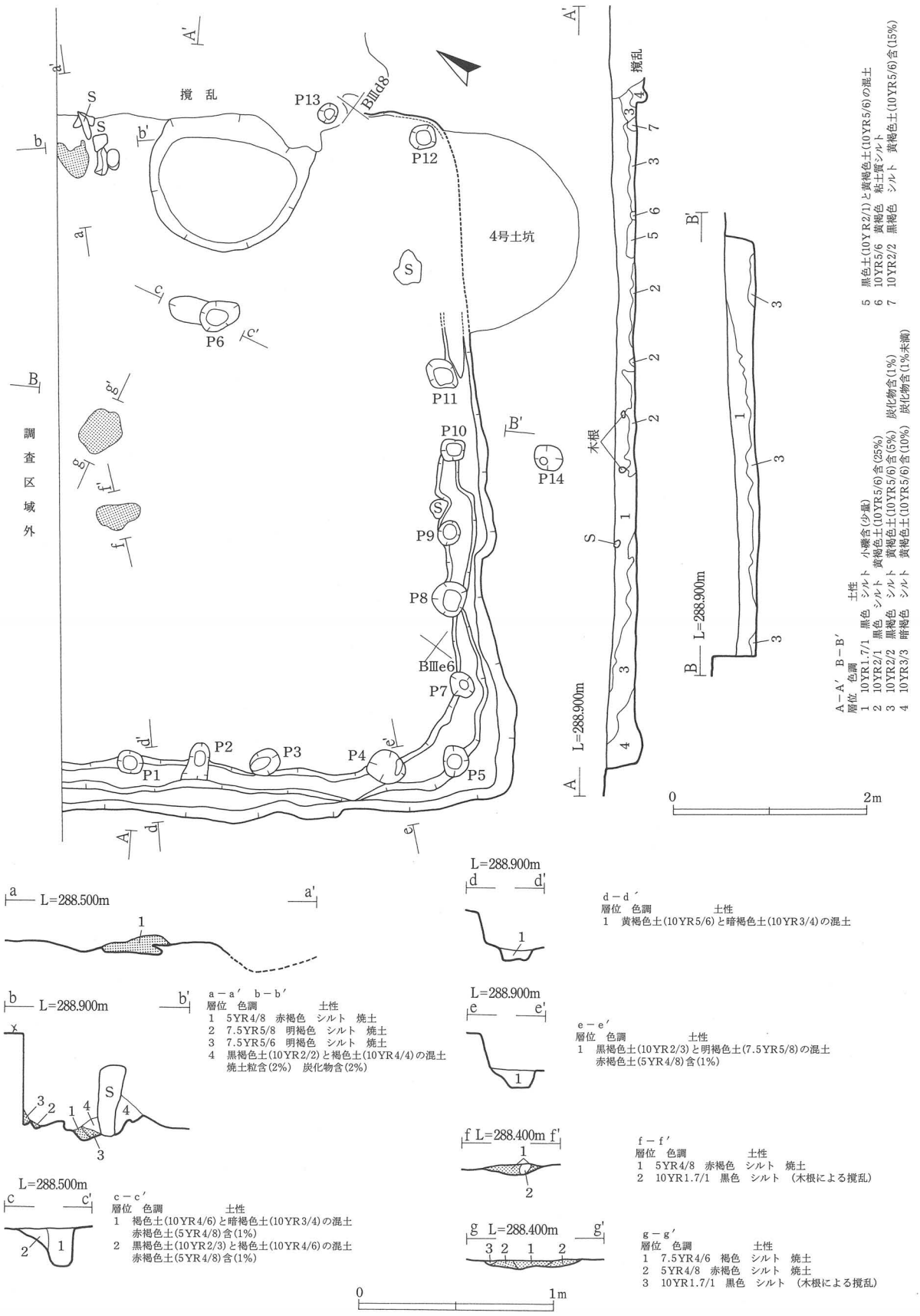
＜重複関係＞　南西部の床面下から４号土坑が検出されている。

＜平面形・規模＞　平面形は隅丸方形で、規模は（4.7）×7.2mと推定される。

＜埋土＞　7層に細分される。黒色土が主体で、全体によく締まり、粘性もある。

＜壁＞　ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は28.4～47.6cmで、南西壁が最も高い。北東壁は撹乱され残存しない。

＜床面＞　黄褐色土である。凹凸が少なく平坦で、全体によく締まっている。中央部で焼土を２カ所検出している。１カ所は径38×47cmの不整形で、厚さは４cm、もう１カ所は径26×45cmの不整形で、厚さは５cmである。いずれも性格は不明である。



A－A′　B－B′
層位　色調　　土性
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　小礫含(少量)
2　10YR2/1　黒色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(25%)
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(5%)　炭化物含(1%)
4　10YR3/3　暗褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(10%)　炭化物含(1%未満)
5　黒色土(10YR2/1)と黄褐色土(10YR5/6)の混土
6　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト
7　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(15%)

a－a′　b－b′
層位　色調　　土性
1　5YR4/8　赤褐色　シルト　焼土
2　7.5YR5/8　明褐色　シルト　焼土
3　7.5YR5/6　明褐色　シルト　焼土
4　黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/4)の混土
焼土粒含(2%)　炭化物含(2%)

c－c′
層位　色調　　土性
1　褐色土(10YR4/6)と暗褐色土(10YR3/4)の混土
赤褐色土(5YR4/8)含(1%)
2　黒褐色土(10YR2/3)と褐色土(10YR4/6)の混土
赤褐色土(5YR4/8)含(1%)

d－d′
層位　色調　　土性
1　黄褐色土(10YR5/6)と暗褐色土(10YR3/4)の混土

e－e′
層位　色調　　土性
1　黒褐色土(10YR2/3)と明褐色土(7.5YR5/8)の混土
赤褐色土(5YR4/8)含(1%)

f－f′
層位　色調　　土性
1　5YR4/8　赤褐色　シルト　焼土
2　10YR1.7/1　黒色　シルト　(木根による撹乱)

g－g′
層位　色調　　土性
1　7.5YR4/6　褐色　シルト　焼土
2　5YR4/8　赤褐色　シルト　焼土
3　10YR1.7/1　黒色　シルト　(木根による撹乱)

第13図　2号住居跡

＜壁溝＞　南西壁際及び南東壁際に壁溝が巡っている。規模は上幅20～47cm、下幅12～30cm、深さ4.3～17.2cmである。なお、本壁溝は南東壁際のＰ10とＰ11の間では確認されない。

＜柱穴・土坑＞　Ｐ1～Ｐ14の14個検出された。壁際からの検出がほとんどである。平面形は円形や隅丸方形で、規模は径18×22cm～35×39cm、深さ17.8～70cmである。Ｐ10、Ｐ11付近は出入り口の可能性がある。

柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

単位：cm

番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９	Ｐ10
径	23 × 27	25 × 37	26 × 32	35 × 39	26 × 32	30 × 42	24 × 30	33 × 36	23 × 26	23 × 24
深さ	41.8	35.8	34.1	39.2	59	41	35.6	68.2	17.8	59.4

番号	Ｐ11	Ｐ12	Ｐ13	Ｐ14
径	27 × 31	25 × 27	18 × 22	26 × 30
深さ	70	—	23	21.9

＜カマド＞　北東壁中央部に設置されていたものと考えられる。本体及び煙道部は撹乱され、袖部の一部と芯材として使用された礫が5個残存するのみである。燃焼部の焼土は径30×45cmの不整形に広がり、厚さは10cmでよく焼成している。

遺物（第14図、写真図版19）

土器４と鉄製品５が出土している。

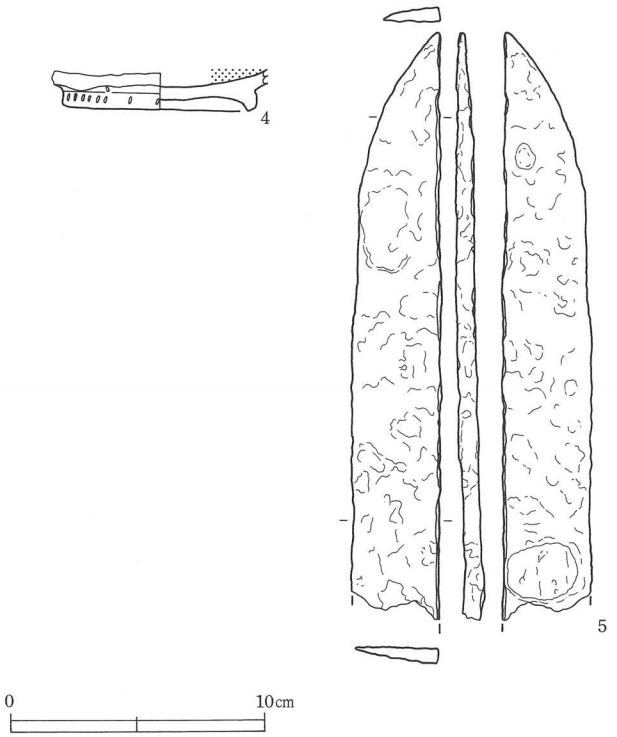
４は土師器坏である。高さ５㎜の高台がついており、台部外面には、幅１㎜、長さ３㎜の刻みが１cm間隔で施されている。内面は黒色処理されており、底部外面は煤けている。時期は10世紀頃と考えられる。

５は刀剣である。平造りと考えられ、棟は角棟である。残存長23cm、幅3.4cm、厚さ６㎜である。

４は床直上、５は南東壁際の床直上からの出土である。

時期

出土遺物が２点であり、詳しい時期を特定することはできないが、周辺から10世紀頃の土師器坏が出土していることから、本遺構も同時期と考えられる。



第14図　２号住居跡出土遺物

２．中世の竪穴住居跡

遺構（第15図、写真図版９）

＜位置・検出状況＞　調査区域南西部隅グリッドＤＩｅ４・ｅ５に位置する。Ⅱ層面で黒色土と黄褐色土の混土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞　なし。

＜平面形・規模＞　平面形は隅丸方形で、規模は3.0×3.1mである。

＜埋土＞　９層に細分される。黒色土と黄褐色土の混土が主体で、全体に締まりに欠ける。

＜壁＞　ほぼ垂直気味に立ち上がっている。壁高は14.1～31.6cmである。南東壁の一部は張り出しており、出入り口の可能性がある。

＜床面＞　黄褐色土である。凹凸があるが平坦でよく締まっている。

＜柱穴・土坑＞　Ｐ１～Ｐ12の12個検出された。平面形は円形・楕円形・隅丸方形で、規模は径20×22cm～50×57cm、深さ9.4～65.9cmである。柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

単位：cm

番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９	Ｐ10
径	30 × 43	20 × 22	25 × 30	30 × 32	29 × 35	28 × 31	28 × 38	28 × 30	27 × 30	50 × 57
深さ	60.6	28.2	23.6	57.3	65.9	58.7	59.8	58.8	64.6	9.4

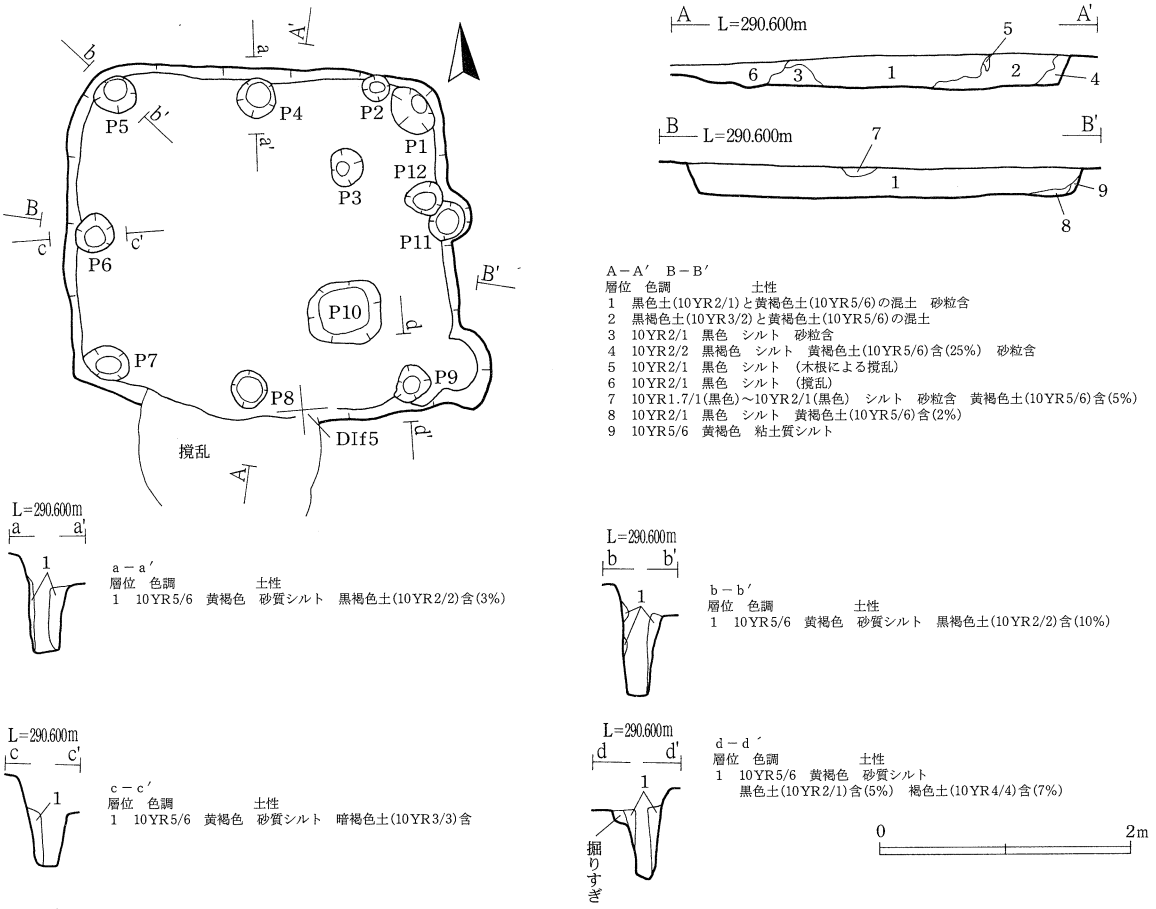
番号	Ｐ11	Ｐ12
径	28 × 31	26 × 30
深さ	45.8	50

遺物

出土遺物はない。

時期

出土遺物はなく、詳しい時期は特定できないものの類例から中世と思われる。



第15図　中世の竪穴住居跡

3．住居状遺構

遺構（第16図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞　調査区域中央部から北東部グリッドAⅣｊ３・ｊ４、BⅣａ３・ａ４にまたがって位置する。館跡の郭の平場隅からの検出である。Ⅲ層面で、黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞　床面から９号土坑が検出されている。

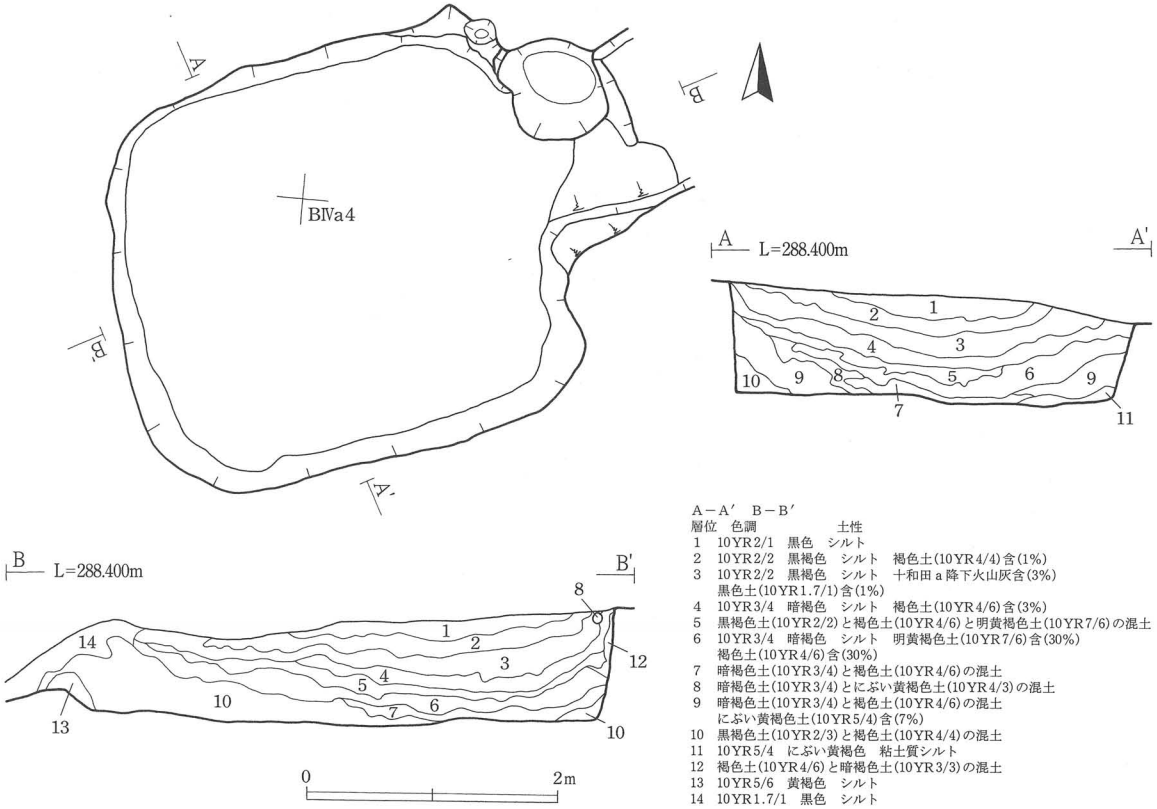
＜平面形・規模＞　平面形は隅丸方形で、規模は3.2×3.56mである。

＜埋土＞　14層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、全体に締まりに欠ける。３層には十和田ａ降下火山灰が含まれている。

＜壁＞　ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は40～91.6cmで、西壁と北壁が高い。北東壁の一部が張り出しており、出入り口の可能性がある。

＜床面＞　明黄褐色土で、やわらかくやや締まりに欠ける。凹凸がなく、ほぼ水平で平坦である。

＜柱穴・土坑＞　検出されなかった。



A－A′　B－B′

層位	色調	土性
1	10YR2/1　黒色	シルト
2	10YR2/2　黒褐色	シルト　褐色土(10YR4/4)含(1%)
3	10YR2/2　黒褐色	シルト　十和田ａ降下火山灰含(3%) 黒色土(10YR1.7/1)含(1%)
4	10YR3/4　暗褐色	シルト　褐色土(10YR4/6)含(3%)
5	黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/6)と明黄褐色土(10YR7/6)の混土	
6	10YR3/4　暗褐色	シルト　明黄褐色土(10YR7/6)含(30%) 褐色土(10YR4/6)含(30%)
7	暗褐色土(10YR3/4)と褐色土(10YR4/6)の混土	
8	暗褐色土(10YR3/4)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)の混土	
9	暗褐色土(10YR3/4)と褐色土(10YR4/6)の混土 にぶい黄褐色土(10YR5/4)含(7%)	
10	黒褐色土(10YR2/3)と褐色土(10YR4/4)の混土	
11	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト
12	褐色土(10YR4/6)と暗褐色土(10YR3/3)の混土	
13	10YR5/6　黄褐色	シルト
14	10YR1.7/1　黒色	シルト

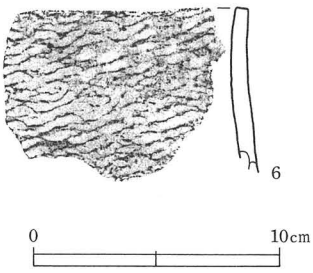
第16図　住居状遺構

遺物（第17図、写真図版19）

土器６が出土している。埋土中部からの出土で、流れ込みと考えられる。縄文時代前期初頭の深鉢の口縁部で、撚糸文が施されている。内外両面とも煤けている。

時期

埋土に十和田ａ降下火山灰が含まれていることから平安時代と考えられる。ただし、火山灰は二次堆積の可能性が考えられることと壁の一部が張り出していることから、中世の遺構の可能性も否定できない。



第17図　住居状遺構出土遺物

４．土坑

１号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　調査区域南西部隅グリッドＤＩｄ６に位置する。Ⅰ層下部からⅡ層上部にかけてにぶい黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞　平面形は楕円形で、規模は開口部径51×66cm、底部径30×50cm、深さは最深部で34.1cmである。

＜壁・底面＞　壁は外傾して立ち上がっている。壁高は30.4～34.1cmで、北西壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるが、よく締まっている。

＜埋土＞　４層に分けられる。にぶい黄褐色土粒を含む黒色土が主体である。全体に締まっている。

＜遺物・時期＞　出土遺物はなく、時期は不明である。

２号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　調査区域南西部隅グリッドＤＩｄ６に位置する。Ⅰ層下部からⅡ層上部にかけてにぶい黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞　平面形は楕円形で、規模は開口部径60×77cm、底部径47×67cm、深さは最深部で40.6cmである。

＜壁・底面＞　壁はほぼ垂直気味に立ち上がっている。壁高は37.8～40.6cmで、西壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるがよく締まっている。

＜埋土＞　図化は省略したが、にぶい黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体である。

＜遺物・時期＞　出土遺物はなく、時期は不明である。

３号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　調査区域南西部隅グリッドＤＩｄ５に位置する。Ⅰ層下部からⅡ層上部にかけて黒褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞　平面形は楕円形で、規模は開口部径55×66cm、底部径36×51cm、深さは最深部で60.7cmである。

＜壁・底面＞　北東壁は垂直に、他は僅かに外傾して立ち上がっている。壁高は56.6～60.7cmで南東壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるがよく締まっている。

＜埋土＞　7層に細分される。黒褐色土が主体で、よく締まっている。

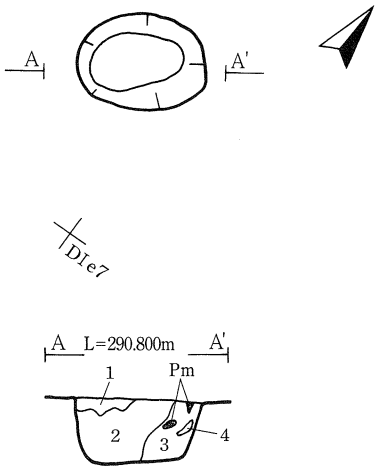
＜遺物・時期＞　出土遺物はなく、時期は不明である。

４号土坑（第18図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅢｄ７・ｄ８に位置する。２号住居跡精査中に南東壁際の床面から検出された。

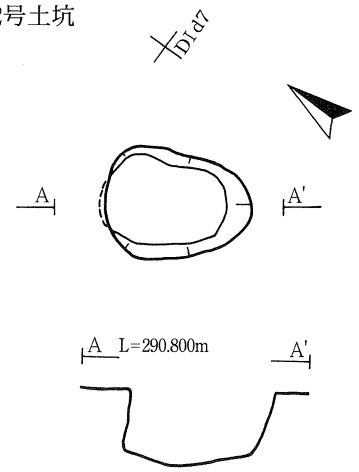
＜平面形・規模＞　平面形は楕円形で、規模は開口部径2.0×2.05m、底部径1.7×2.1m、深さは最深部で65cmである。

1号土坑

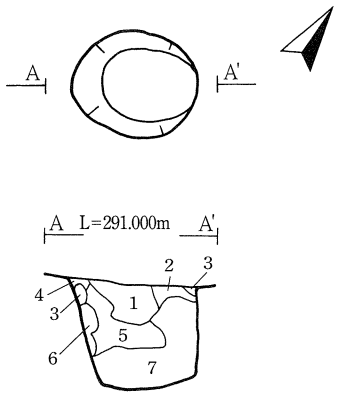


A－A′
層位　色調　　土性
1　黒褐色土(10YR2/3)と褐色土(10YR4/6)の混土
2　10YR2/1　黒色　シルト　にぶい黄褐色土(10YR5/3)含(10%)
3　10YR1.7/1　黒色　シルト
4　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト

2号土坑

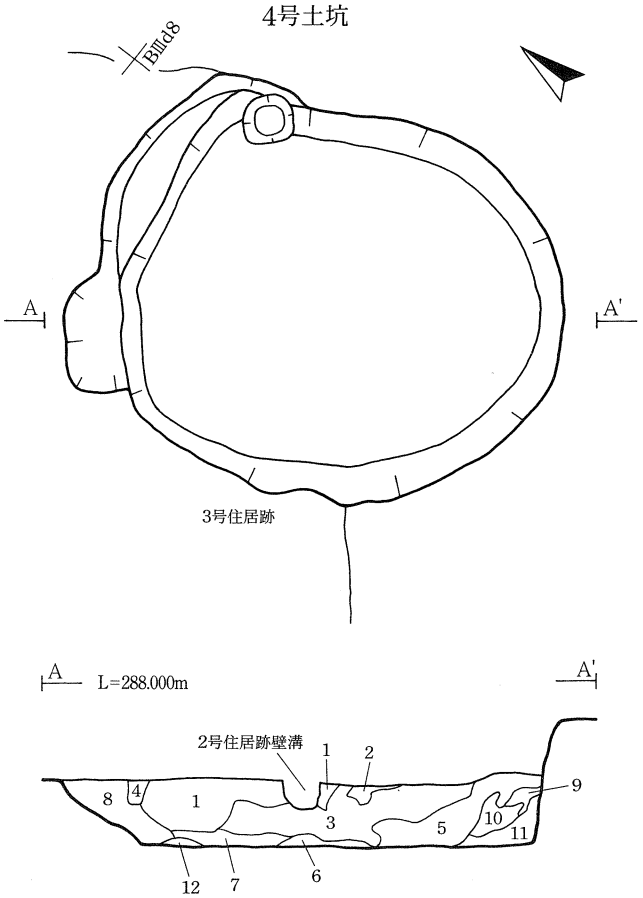


3号土坑



A－A′
層位　色調　　土性
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(1%)
2　黒褐色土(10YR2/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土
3　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　黒褐色土(10YR2/2)含(5%)
4　10YR2/3　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(5%)
5　10YR3/2　黒褐色　シルト　褐色土(10YR5/6)含(15%)
6　10YR1.7/1　黒色　シルト　褐色土(10YR5/6)含(20%)
7　黒褐色土(10YR2/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土

4号土坑



A－A′
層位　色調　　土性
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(15%)　赤褐色土(5YR4/8)含(2%)
2　黒褐色土(10YR2/2)と十和田a降下火山灰の混土
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/8)含(5%)
4　10YR2/3　黒褐色　シルト
5　黄褐色土(10YR5/6)と黒色土(10YR2/1)の混土　黄褐色土(10YR5/6)含(7%)
6　黄褐色土(10YR5/6)と黒色土(10YR2/1)の混土
7　黒褐色土(10YR2/3)と褐色土(10YR4/4)の混土
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混土
9　10YR5/8　黄褐色　シルト
10　10YR6/4　十和田a降下火山灰
11　明褐色土(7.5YR5/8)と暗褐色土(10YR3/4)の混土
12　暗赤褐色土(5YR3/4)とにぶい赤褐色土(5YR4/3)の混土

0　2m

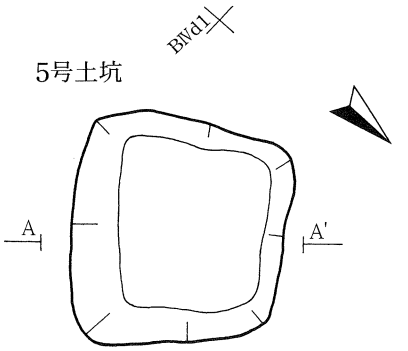
第18図　1号・2号・3号・4号土坑

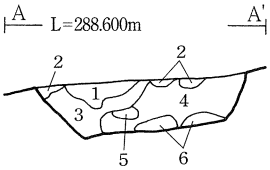
＜壁・底面＞　壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は32.3～65cmで、東壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があるがよく締まっている。
＜埋土＞　12層に細分される。黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体で、全体にやわらかいが締まりがある。
＜遺物・時期＞　出土遺物はない。検出状況から平安時代もしくはそれ以前の可能性がある。

５号土坑（第19図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅣｃ１に位置する。Ⅲ層下部で黒色土の広がりとして検出された。
＜平面形・規模＞　平面形は隅丸方形で、規模は開口部径1.1×1.24m、底部径80×90cm、深さは最深部で42.5cmである。
＜壁・底面＞　壁は外傾して立ち上がっている。壁高は17.3～42.5cmで、北壁が最も高い。底面は黄褐色土で、凹凸があり締まりに欠ける。
＜埋土＞　６層に細分される。黒色土が主体で、全体に締まりに欠ける。
＜遺物・時期＞　出土遺物はなく、時期は不明である。

６号土坑（第19図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅢｆ７に位置する。Ⅲ層下部で黒褐色土と褐色土の混土の広がりとして検出された。
＜平面形・規模＞　平面形はほぼ円形で、規模は開口部径1.0×1.12m、底部径70×80cm、深さは最深部で49.1cmである。
＜壁・底面＞　壁は外傾して立ち上がっている。壁高は20.7～47.2cmで、北壁が最も高い。底面は黄褐色土で、少し凹凸があり締まっている。
＜埋土＞　３層に細分される。黒褐色土と褐色土の混土が主体で、締まりがあるが、粘性は弱い。
＜遺物・時期＞　出土遺物はなく、時期は不明である。

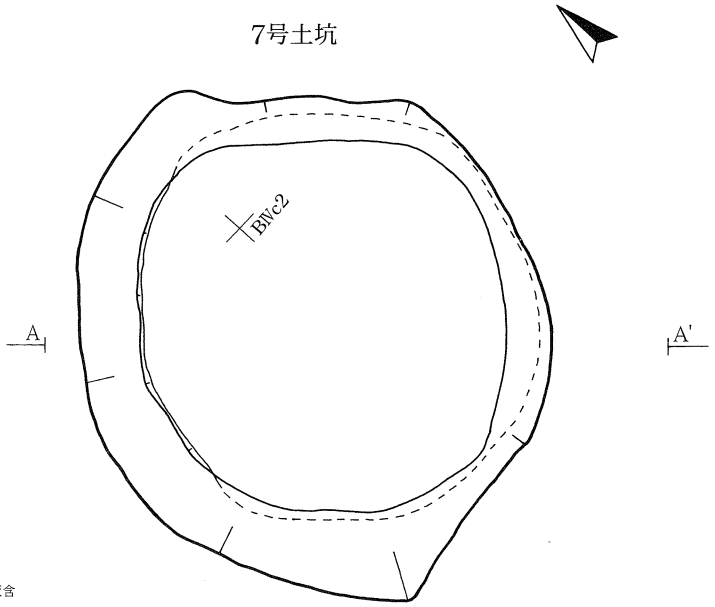
７号土坑
遺構（第19図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅣｂ１・ｂ２・ｃ１・ｃ２にまたがって位置する。Ⅲ層下部で黒色土の広がりとして検出された。
＜平面形・規模＞　平面形はほぼ円形で、規模は開口部径2.5×2.65m、底部径2.1×2.15m、深さは最深部で143.8cmである。
＜壁・底面＞　北東壁は底面から垂直気味に立ち上がり、20cm位から外傾して立ち上がっている。他は底面から20cm位まで内湾して立ち上がってフラスコ状になり、その後外傾している。壁高は75.5～143.8cmである。底面は明黄褐色土でよく締まり、凹凸がなく平坦である。
＜埋土＞　20層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、全体によく締まっている。
遺物（第20図、写真図版19）
　土器７が埋土中部の壁際から出土している。ロクロ使用の土師器坏である。体部は底部から１cm位直立し

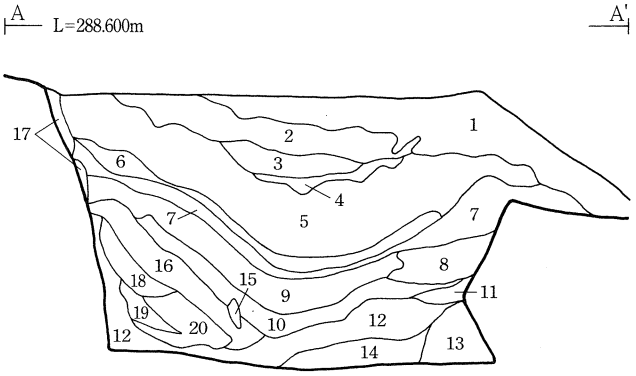


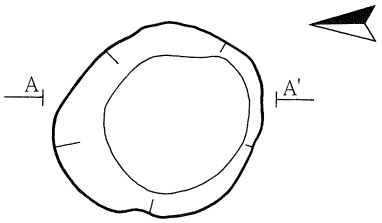


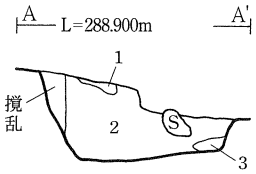
A－A′

層位	色調	土性
1	10YR1.7/1 黒色	シルト
2	10YR2/1 黒色	シルト
3	10YR2/1 黒色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)含
4	黒褐色土(10YR2/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土	十和田a降下火山灰含
5	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト
6	黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色土(10YR5/3)の混土	







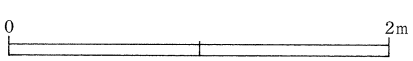


A－A′

層位	色調	土性
1	10YR1.7/1 黒色	シルト
2	黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/4)の混土	炭化物含(3%)　焼土粒含(2%)
3	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト

A－A′

層位	色調	土性
1	10YR1.7/1 黒色	シルト
2	10YR2/2 黒褐色	シルト
3	10YR2/2 黒褐色	シルト　にぶい黄褐色土(10YR5/4)含(2%)
4	10YR2/1 黒色	シルト
5	にぶい黄褐色土(10YR5/4)とにぶい黄橙色土(10YR6/3)と黒褐色土(10YR2/2)の混土	
6	7.5Y2/1 黒色	シルト
7	褐色土(10YR4/6)と黒褐色土(10YR2/2)の混土	にぶい黄褐色土(10YR5/3)含(2%)
8	褐色土(10YR4/6)と暗褐色土(10YR3/4)の混土	
9	黒色土(7.5YR2/1)とにぶい黄褐色土(10YR5/3)と褐色土(10YR4/6)の混土	
10	黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/6)の混土	
11	褐色土(10YR4/4)と暗褐色土(10YR3/3)の混土	
12	にぶい黄褐色土(10YR5/4)と褐色土(10YR4/6)の混土	
13	褐色土(7.5YR4/6)とにぶい黄橙色土(10YR7/4)の混土	
14	明黄褐色土(10YR6/8)と褐色土(10YR4/6)と褐色土(10YR4/4)の混土	
15	黒色土(10YR1.7/1)と褐色土(10YR4/6)の混土	木根による
16	黄褐色土(10YR5/6)と褐色土(10YR4/4)の混土	明褐色土(7.5YR5/8)含(2%)
17	褐色土(10YR4/6)と黒褐色土(10YR2/2)の混土	黄褐色土(10YR5/6)含(20%)
18	7.5YR6/6 橙色	シルト
19	黄褐色土(10YR5/8)と暗褐色土(10YR3/4)の混土	
20	黄褐色土(10YR5/8)と暗褐色土(10YR3/3)と褐色土(10YR4/6)の混土	

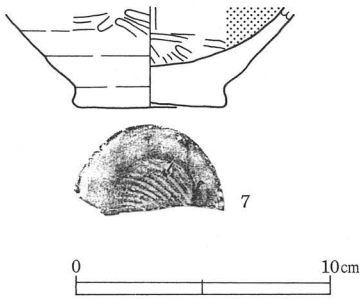


第19図　5号・6号・7号土坑

て立ち上がってから大きく外傾している。内外両面ともミガキが施され、内面は黒色処理されている。胎土には径1㎜の砂粒を含み、外面は煤けている。底部切り離しは回転糸切りである。

時期

出土遺物から平安時代（10世紀頃）と考えられる。



第20図　7号土坑出土遺物

８号土坑（第21図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅢｅ６に位置する。Ⅲ層下部で黄褐色土粒を含む暗褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞　平面形は楕円形で、開口部径1.9×2.3m、底部径1.55×2.0m、深さは最深部で37.8㎝である。

＜壁・底面＞　壁は外傾して立ち上がっている。壁高は22.4～30.5㎝で、東壁が最も高い。底面は黄褐色土でよく締まり、少し凹凸があるがほぼ平らである。

＜埋土＞　７層に細分される。黒色土や暗褐色土が主体で、よく締まっている。

＜遺物・時期＞　出土遺物はなく時期や性格は不明である。

９号土坑（第21図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞　調査区域中央部から北東部グリッドＡⅣｊ３・ｊ４、ＢⅣａ３・ａ４にまたがって位置する。住居状遺構の底面を精査中、明黄褐色土の広がりとして検出された。

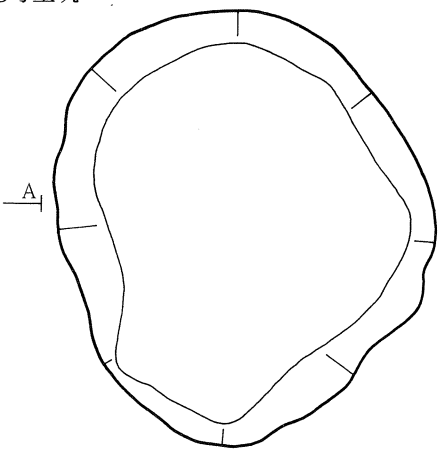
＜平面形・規模＞　平面形は円形で、開口部径2.1×2.15m、底部径2.0×2.02m、深さは最深部で59㎝である。

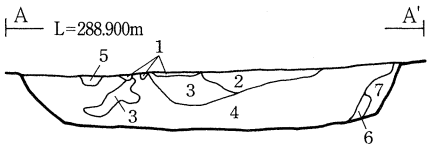
＜壁・底面＞　壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は47.5～59㎝で、西壁が最も高い。底面は黄褐色土でかたく締まり、凹凸が少なく、ほぼ平坦である。

＜埋土＞　27層に細分される。全体に締まりに欠け、粘性は弱い。

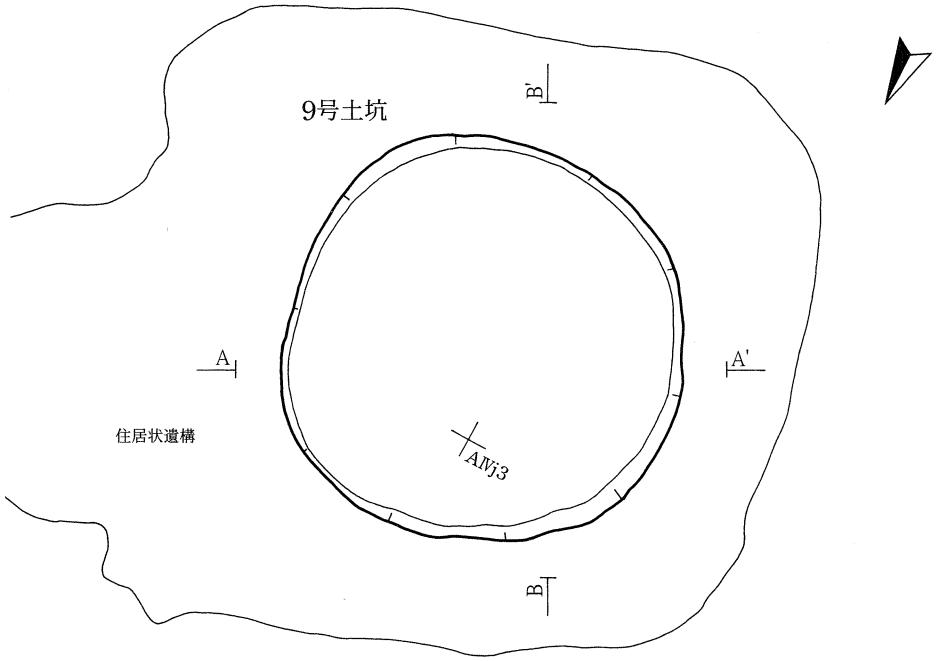
＜遺物・時期＞　出土遺物はない。住居状遺構の底面から検出されたことから、平安時代もしくはそれ以前の可能性がある。

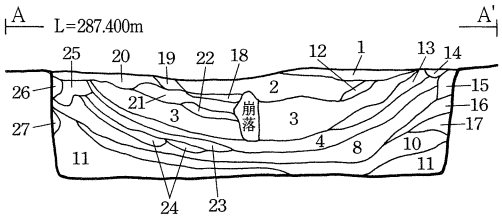
8号土坑

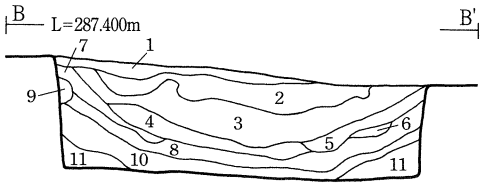




A－A′
層位　色調　　土性
1　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト
2　10YR3/3　暗褐色　シルト　にぶい黄褐色土(10YR5/3)含(10%)　黒褐色土(10YR2/3)含(5%)
3　10YR1.7/1　黒色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(7%)
4　10YR3/3　暗褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(10～15%)
5　10YR2/1　黒色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(3%)
6　10YR4/6　褐色　シルト
7　10YR3/4　暗褐色　シルト







0　　2m

A－A′　B－B′
層位　色調　　土性
1　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト
2　黒褐色土(10YR3/2)と褐色土(10YR4/6)と灰黄褐色土(10YR6/2)の混土
3　10YR4/6　褐色　シルト
4　10YR4/4　褐色　シルト　黒褐色土(10YR3/2)含(2～3%)
5　10YR4/6　褐色　シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含(5%)
6　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト
7　暗褐色土(10YR3/4)と明黄褐色土(10YR6/6)の混土
8　暗褐色土(10YR3/4)と明黄褐色土(10YR6/8)の混土
9　10YR3/4　暗褐色　シルト
10　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　にぶい黄褐色土(10YR4/3)含(10%)
11　10YR4/6　褐色　シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含(3%)
12　黄褐色土(10YR5/6)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)の混土
13　10YR5/8　黄褐色　シルト
14　暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/6)の混土
15　黄褐色土(10YR5/6)と明黄褐色土(10YR6/6)の混土
16　10YR5/8　黄褐色　シルト　褐色土(10YR4/6)含(10%)
17　10YR6/4　褐色　粘土質シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含(15%)
18　10YR5/6　黄褐色　シルト　黒褐色土(10YR2/3)含(25%)
19　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト
20　褐色土(10YR4/4)と黒褐色土(10YR3/2)の混土　砂粒含(5%)
21　10YR4/6　褐色　シルト　暗褐色土(10YR3/3)含(20%)
22　10YR5/8　黄褐色　シルト　砂粒含(10%)
23　10YR5/8　黄褐色　砂質シルト　砂粒含(多量)
24　10YR4/6　褐色　砂質シルト
25　10YR4/4　褐色　砂質シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含
26　褐色土(10YR4/4)と明黄褐色土(10YR6/6)の混土
27　明黄褐色土(10YR6/6)と黄褐色土(10YR5/8)の混土

第21図　8号・9号土坑

5．柱穴状小土坑

遺構（第22図、写真図版13）

調査区域南西部グリッドＤＩｄ５・ｄ６・ｅ５・ｅ６にまたがって、6基検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径39×41cm～43×52cm、深さ29.6～68.2cmである。埋土は黒色土や黒褐色土が主体で、やわらかいがよく締まっている。柱穴配置に規則性はない。柱穴計測値は次の表の通りである。

柱穴計測表

単位：cm

番　号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６
径	46 × 47	42 × 45	40 × 54	41 × 46	39 × 41	43 × 52
深　さ	29.6	38.4	68.2	58.8	67.9	61.4

＜遺物・時期＞　出土遺物はなく、時期や性格については不明である。

6．溝跡

遺構（第23図、写真図版14）

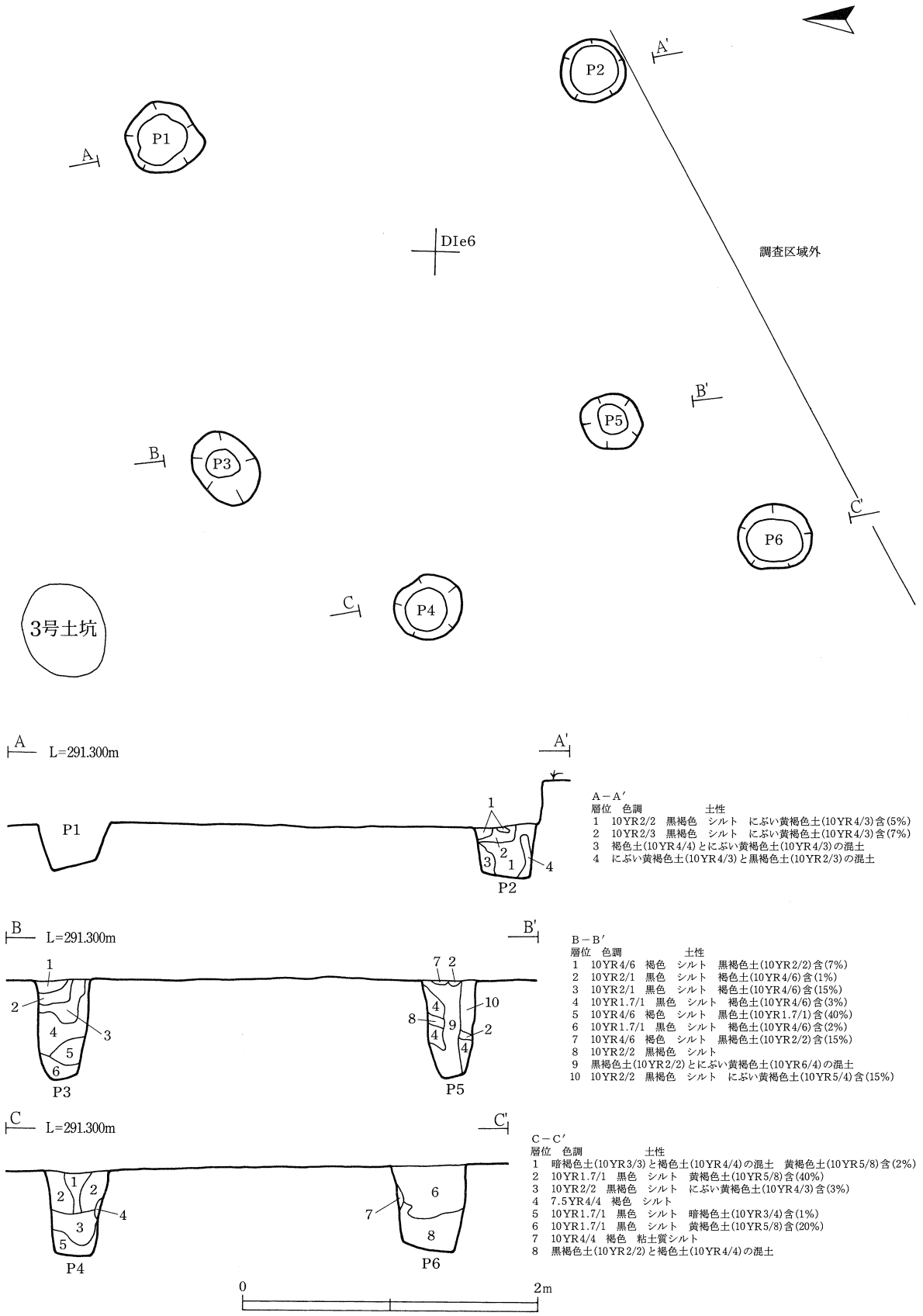
＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＣⅡｅ６・ｅ７・ｆ７にまたがって位置する。Ⅰ層下部からⅡ層上部にかけて暗褐色土の広がりとして検出された。

＜規模・平面形＞　グリッドＣⅡｅ６から南東に延び、南東端はグリッドＣⅡｆ７で調査区域外へ延びている。全長は7.5m、上端幅25～60cm、下端幅13～48cm、深さ7.2～32.2cmである。

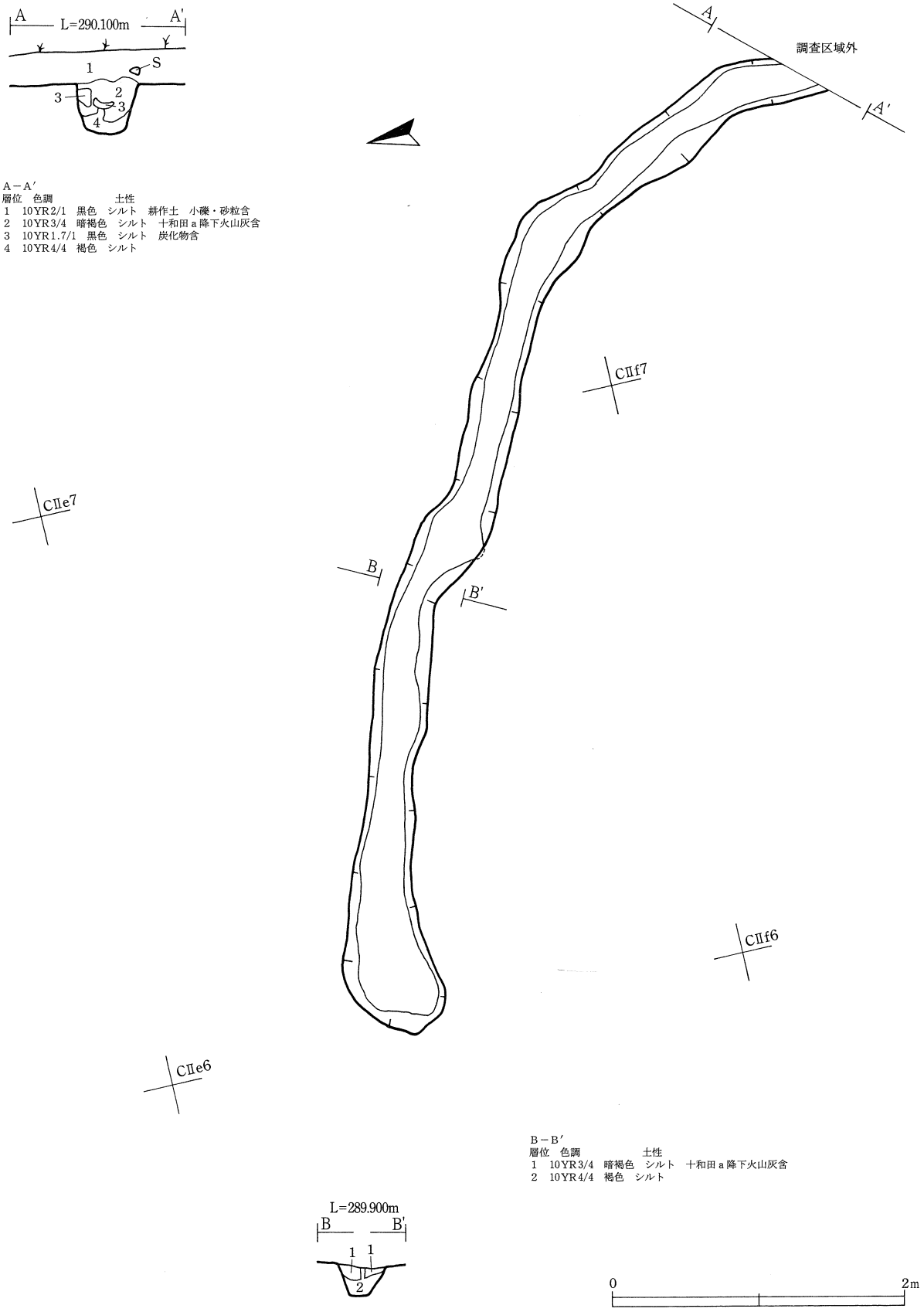
＜断面形・壁・底面＞　断面形はＵ字状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面は黄褐色土で堅く締まっているが、木根等により凹凸が大きい。

＜埋土＞　十和田ａ降下火山灰を含む暗褐色土や褐色土が主体で、全体に締まりに欠ける。

＜遺物・時期＞　出土遺物はなく、また、埋土上部の十和田ａ降下火山灰は二次堆積の可能性もあることから、時期は特定できない。


P1
P2
P3
P4
P5
P6
A
A'
B
B'
C
C'
DIe6
調査区域外
3号土坑
L=291.300m
A－A′
層位　色調　土性
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　にぶい黄褐色土(10YR4/3)含(5%)
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　にぶい黄褐色土(10YR4/3)含(7%)
3　褐色土(10YR4/4)とにぶい黄褐色土(10YR4/3)の混土
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)と黒褐色土(10YR2/3)の混土
B－B′
層位　色調　土性
1　10YR4/6　褐色　シルト　黒褐色土(10YR2/2)含(7%)
2　10YR2/1　黒色　シルト　褐色土(10YR4/6)含(1%)
3　10YR2/1　黒色　シルト　褐色土(10YR4/6)含(15%)
4　10YR1.7/1　黒色　シルト　褐色土(10YR4/6)含(3%)
5　10YR4/6　褐色　シルト　黒色土(10YR1.7/1)含(40%)
6　10YR1.7/1　黒色　シルト　褐色土(10YR4/6)含(2%)
7　10YR4/6　褐色　シルト　黒褐色土(10YR2/2)含(15%)
8　10YR2/2　黒褐色　シルト
9　黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色土(10YR6/4)の混土
10　10YR2/2　黒褐色　シルト　にぶい黄褐色土(10YR5/4)含(15%)
C－C′
層位　色調　土性
1　暗褐色土(10YR3/3)と褐色土(10YR4/4)の混土　黄褐色土(10YR5/8)含(2%)
2　10YR1.7/1　黒色　シルト　黄褐色土(10YR5/8)含(40%)
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　にぶい黄褐色土(10YR4/3)含(3%)
4　7.5YR4/4　褐色　シルト
5　10YR1.7/1　黒色　シルト　暗褐色土(10YR3/4)含(1%)
6　10YR1.7/1　黒色　シルト　黄褐色土(10YR5/8)含(20%)
7　10YR4/4　褐色　粘土質シルト
8　黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/4)の混土
0
2m

第22図　柱穴状小土坑


A
L=290.100m
A'
1
S
2
3
3
4
A－A'
層位　色調　土性
1　10YR2/1　黒色　シルト　耕作土　小礫・砂粒含
2　10YR3/4　暗褐色　シルト　十和田a降下火山灰含
3　10YR1.7/1　黒色　シルト　炭化物含
4　10YR4/4　褐色　シルト
A
A'
調査区域外
CⅡf7
CⅡe7
B
B'
CⅡf6
CⅡe6
B－B'
層位　色調　土性
1　10YR3/4　暗褐色　シルト　十和田a降下火山灰含
2　10YR4/4　褐色　シルト
L=289.900m
B
B'
1
1
2
0
2m

第23図　溝　跡

７．堀跡

１号堀跡

遺構（第25図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅢｈ２・ｈ３・ｉ２・ｉ３にまたがって位置する。Ⅱ層上部で黒色土の広がりとして検出された。

＜規模・平面形＞　北西－南東に延びており、両端は調査区域外である。規模は全長9.3m、上幅5.05m～5.6m、下幅62cm～98cm、深さ148.9～200.5cmである。

＜断面形・壁・底面＞　断面形は薬研堀である。壁は外傾しながら立ち上がっており、北東壁は1m位から、南西壁は1.45m位からそれぞれ大きく外傾している。底面は黄褐色土で、ほぼ平らであり、堅く締まっている。

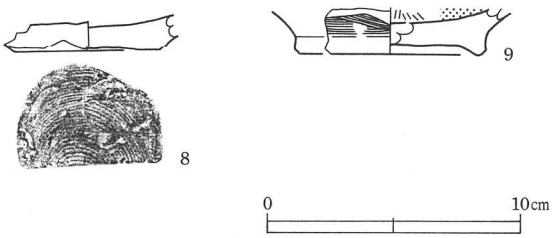
＜埋土＞　32層に細分される。上部は黒色土、中～下部は黒褐色土が主体である。全体にやわらかく、締まりに欠ける。

遺物（第24図、写真図版19）

土器８・９が埋土上部から検出されている。

８はロクロ使用の土師器坏の底部である。底部切り離しは回転糸切りで、内面は一部煤けている。

９は土師器高台付坏の底部から体部下端部である。高台部は「八」の字状に開いている。内面はミガキ後黒色処理されている。底部切り離しは回転糸切りである。どちらも埋土上部からの出土であり、流れ込みと考えられる。



第24図　１号堀跡出土遺物

２号堀跡

遺構（第26図、写真図版16）

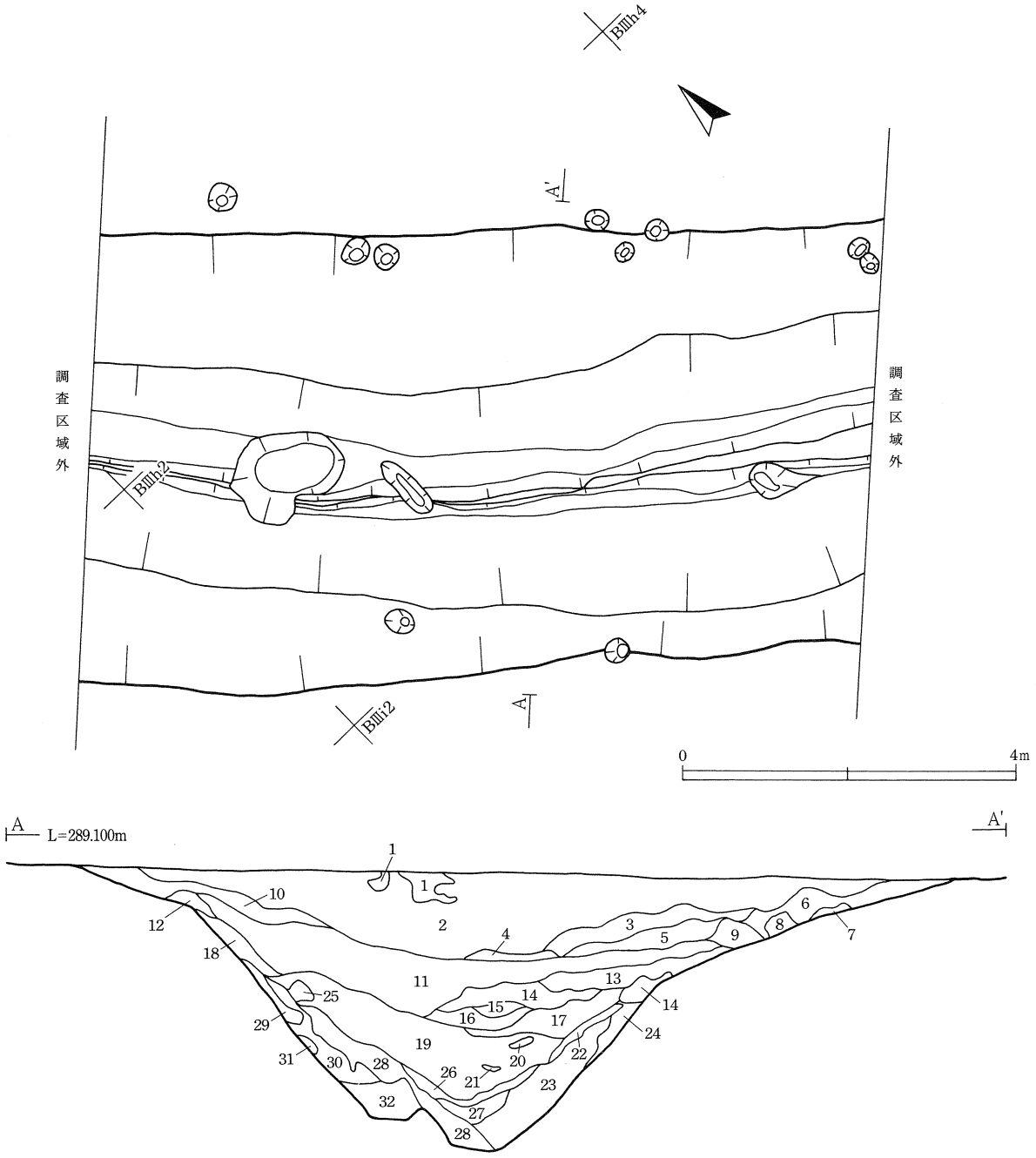
＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅢｆ４・ｆ５・ｆ６・ｆ７・ｇ５・ｇ６・ｇ７にまたがって位置する。調査当初から、幅6m、深さ1.5～1.8mの細長い窪みとして確認されていたものである。

＜平面形・規模＞　北西－南東に延びており、両端は調査区域外である。規模は全長15.5m、上幅6.0～8.7m、下幅10～48cm、深さ235.5～410.6cmである。

＜断面形・壁・底面＞　断面形は薬研堀である。壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は黄褐色土で、堅く締まっている。

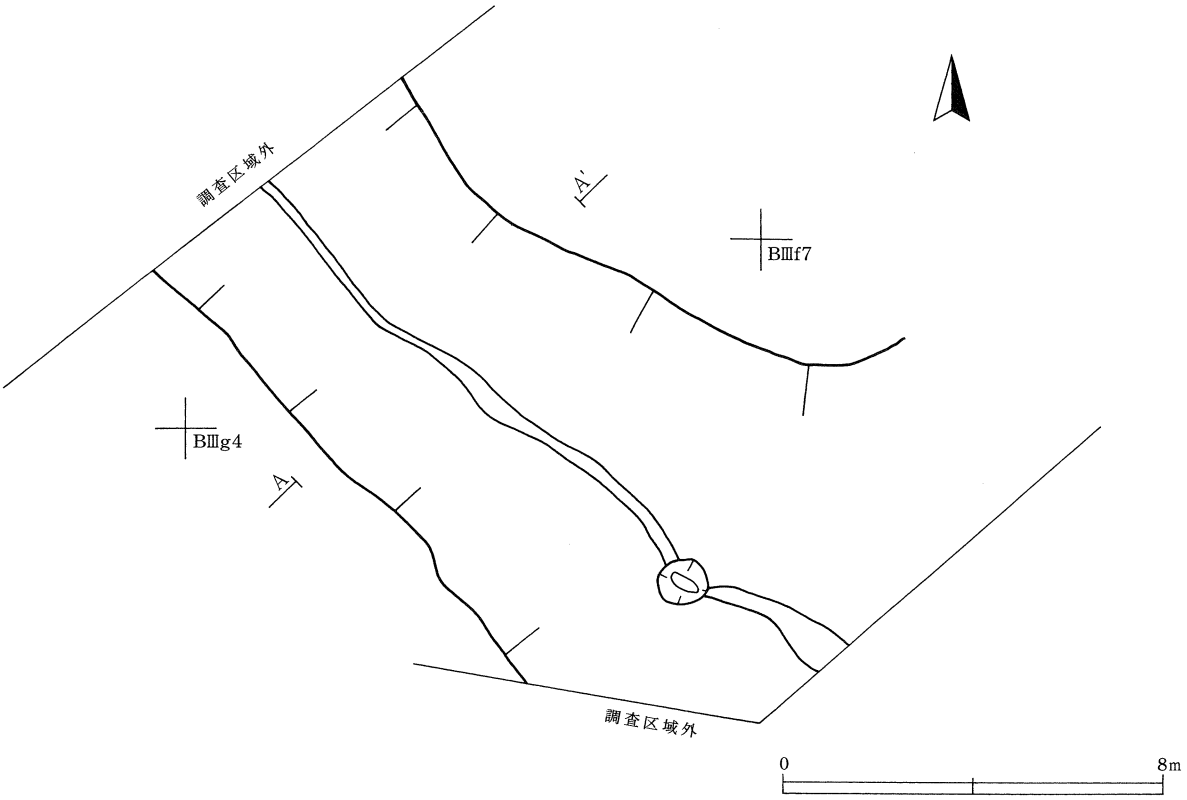
＜埋土＞　19層に細分される。黒色土～黒褐色土が主体で、全体によく締まっている。

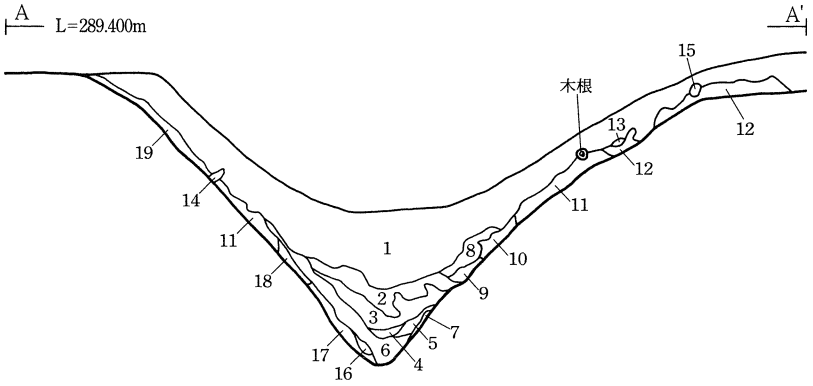
遺物　出土遺物はない。



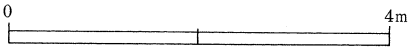
層位　色調　　土性
1　10YR2/3　黒褐色　シルト
2　10YR1.7/1　黒色　黒色　シルト
3　黒褐色土(10YR2/2)と明褐色土(7.5YR5/8)シルトの混土　明黄褐色土(10YR6/8)含(2%)
4　黒褐色土(10YR2/2)と明褐色土(7.5YR5/8)の混土
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　明黄褐色土(10YR6/8)含(3%)
6　10YR2/3　黒褐色　シルト　明黄褐色土(10YR6/8)含(10%)
7　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(30%)
8　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混土　明黄褐色土(10YR6/8)含(30%)
9　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混土　明黄褐色土(10YR6/8)含(5%)
10　10YR1.7/1　黒色　シルト　明黄褐色土(10YR6/8)含(20%)　黒褐色土(10YR2/2)含(30%)
11　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/8)含(1%)
12　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/8)含(2%)
13　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)と明黄褐色土(10YR6/8)の混土
14　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混土　明黄褐色土(10YR6/8)含(1%)
15　10YR2/2　黒褐色　シルト　明黄褐色土(10YR6/8)含(1%)
16　10YR1.7/1　黒色　シルト
17　黒褐色土(10YR2/3)と明黄褐色土(10YR6/6)と黄褐色土(10YR5/8)の混土
18　10YR2/2　黒褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(10%)
19　10YR1.7/1　黒色　シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含(1%)
20　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　黒褐色土(10YR3/2)含(30%)
21　10YR3/2　黒褐色　シルト
22　黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/6)の混土
23　10YR4/6　褐色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(1%)
24　10YR4/6　褐色　シルト　明黄褐色土(10YR6/6)含(3%)
25　10YR1.7/1　黒色　シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(2%)
26　10YR2/2　黒褐色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR6/4)含(40%)
27　10YR6/4　にぶい黄橙色　粘土質シルト　黒褐色土(10YR2/2)含(30%)
28　10YR1.7/1　黒色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR6/4)含(1%)
29　10YR7/4　にぶい黄橙色　粘土質シルト
黄褐色土(10YR5/6)含(40%)　黒褐色土(10YR2/2)含
30　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混土　にぶい黄橙色土(10YR7/3)含(2%)
31　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混土　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(1%)
32　黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混土

第25図　1号堀跡





層位	色調	土性
1	10YR1.7/1 黒色	シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(2%) 植生根多い
2	10YR1.7/1 黒色	シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(1%)
3	10YR2/1 黒色	シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(15～20%)
4	10YR2/1 黒色	シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(1%)
5	10YR2/2 黒褐色	シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(7%)
6	10YR2/1 黒色	シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(2%) にぶい黄橙色土(10YR6/4)含(3%)
7	10YR4/2 灰黄褐色	シルト にぶい黄橙色土(10YR6/4)含(10%)
8	10YR3/1 黒褐色	シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(2%)
9	黒褐色土(10YR3/1)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土	炭化物含(1%)
10	黒褐色土(10YR3/1)とにぶい黄橙色土(10YR6/4)の混土	
11	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト 黒褐色土(10YR2/2)含(30～40%)
12	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト
13	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト 黒褐色土(10YR2/2)含(5%)
14	10YR2/2 黒褐色	シルト
15	にぶい黄橙色土(10YR6/4)と黒色土(10YR2/1)の混土	
16	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト 黒色土(10YR2/1)含(30%)
17	10YR3/1 黒褐色	シルト にぶい黄橙色土(10YR6/4)含(7～10%)
18	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト
19	黄褐色土(10YR5/6)と黒色土(10YR2/1)の混土	



第26図　2号堀跡

３号堀跡

遺構（第28図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞　調査区域中央部グリッドＢⅢｆ９・ｇ８・ｇ９、ＢⅣｄ２・ｄ３・ｅ０・ｅ１・ｅ２・ｆ０にまたがって位置する。郭の平場の南東部にあるテラス状の部分から検出されたものである。

＜平面形・規模＞　テラス状部分を2号堀跡の南東端から南西－北東に延びている。規模は全長23m、上幅（実効堀幅）3.65～5.7m、下幅6～64cm、深さ（垂直高）1.6～1.72m、実効法高2.95～4.65m、外壁法高63～146.6cmである。なお、テラス状部分の北東部は崩落した可能性があり、本堀跡は北東方向にもっと延びていたものと考えられる。

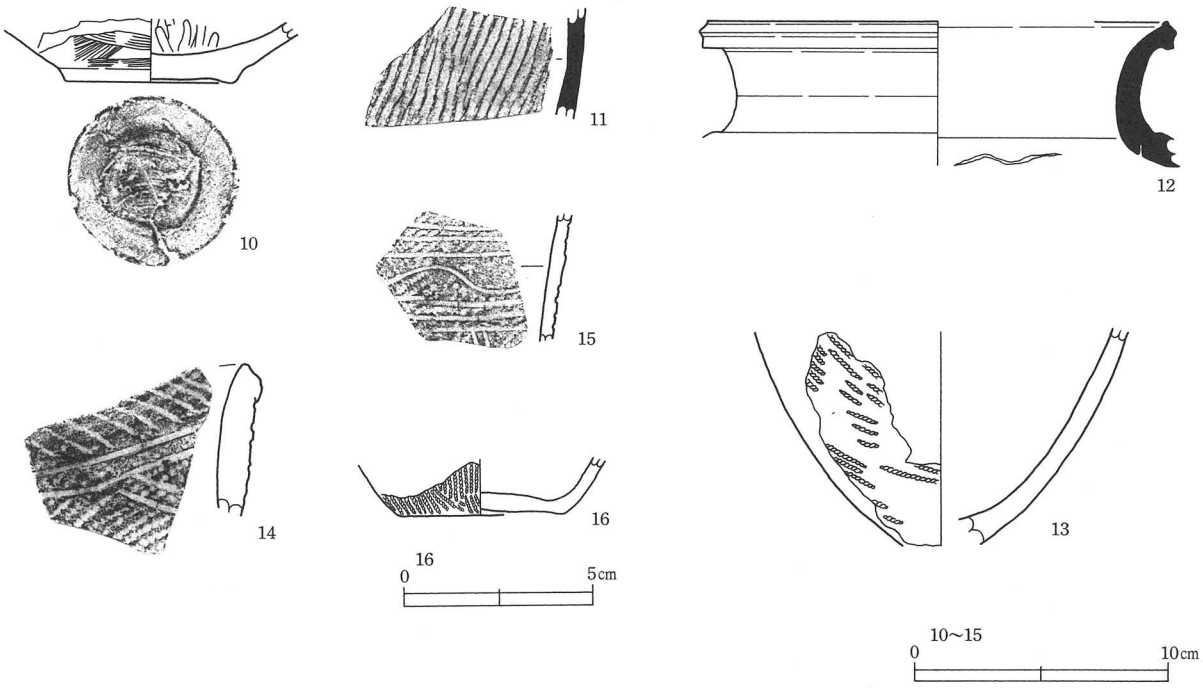
＜断面形・壁・底面＞　断面形は薬研堀である。壁は北西壁が外傾して立ち上がり、南東壁は25cm位垂直気味に立ち上がった後、外傾している。底面は黄褐色土で堅く締まり、木根等により凹凸が大きい。

＜埋土＞　黒色土や黒褐色土が主体で、よく締まっている。木根等により撹乱を受けている。

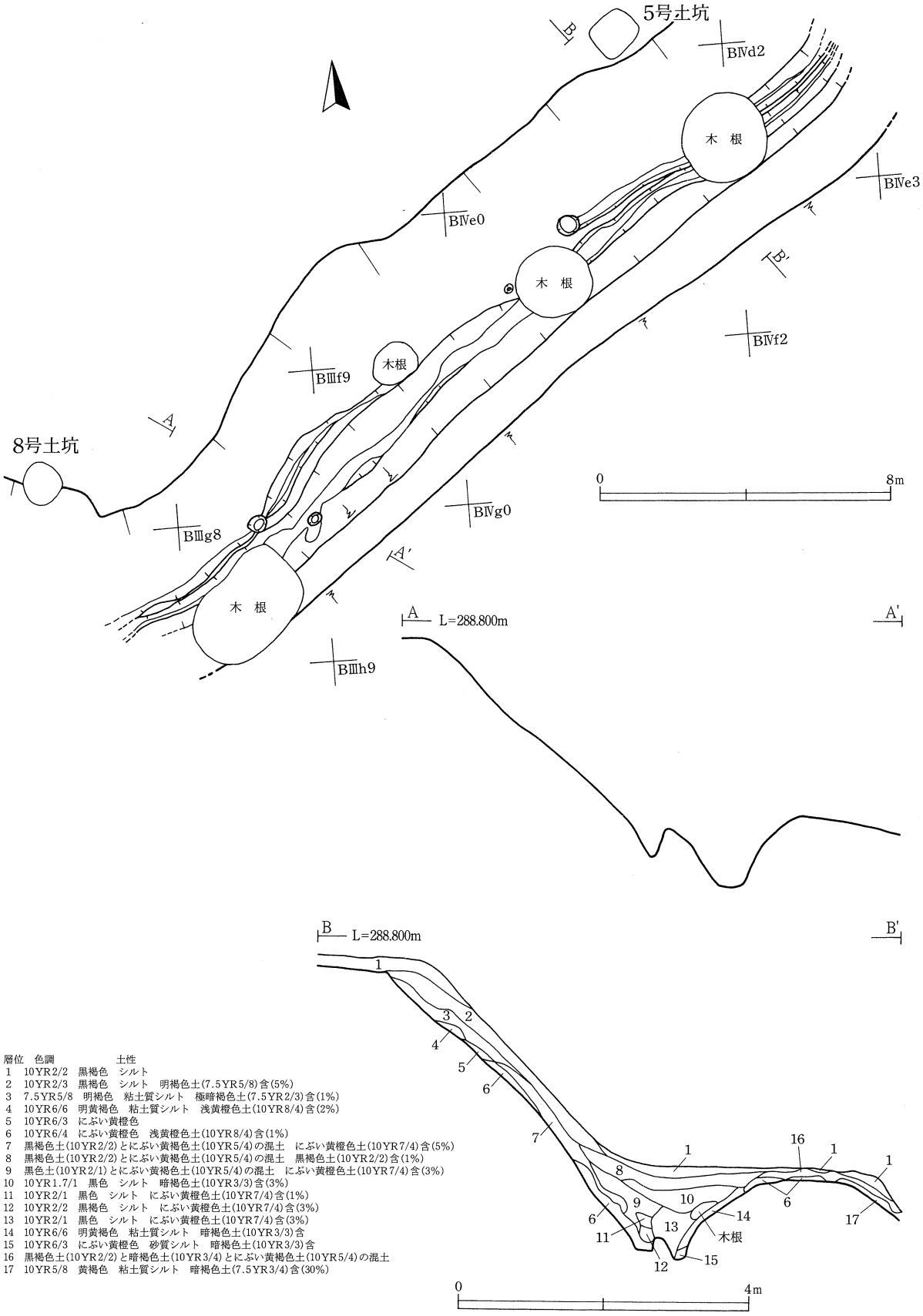
遺物（第27図、写真図版19・20）

土器10～16が出土している。10はロクロ使用の土師器坏の底部から体部下端部である。底部は回転糸切りで、切り離し後調整されて６㎜位の高台状になっており、体部は大きく外傾して立ち上がっている。胎土には径１～３㎜の砂粒を含んでいる。11は須恵器甕の体部片である。外面に敲き目痕、内面に当て具痕が残っている。12は須恵器壺の肩部から口縁部である。口縁部は頸部から外反しながら立ち上がっている。口縁端部は斜め下方へ引き出され、口唇部は僅かに凸状になっている。

13～16は流れ込みの縄文土器である。13は尖底土器の底部から体部下端部である。地紋はＬＲ単節縦回転である。14・15は深鉢で、14は口縁端部に６㎜間隔で原体圧痕され、口縁部下には沈線が施されている。15は上下に沈線が３本ずつ、中央に曲線が１本巡っている。16は鉢型土器の底部で、地紋はＲＬ単節斜め回転である。



第27図　３号堀跡出土遺物



層位　色調　　土性
1　10YR2/2　黒褐色　シルト
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　明褐色土(7.5YR5/8)含(5%)
3　7.5YR5/8　明褐色　粘土質シルト　極暗褐色土(7.5YR2/3)含(1%)
4　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト　浅黄橙色土(10YR8/4)含(2%)
5　10YR6/3　にぶい黄橙色
6　10YR6/4　にぶい黄橙色　浅黄橙色土(10YR8/4)含(1%)
7　黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(5%)
8　黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土　黒褐色土(10YR2/2)含(1%)
9　黒色土(10YR2/1)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(3%)
10　10YR1.7/1　黒色　シルト　暗褐色土(10YR3/3)含(3%)
11　10YR2/1　黒色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(1%)
12　10YR2/2　黒褐色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(3%)
13　10YR2/1　黒色　シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(3%)
14　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト　暗褐色土(10YR3/3)含
15　10YR6/3　にぶい黄橙色　砂質シルト　暗褐色土(10YR3/3)含
16　黒褐色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/4)とにぶい黄褐色土(10YR5/4)の混土
17　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　暗褐色土(7.5YR3/4)含(30%)

第28図　3号堀跡

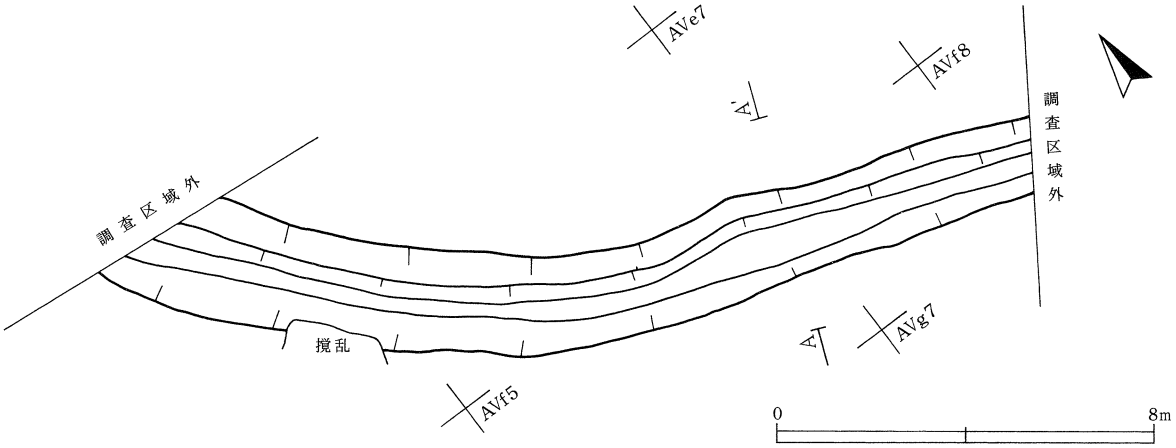
４号堀跡

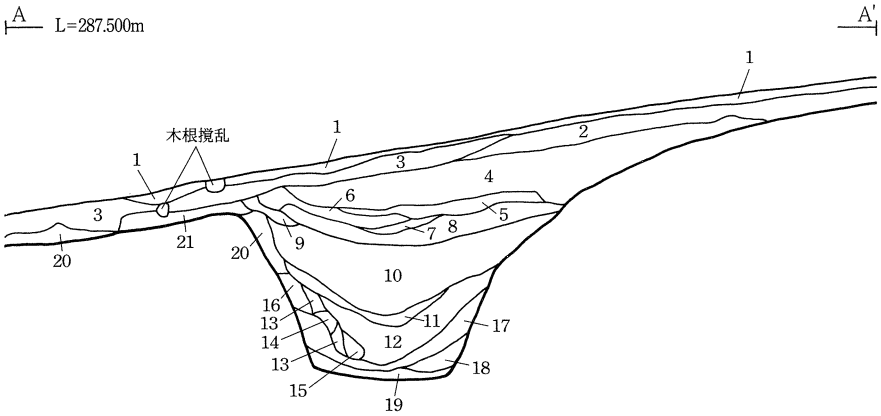
遺構（第29図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞　調査区域北東端部グリッドＡＶｄ４・ｅ４・ｅ５・ｅ６・ｆ６・ｆ７・ｆ８にまたがって位置する。郭と考えられる平場の南西部のⅡ層面で、黄褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞　平場の縁際を南東－北西にかけて弧を描くように延びており、両端は調査区域外である。全長19.4m、上幅（実効堀幅）1.75～2.56m、下幅28～70cm、深さ（垂直高）81.8～107.5cmである。

＜断面形・壁・底面＞　断面形は箱薬研堀である。壁は外傾して立ち上がり、底部から35～55cmで傾きが大





層位	色調	土性
1	10YR2/2　黒褐色	シルト
2	10YR3/4　暗褐色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(3%)
3	10YR2/2　黒褐色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(1%)
4	10YR3/2　黒褐色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(1%未満)
5	10YR3/3　暗褐色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(15%)
6	暗褐色土(10YR3/4)と明黄褐色土(10YR7/6)の混土	
7	黄褐色土(10YR5/6)と明黄褐色土(10YR7/6)の混土　黒色土(10YR1.7/1)含(3%)	
8	10YR3/2　黒褐色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(5%)
9	10YR7/6　明黄褐色	粘土質シルト
10	10YR4/6　褐色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)　小礫含
11	黄褐色土(10YR5/6)とにぶい黄橙色土(10YR7/4)と褐灰色土(10YR5/1)の混土	
12	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト　褐色土(10YR4/4)含(7%)
13	褐色土(10YR4/4)と黄褐色土(10YR5/6)とにぶい黄褐色土(10YR7/4)の混土	
14	10YR7/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト
15	10YR7/8　黄橙色	砂質シルト
16	褐色土(10YR4/4)と黄褐色土(10YR5/6)とにぶい黄橙色土(10YR7/4)の混土 黒色土(10YR1.7/1)含(1%)	
17	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(5%) 黒褐色土(10YR2/2)含(10%)
18	10YR2/1　黒色	砂質シルト
19	黒褐色土(10YR2/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土	
20	10YR2/3　黒褐色	シルト　黄褐色土(10YR5/6)含(1%)
21	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト　にぶい黄橙色土(10YR7/4)含(2%) 黒褐色土(10YR2/2)含(2%)

0　2m

第29図　４号堀跡

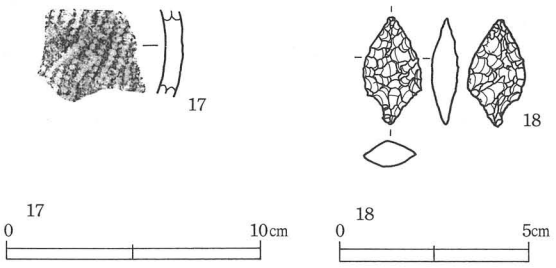
きくなる。底面は黄褐色土で堅く締まっており、凹凸は少なく平坦である。

＜埋土＞　黒色土や褐色土が主体で、全体に締まっている。

遺物（第30図、写真図版20）

土器17と石器18が出土している。17は深鉢の体部片である。摩耗しており、原体ははっきりしないが、ＬＲ単節斜め回転と考えられる。外面は煤けている。

18は石鏃である。有茎で、横断面形は厚い菱形である。両側縁は緩い弧状をなしている。



第30図　４号堀跡出土遺物

8．遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、土師器、石器、鉄製品である。出土量が少ないことから、(1) 縄文土器、(2) 土師器、(3) 石器、(4) 鉄製品に分けて記述する。

(1) 縄文土器（第31図、写真図版20）

19・20は尖底土器の底部である。胎土に繊維を含んでいる。21は深鉢の口縁部である。口縁部に縄文原体圧痕（ＲＬ）が３本、体部は木目状撚糸文が施されている。19・20は前期初頭、21は前期末と考えられる。

22～24は深鉢である。22は口縁部である。口縁部には幅５㎜の粘土紐で隆帯が２本巡っており、下端部には沈線が３本巡っている。23・24は体部で、23は沈線が４本巡り、縦位にも沈線が2本巡っている。24は幅４㎜の沈線が2本巡っており、内外両面とも一部煤けている。中期中葉と考えられる。

25は浅鉢の口縁部である。外面に沈線が３本、内面には口縁部に沿って１本巡っている。晩期末と考えられる。

26～29は時期不明の深鉢及び鉢型土器の底部である。いずれも外傾して立ち上がっている。地紋は26がＬＲ単節縄文で、上は縦回転と横回転、下は横回転、27・29がＬＲ単節縄文横回転、28がＲＬ単節縄文縦回転である。26は内外面とも煤け、体部下端部には炭化物が付着している。

(2) 土師器（第31図、写真図版20）

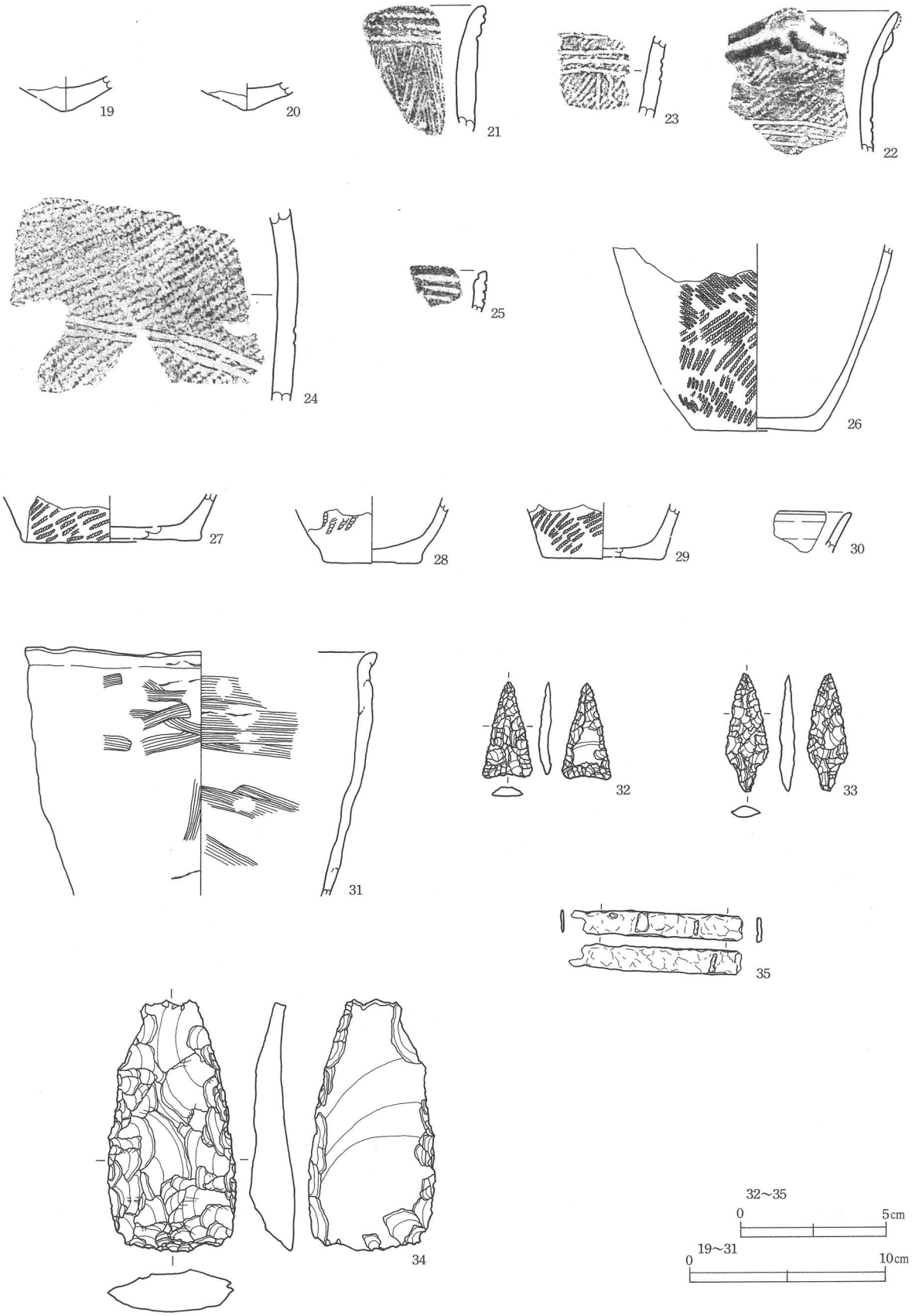
30・31が出土している。30はロクロ使用の土師器坏の口縁部である。胎土に径１㎜の砂粒を少量含んでいる。31はロクロ不使用の土師器甕である。体部最上部に体部最大径を持つと考えられ、口縁部は短く、頸部から緩く外傾している。外面下端部には炭化物が付着し、内面はほぼ全面煤けている。

(3) 石器（第31図、写真図版20・21）

32～34が出土している。32・33は石鏃で、32は無茎で、両側縁は直線状である。茎部は僅かに窪んでいる。33は有茎で、先端が僅かに欠けている。横断面形は平たい菱形である。34は石篦である。両側縁と先端部に刃部が形成されている。

(4) 鉄製品（第31図、写真図版20）

35は刀子の柄部と考えられるが、形状から刀子以外の鉄製品の可能性もある。残存長4.9cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmである。



第31図　遺構外の出土遺物

第２表　縄文土器観察表

（　）内は推定値　　［　］内は残存値

掲載番号	出土地点・層位	器　種	法　量（cm）			文　様（原体）の特徴等	胎　土	遺物図版	写真図版
			口　径	底　径	器　高				
6	住居状遺構・埋土中部	深鉢			[6.7]	撚糸　前期初頭	径１～２㎜の砂粒含	17	19
13	３号堀跡・埋土上部	深鉢			[9.8]	尖底土器　地紋ＬＲ単節縦回転　前期初頭	径1㎜の砂粒含	27	20
14	３号堀跡・埋土下部	深鉢			［6］	口唇端部縄文圧痕　口縁部下沈線　円筒上層ｅ式	径１㎜の砂粒含	27	20
15	３号堀跡・埋土上部	深鉢			[5.7]	上下に平行沈線３本　中間に波状の沈線１本　大木８ａ式併行		27	20
16	３号堀跡・埋土上部～中部	鉢形土器		4.4	[1.5]	やや上げ底風　地紋ＲＬ単節斜め回転	径１㎜の砂粒含	27	20
17	４号堀跡・埋土下部	深鉢			[3.6]	地紋ＬＲ単節斜め回転？	径１㎜の砂粒含	30	20
19	ＣⅡａ６・Ⅰ層	深鉢			[1.8]	尖底　前期初頭	繊維含	31	20
20	ＣⅡｈ５・Ⅰ層	深鉢			[1.4]	尖底　前期初頭	繊維含	31	20
21	ＤⅠｄ５・Ⅱ層	深鉢			[6.7]	口縁部縄文圧痕（ＲＬ）　木目状撚糸文　円筒下層ｄ式	金雲母含	31	20
22	ＢⅢｄ７・Ⅱ層	深鉢			[7.3]	口縁部隆帯　下端部平行沈線３本　大木８ａ式併行	径１～２㎜の砂粒含	31	20
23	不明	深鉢			［4］	上部平行沈線４本　縦位２本　大木８ａ式	径1㎜の砂粒含	31	20
24	ＢⅢｆ７・Ⅲ層	深鉢			[10.1]	沈線２本　地紋ＬＲ単節横回転　大木８ａ式併行	径１㎜の砂粒含	31	20
25	ＤⅠｅ５・ｆ５　Ⅱ層	浅鉢			[2.1]	沈線（外面３本、内面１本）　晩期末	金雲母含	31	20
26	ＢⅢｅ６・Ⅱ層	深鉢		6.5	[9.6]	地紋ＬＲ単節横回転、縦回転　外面炭化物付着		31	20
27	ＢⅡｉ１・ｉ２　Ⅰ層	深鉢		(9.2)	[2.4]	地紋ＬＲ単節横回転	径１～２㎜の砂粒含	31	20
28	ＢⅢｆ８・Ⅱ層	鉢形土器		5.1	[3.4]	地紋ＲＬ単節縦回転　一部煤けている	径１㎜の砂粒含	31	20
29	ＣⅡｈ３・ｉ３　Ⅰ層	鉢形土器		(6.2)	[2.9]	地紋ＬＲ単節横回転		31	20

第３表　土師器・須恵器観察表

Ｍ：ミガキ　ＹＮ：ヨコナデ　Ｎ：ナデ　Ｋ：ケズリ　Ｔ：敲き目痕　Ａ：当て具痕　　（　）内は推定値　　［　］内は残存値

掲載番号	出　土　地　点	種類・器種	外　面　調　整		内　面　調　整		底　面	成　形	法　量（cm）			遺物図版	写真図版
			口縁部	体　部	口縁部	体　部			口　径	底　径	器　高		
1	１号住居跡・焼土上	土師器甕	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ			(19.2)	－	[16.2]	12	19
2	１号住居跡・焼土上	土師器甕		Ｋ		Ｎ	木葉痕		－	13.2	[16]	12	19
3	１号住居跡・焼土上	土師器甕		Ｋ		Ｎ			－	10.7	[14.5]	12	19
4	２号住居跡・床上	土師器坏						内面黒色処理　高台	－	7.4	[1.7]	14	19
7	７号土坑・埋土中部	土師器坏				Ｍ	回転糸切り	ロクロ　内面黒色処理	－	(6)	［4］	20	19
8	１号堀跡・埋土上部	土師器坏					回転糸切り	ロクロ	－	(5.8)	[1.4]	24	19
9	１号堀跡・埋土上部	土師器坏		Ｎ		Ｍ	回転糸切り	ロクロ　内面黒色処理	－	(7.6)	[1.8]	24	19
10	３号堀跡・埋土上部～中部	土師器坏		Ｎ		Ｍ	回転糸切り	ロクロ	－	6.8	[2.4]	27	19
11	３号堀跡・埋土	須恵器甕		Ｔ		Ａ			－	－	[4.5]	27	20
12	３号堀跡・埋土上部	須恵器壺						ロクロ	(18.1)	－	[5.7]	27	20
30	ＢⅣａ２・Ⅱ層	土師器坏						ロクロ	－	－	[2.1]	31	20
31	ＣⅡｃ８・Ⅰ層	土師器甕		Ｎ		Ｎ			(17.7)	－	[12.8]	31	20

第４表　石器観察表

掲載番号	出土地点	器種	計測値（cm）			重さ（g）	特徴・備考	石材	産地	遺物図版	写真図版
			長さ	幅	厚さ						
18	４号堀跡	石鏃	2.8	1.6	0.7	1.6		頁岩	奥羽山脈？	30	20
32	ＤＩｄ５	石鏃	3.3	1.7	0.4	2.5		頁岩	奥羽山脈？	31	20
33	ＣⅡｅ５	石鏃	4	1.5	0.4	2.7		頁岩	奥羽山脈？	31	20
34	ＣⅡｃ８	石箆	8.6	4.4	1.6	57.5		頁岩	奥羽山脈？	31	21

第５表　鉄製品観察表

［　］内は残存値

掲載番号	出土地点	器種	計測値（cm）			重さ（g）	特徴・備考	遺物図版	写真図版
			長さ	幅	厚さ				
5	２号住居跡・床上（南東壁際）	刀剣	[23.3]	3.5	0.5	116.9		14	19
35	ＢⅣ区・Ⅰ層	刀子？	[8.8]	1.3	0.3	12.4		31	21

V　まとめ

1．遺構

(1) 平安時代の竪穴住居跡

２棟の検出である。各竪穴住居跡（以下住居跡と略記）の平面形や規模については第６表にまとめてある。

＜占地＞　調査区域中央部と郭部分からの検出である。

＜平面形・規模＞　１号住居跡は掘り方のみの検出、２号住居跡は遺構の約半分が調査区域外であるが、どちらも隅丸方形と考えられる。規模はそれぞれ一辺が4.5m前後、７m前後と推定され、小型と大型の住居跡である。

＜埋土＞　２号住居跡は黒色土が主体でよく締まっている。（１号住居跡は省略）

＜壁・床面＞　２号住居跡の壁はほぼ垂直に立ち上がっており、床面は凹凸が少なく平坦で、全体によく締まっている。（１号住居跡は省略）

＜柱穴・柱穴配置＞　どちらも柱穴が検出された。１号住居跡は４本柱である。２号住居跡は壁際に柱穴が配されており、壁溝も巡らされている。南東壁中央部には壁溝が切れている部分があり、出入り口の可能性がある。

＜カマド＞　１号住居跡は北東壁南東寄り、２号住居跡は北東壁中央部に設置されている。どちらもカマド本体の原型を保っておらず、煙道部の構造も不明である。

＜時期＞　２号住居跡は出土遺物から10世紀頃の可能性があるが、１号住居跡の詳しい時期は不明である。

第６表　平安時代の竪穴住居跡一覧表

（　）内は推定値または推定形

遺　構　名	平　面　形	規　模（m）	壁　高（cm）	カマド位置	煙道部	備　　考
１号住居跡	隅丸方形	4.3 × 4.45		北東壁南東寄り	不　明	掘り方のみ
２号住居跡	(隅丸方形)	(4.7) × 7.2	28.4 ～ 47.6	北東壁中央部	不　明	刀剣出土

(2) 中世の竪穴住居跡

調査区域南西部隅から１棟検出されている。一辺３m前後の隅丸方形で、壁際に柱穴が配されている。南東壁の一部は張り出しており、出入り口の可能性がある。出土遺物はない。

(3) 住居状遺構

郭部分南東隅からの検出である。平面形は隅丸方形で、埋土に十和田ａ降下火山灰が含まれている。壁は垂直に立ち上がっており、北東壁の中央部は張り出している。十和田ａ降下火山灰を含んでいることから平安時代の可能性があるが、形状から中世の可能性も否定できない。

(4) 土坑

９基検出された。調査区域南西部隅と郭部分からの検出である。平面形は円形３基、楕円形５基、隅丸方形１基で、楕円形が多い。他の遺構と重複しているのが２基、遺物が出土しているのが１基ある。９基のうち平安時代もしくはそれ以前と考えられるのが２基あるが、他は時期や性格は不明である。平面形・規模は第７表にまとめてある。

第７表　土坑一覧表

番号	遺　構　名	平　面　形	開口部径（cm）	底部径（cm）	深　さ（cm）	備　　考
1	１号土坑	楕円形	51 × 66	30 × 50	34.1	
2	２号土坑	楕円形	60 × 77	47 × 67	40.6	
3	３号土坑	楕円形	55 × 66	36 × 51	60.7	
4	４号土坑	楕円形	200 × 205	170 × 210	65.0	２号住居跡と重複
5	５号土坑	隅丸方形	110 × 124	80 × 90	42.5	
6	６号土坑	円形	100 × 112	70 × 80	49.1	
7	７号土坑	円形	250 × 265	210 × 215	143.8	遺物出土
8	８号土坑	楕円形	190 × 230	155 × 200	37.8	
9	９号土坑	円形	210 × 215	200 × 202	59.0	住居状遺構と重複

(5) 柱穴状小土坑

調査区域南西部隅から６基検出された。平面形は円形や楕円形で、柱穴配置に規則性はない。時期や性格については不明である。

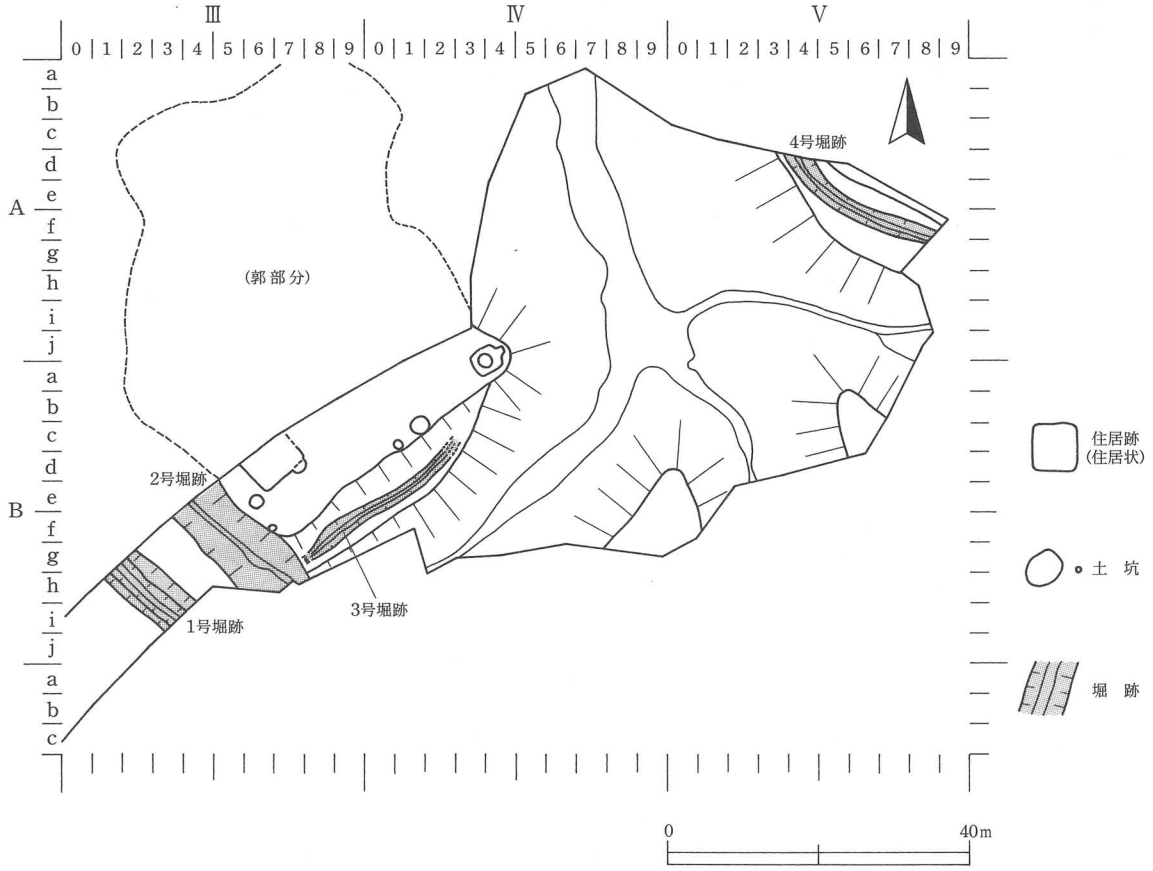
(6) 溝跡

１条検出された。埋土上部に十和田ａ降下火山灰を含んでいることから平安時代の可能性があるが、時期は特定できない。性格も不明である。

(7) 堀跡

４条検出された。郭の南西側から２条（１号・２号堀跡）、テラス状部分から１条（３号堀跡）、調査区域東端部から１条（４号堀跡）である。

１号・２号堀跡は二重堀となっており、２号堀跡は郭部分に沿って巡らされているが、１号堀跡は10m程北西の崖部（調査区域外）へ続いているものと推定される。３号堀跡はテラス状部分からの検出である。テラス状部分は北東部が崩落した様子が窺われることから、本堀跡は更に北東部へ延びていたものと考えられる。４号堀跡は郭の谷部を隔てた対岸の平場からの検出であり、平場の縁際を緩く弧を描くように巡っている。この平場は地形から考え、郭の可能性があることから、それと関連あるものと考えられる。なお、各遺構の規模については第８表にまとめてあり、位置については第32図に示してある。



第32図　堀　跡

第８表　堀跡一覧表

遺　構　名	全　　長	上幅（実効堀幅）	下　　幅	深　さ（垂直高）
１号堀跡	9.3 m	5.05～5.6 m	62 ～ 98 cm	148.9 ～ 200.5 cm
２号堀跡	15.5 m	6.0 ～8.7 m	10 ～ 48 cm	235.5 ～ 410.6 cm
３号堀跡	23.0 m	3.65～5.7 m	6 ～ 64 cm	160.0 ～ 172.0 cm
４号堀跡	19.4 m	1.75～2.56m	28 ～ 70 cm	81.8 ～ 107.5 cm

以上、検出された遺構についてまとめてみたが、ここで、北の城館跡と安代町内の中世城館跡について若干の補足をしてみたい。

Ｐ５「４．周辺の遺跡」に記したとおり、安代町内には現在21カ所の中世城館跡が知られている。このうち、形式、遺構、城主が分かっているものは、田山古館、田山館、安保館、佐比内館、荒屋館、五日市館である。第９表はそれらをまとめたものである。

第９表　安代町内の館跡（一部）

名　称	別　称	所在地	形　　式	現　状	遺　　構	城　主　等
田山古館		大沢田	丘陵・単郭式	畑、山林	平場、空堀	田山氏
田山館	沢口館	沢口	丘陵・複郭式	畑、山林	上館・中館・下館の三郭、空堀	田山氏、安保氏
安保館		藍野々道ノ下	不詳	不詳	不詳	安保氏
佐比内館	館市館	館市	丘陵・単郭式	畑、山林	平場、空堀	佐比内氏
荒屋館	新町館	荒屋新町	不詳	墓地、境内	不詳	荒屋氏
五日市館	五日市里城	五日市	丘陵・単郭式	畑	平場、空堀	五日市氏

北の城館跡を含め多くの城館跡は、詳細についてまだ不明な点が多い。今回の北の城館跡の発掘調査は、館跡の郭部分の一部の調査であり、館跡の全体像をつかむことはできなかったが、郭の存在、テラス状部分の存在、堀の形状と規模等が明らかになった。特に郭部分は南西部が二重堀になっており、また、南東部から北東部にかけては深い谷部になっていることから、防御上堅固に造られていることが分かった。残念ながら、築城時期や城主等については分かっていない。今後の調査により、館跡の全体像や城主等が明らかになることを期待したい。

２．遺物

出土した遺物は少量で、大コンテナ１箱分である。本遺跡は城館跡であるが、それに関連する遺物は出土しなかった。ここでは、縄文時代の遺物と古代以降の遺物の２つに分けてまとめてみたい。

(1) 縄文時代の遺物

土器は前期初頭の尖底土器、前期末・中期中葉の深鉢、晩期末の浅鉢が出土している。いずれも細片である。石器は石鏃３点、石篦１点が出土している。土器、石器とも出土地点にまとまりはない。

(2) 古代以降の遺物

土師器、須恵器、鉄製品が出土している。土師器は坏、甕である。坏は６点の出土で、ロクロ使用は５点、他１点は不明である。ロクロ使用のうち２点と不明のもの１点は内面黒色処理されている。また、底部切り離しが回転糸切りのものは４点である。

甕は４点で、いずれもロクロ不使用である。４点のうち３点は１号住居跡の焼土上からの出土である。底部に木葉痕が残るものが１点ある。

須恵器は甕と壺である。土師器に比べ出土量は少ない。

鉄製品は刀子と考えられる鉄片と刀剣である。刀剣は２号住居跡からの出土である。刀剣については別項で触れることにする。

＜刀剣について＞

２号住居跡から刀剣５が出土している。岩手県内でこれまで古代の住居跡から刀剣が出土した遺跡は、上

八木田Ⅳ遺跡（盛岡市）、桂平遺跡（浄法寺町）が知られている。上八木田Ⅳ遺跡ではＸⅥＫ１ｄ住居跡から出土している。切先部は失われており、平造り、棟は角棟である。鍔も出土している。時期は９世紀前半としている。桂平遺跡でもⅥＤ－１住居跡から出土している。切先から24.5cmの部分が残存している。切先は反らず、むしろ幾分下がる。切先は丸みを帯び、短峰である。明瞭な鎬はみられない。時期は平安時代後葉としている。

刀剣類は墓に副葬される例が多く、一般の住居跡から出土する例は少ないとされる。本遺跡の場合、刀剣は住居跡の南東壁隅の床上から出土している。廃棄したものか、特別な意味を持つものかは不明であるが、住居跡内から出土したという点では貴重な資料が得られたといえる。

引用・参考文献

岩手県立博物館（1982）：「岩手の土器」

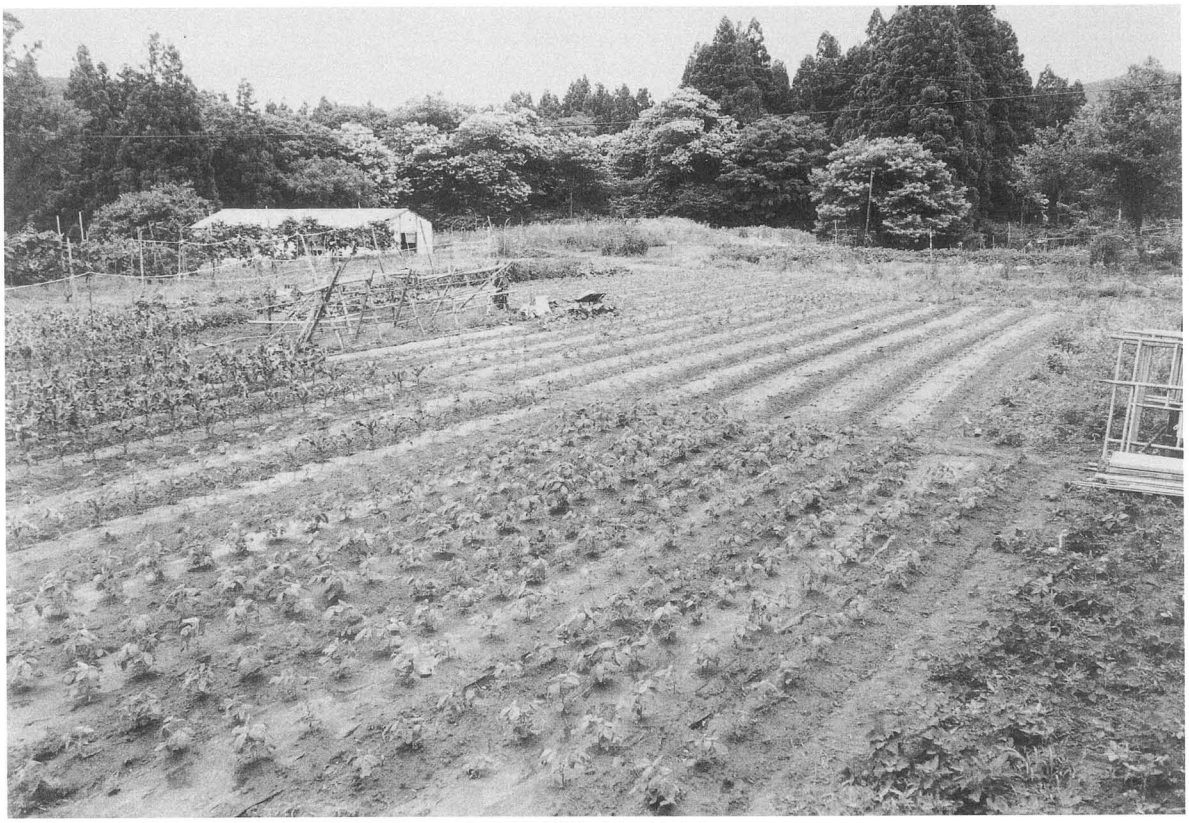
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『桂平遺跡発掘調査報告書』　岩埋文第110集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1992）：『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第177集

写真図版

遺跡遠景（北東から）

写真図版１　遺跡遠景



南西部近景（南西から）

館跡郭部分近景（南西から）

写真図版２　調査区近景

調査区全景（北西から）

土層断面Ⅰ（南東から）

土層断面Ⅱ（南東から）

写真図版３　調査区全景、土層断面

館跡郭部分近景（東から）

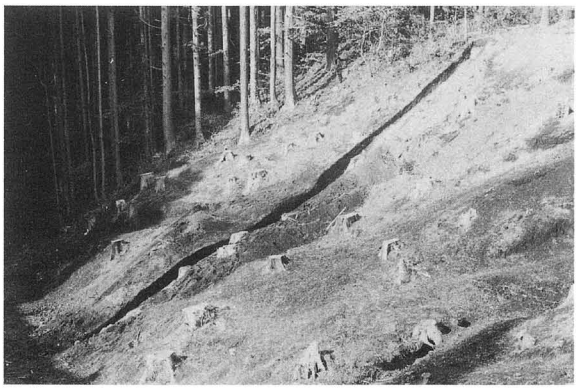
北東端部近景（西から）

写真図版４　調査区近景

北東部断面Ｂ－Ｂ′（南西から）

北東部断面Ｂ－Ｂ′（西から）

北東部断面Ｃ－Ｃ′（南から）

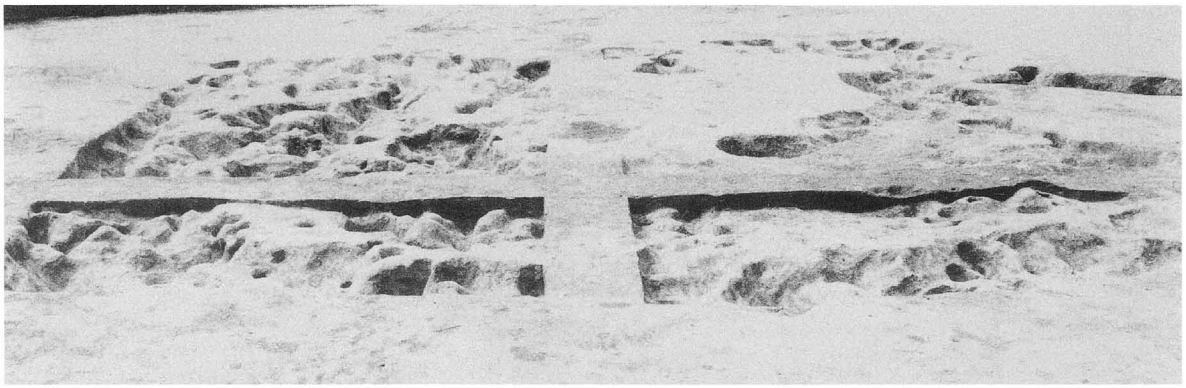


北東部断面Ｃ－Ｃ′（南から）

作業の様子（２号堀跡）

写真図版５　北東部土層断面、作業の様子

１号住居跡完掘全景（南西から）

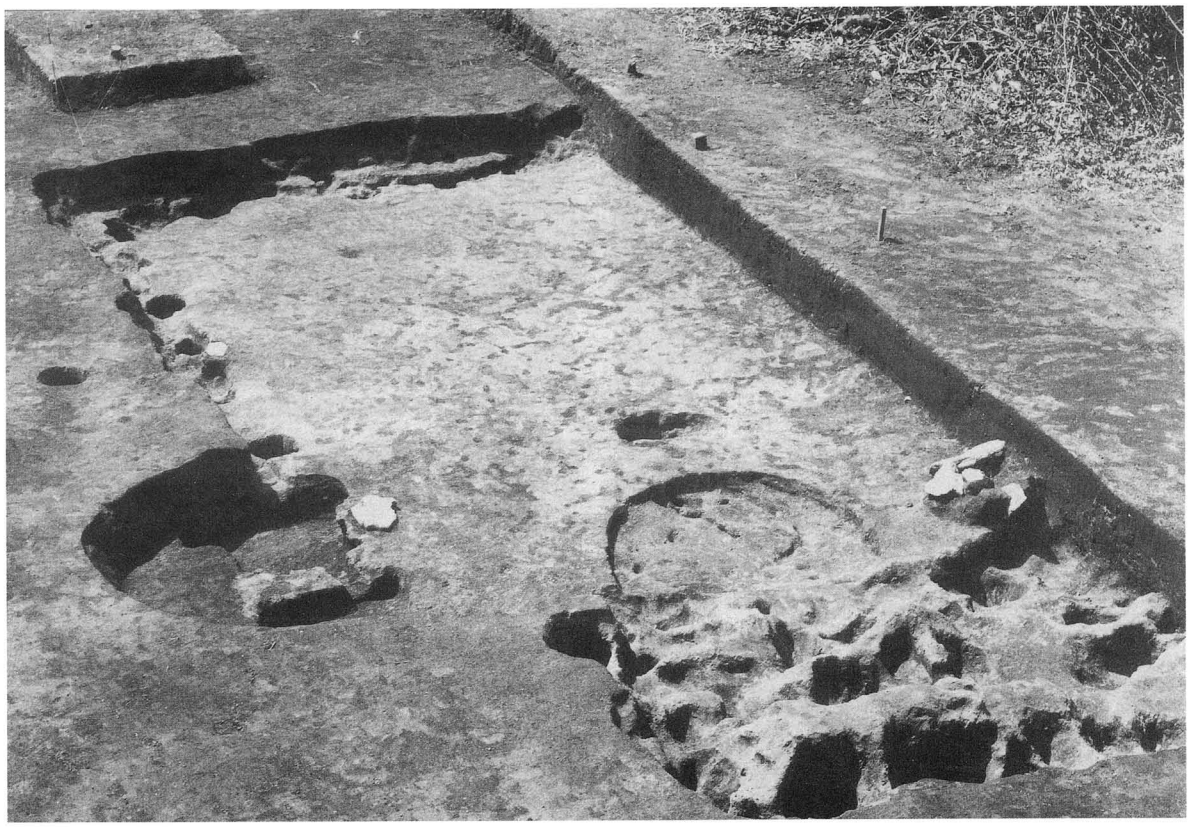


１号住居跡断面（南東から）

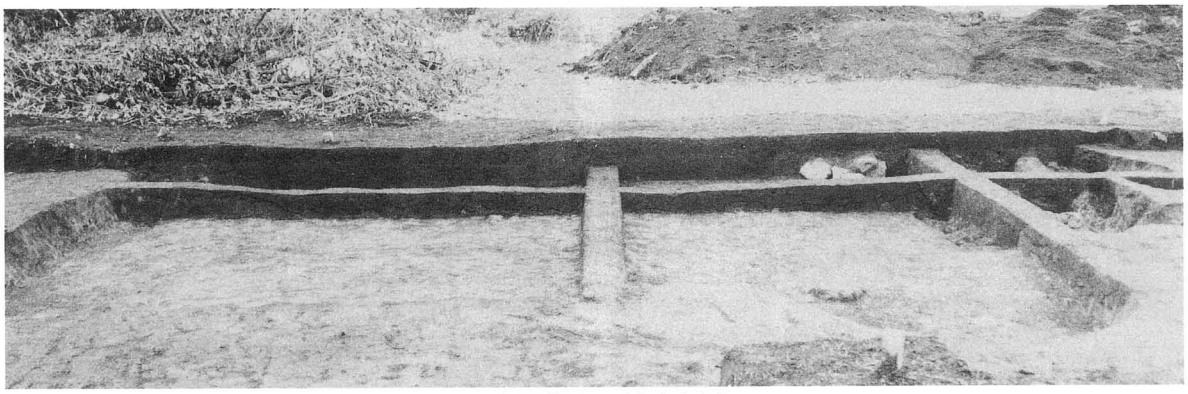
遺物出土状況（南西から）

カマド燃焼部焼土断面（南西から）

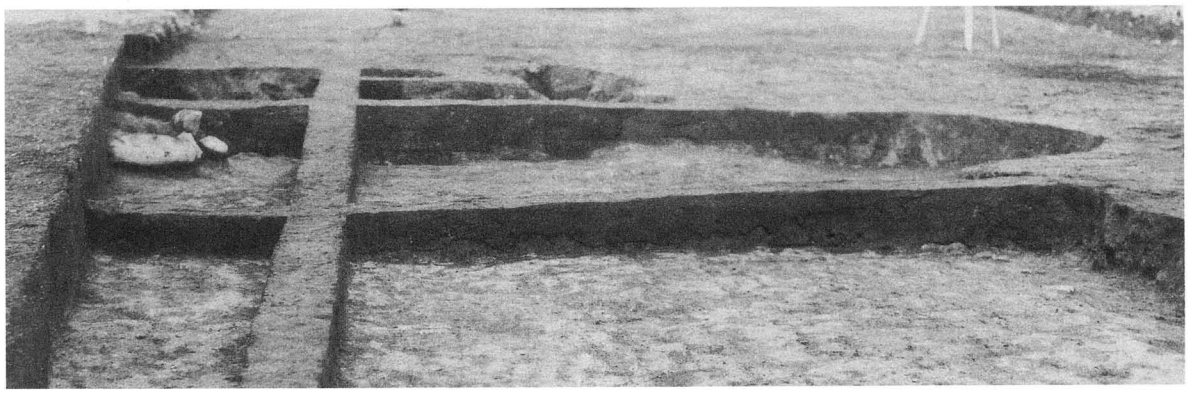
写真図版６　１号住居跡



２号住居跡完掘全景（東から）

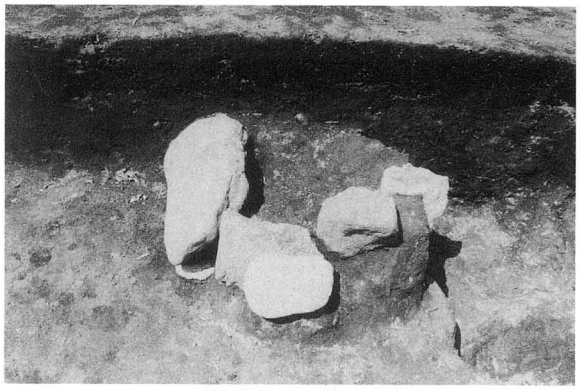


２号住居跡断面（南東から）

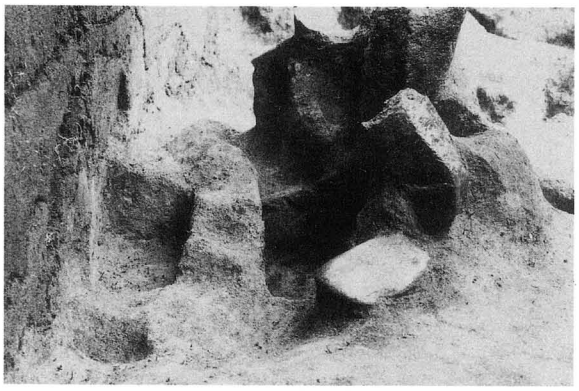


２号住居跡断面（南西から）

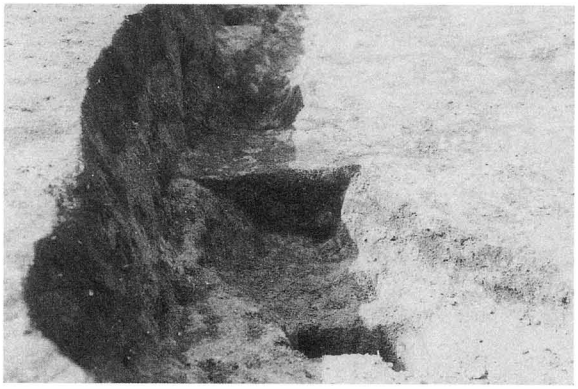
写真図版７　２号住居跡（１）



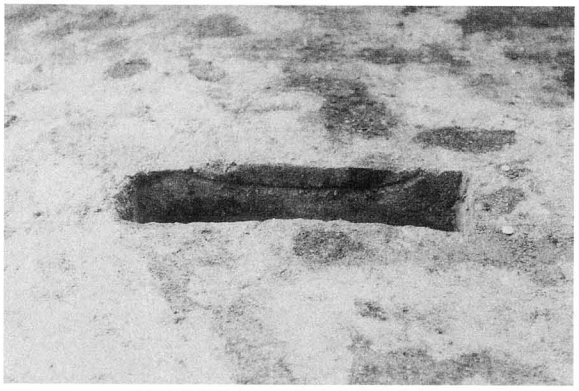
カマド検出状況（南東から）



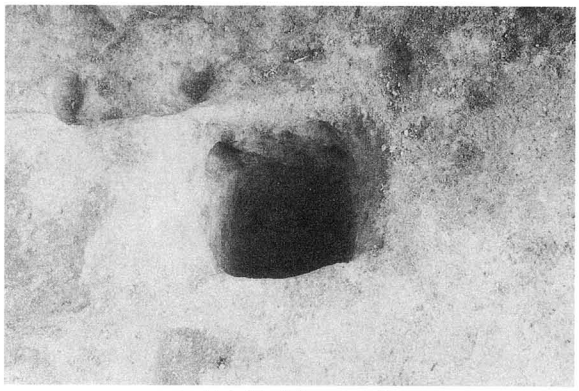
カマド燃焼部焼土断面（南西から）



壁溝断面ｅ－ｅ′（南東から）

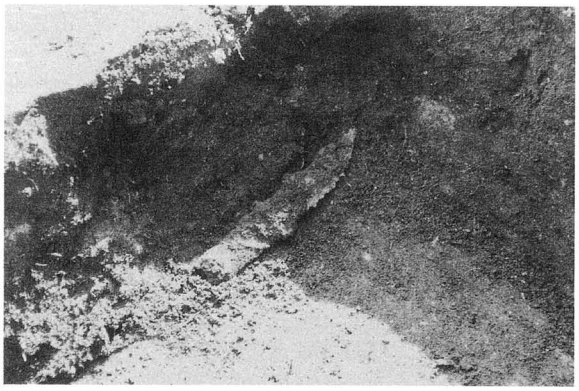


焼土断面ｆ－ｆ′（南東から）

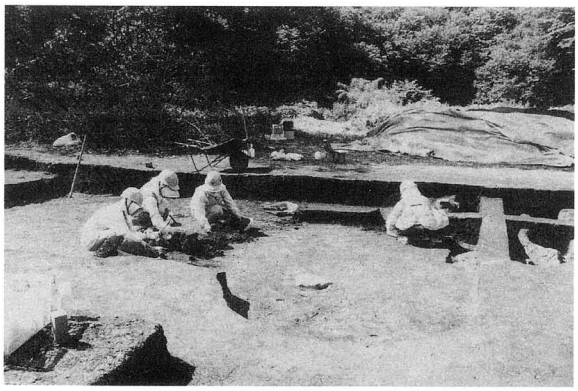


Ｐ11完掘（北西から）

Ｐ10・Ｐ11完掘（北西から）



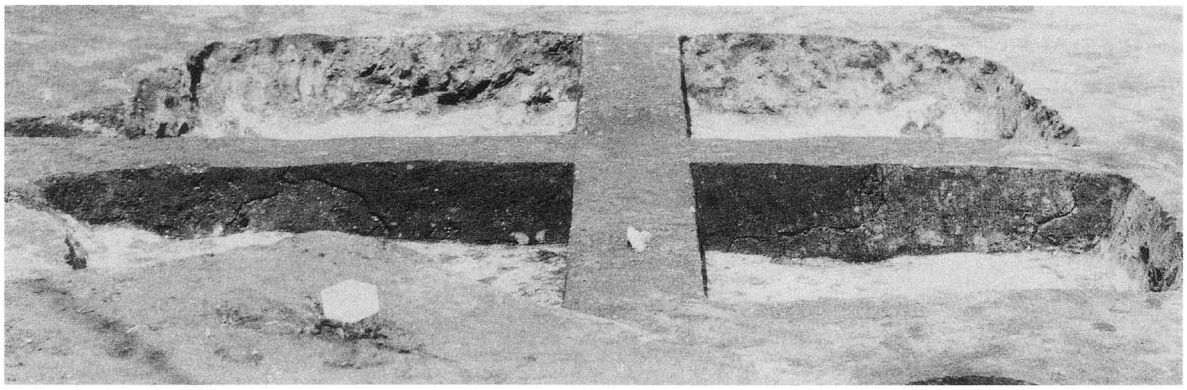
遺物出土状況（北から）



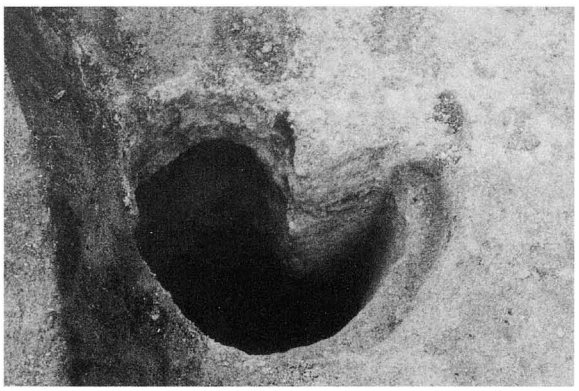
作業の様子

写真図版８　２号住居跡（２）

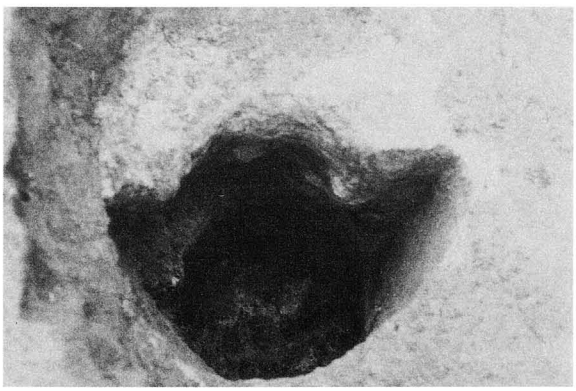
完掘全景（南から）



断面（東から）

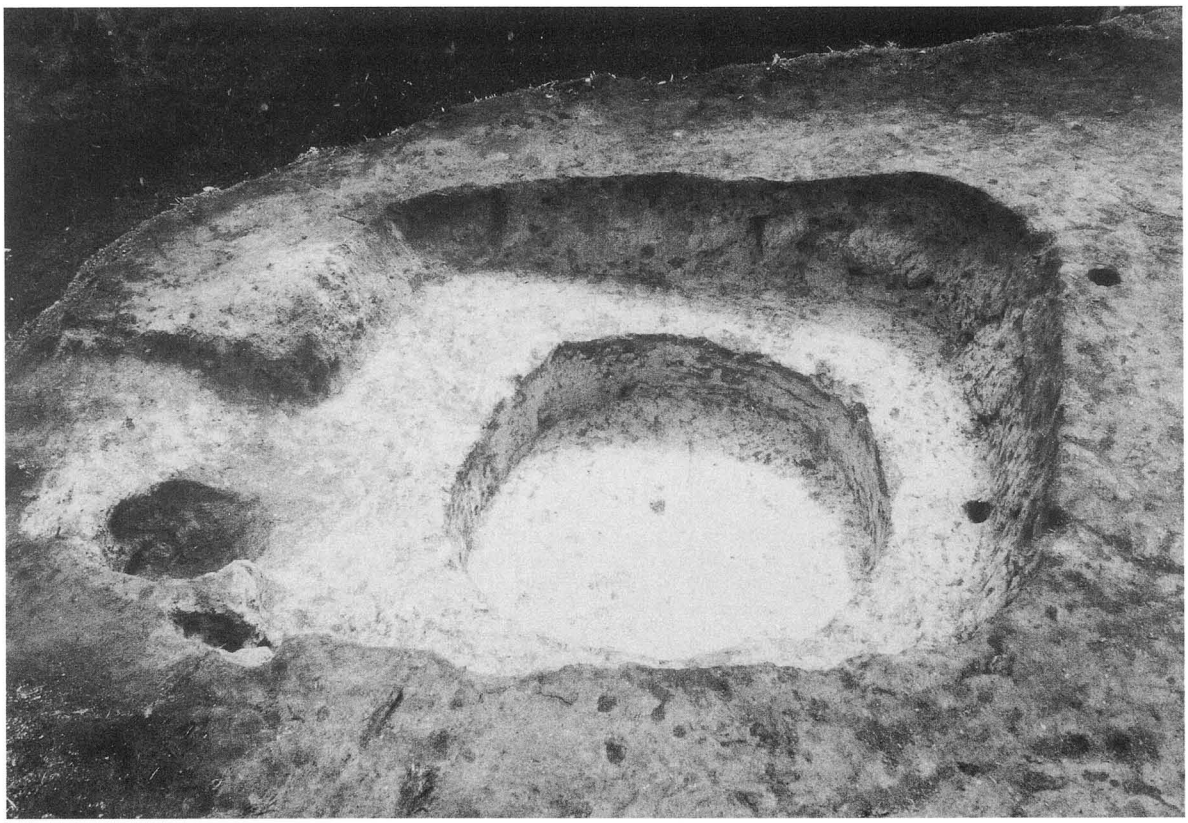


Ｐ４断面（西から）

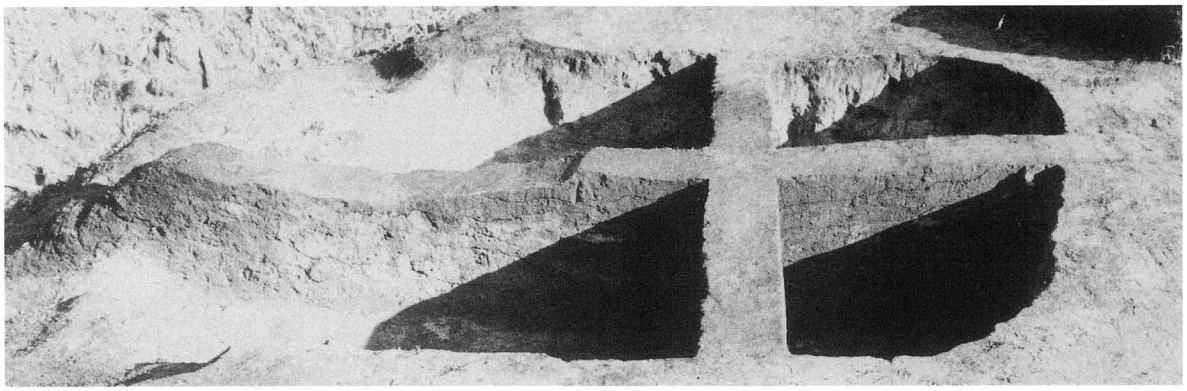


Ｐ５断面（南西から）

写真図版９　中世の住居跡



完掘全景（北から）



断面（北から）

出入口部分（北西から）

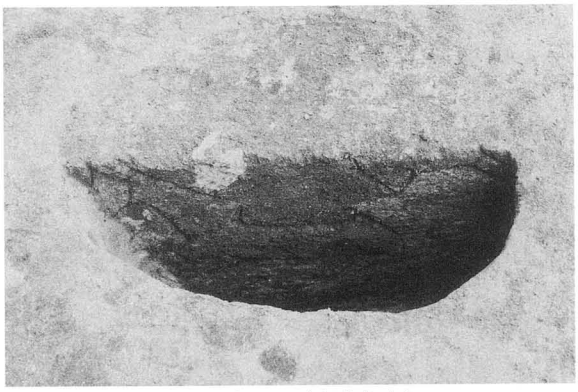
作業の様子

写真図版10　住居状遺構

1号土坑完掘全景（南東から）

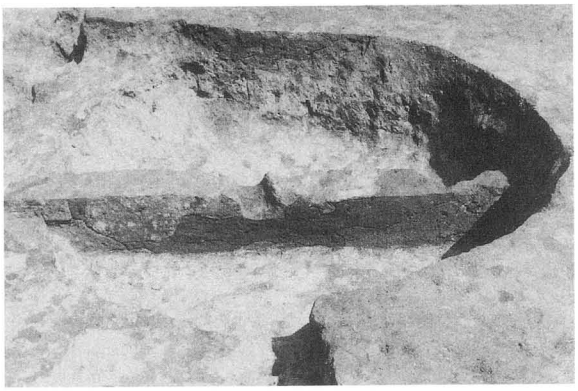
2号土坑完掘全景（南西から）

3号土坑完掘全景（南東から）

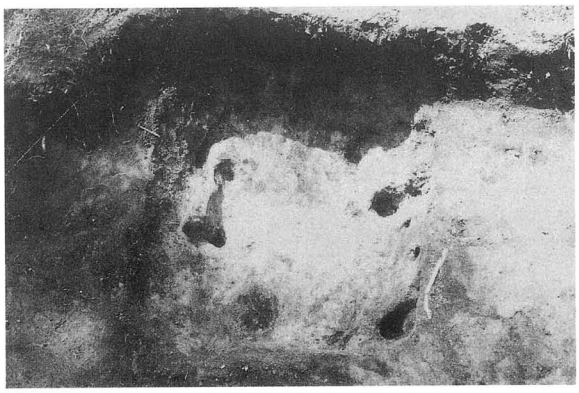


3号土坑断面（南東から）

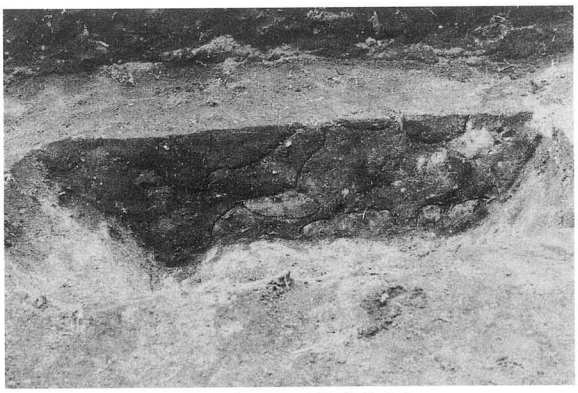
4号土坑完掘全景（南西から）



4号土坑断面（南西から）



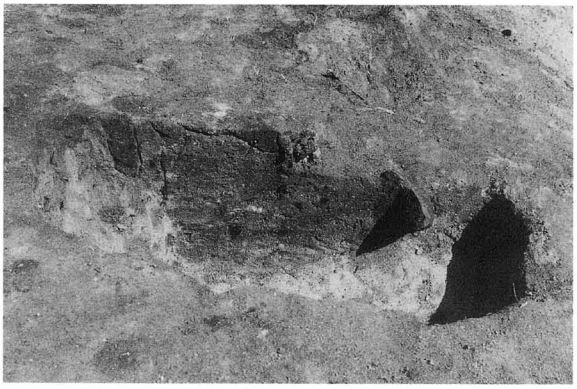
5号土坑完掘全景（北東から）



5号土坑断面（北東から）

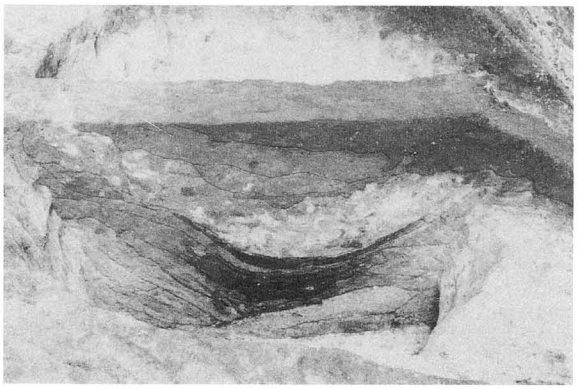
写真図版11　1号・2号・3号・4号・5号土坑

６号土坑完掘全景（西から）

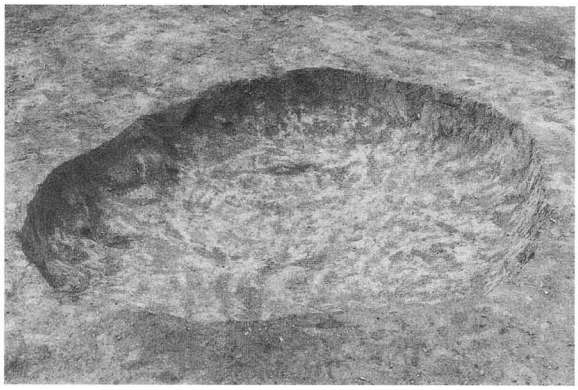


６号土坑断面（西から）

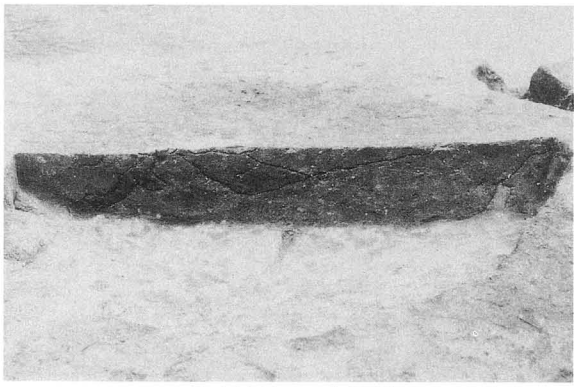
７号土坑完掘全景（南西から）



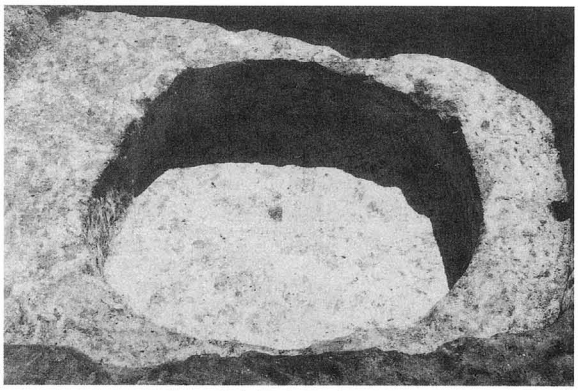
７号土坑断面（南西から）



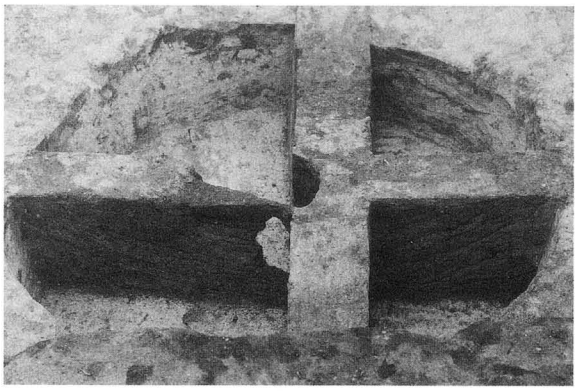
８号土坑完掘全景（南から）



８号土坑断面（南から）



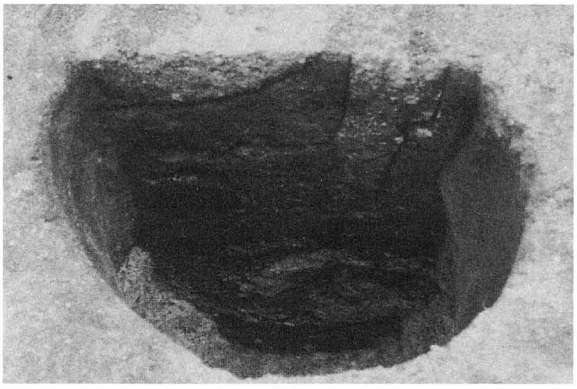
９号土坑完掘全景（北から）



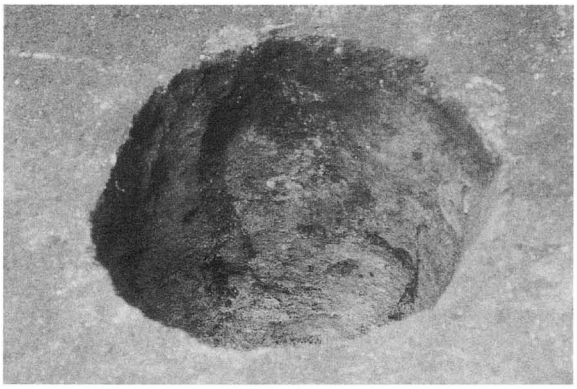
９号土坑断面（北から）

写真図版12　６号・７号・８号・９号土坑

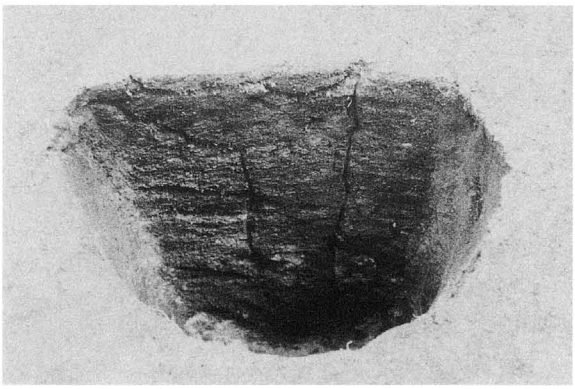
柱穴状小土坑全景（南西から）



Ｐ３断面（西から）



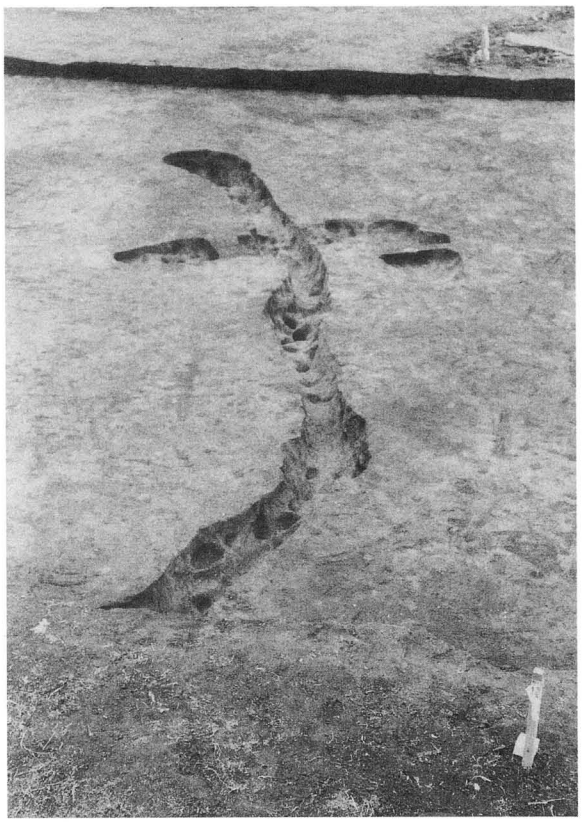
Ｐ４完掘全景（西から）



Ｐ５断面（西から）

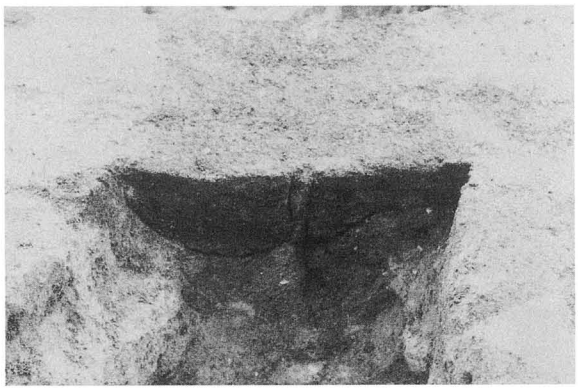
Ｐ５完掘全景（西から）

写真図版13　柱穴状小土坑



溝跡完掘全景（南東から）

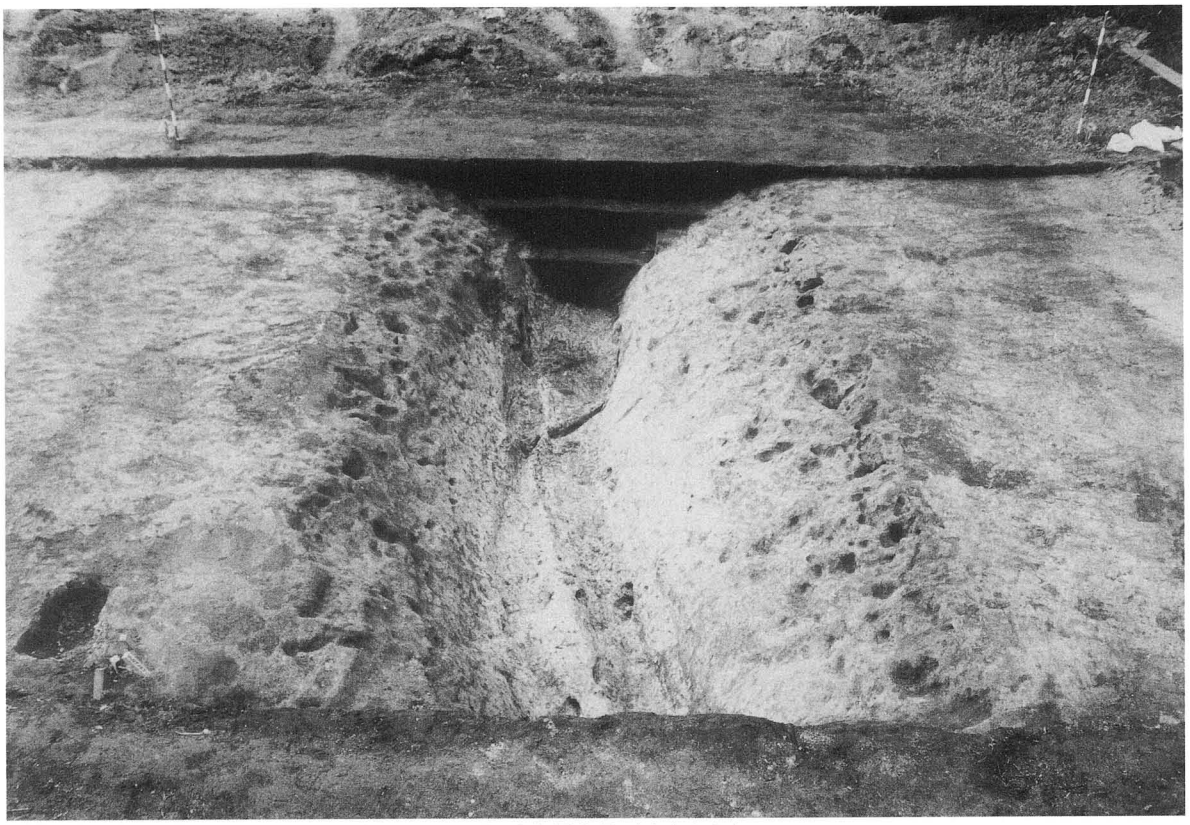
溝跡断面Ａ－Ａ′（北西から）



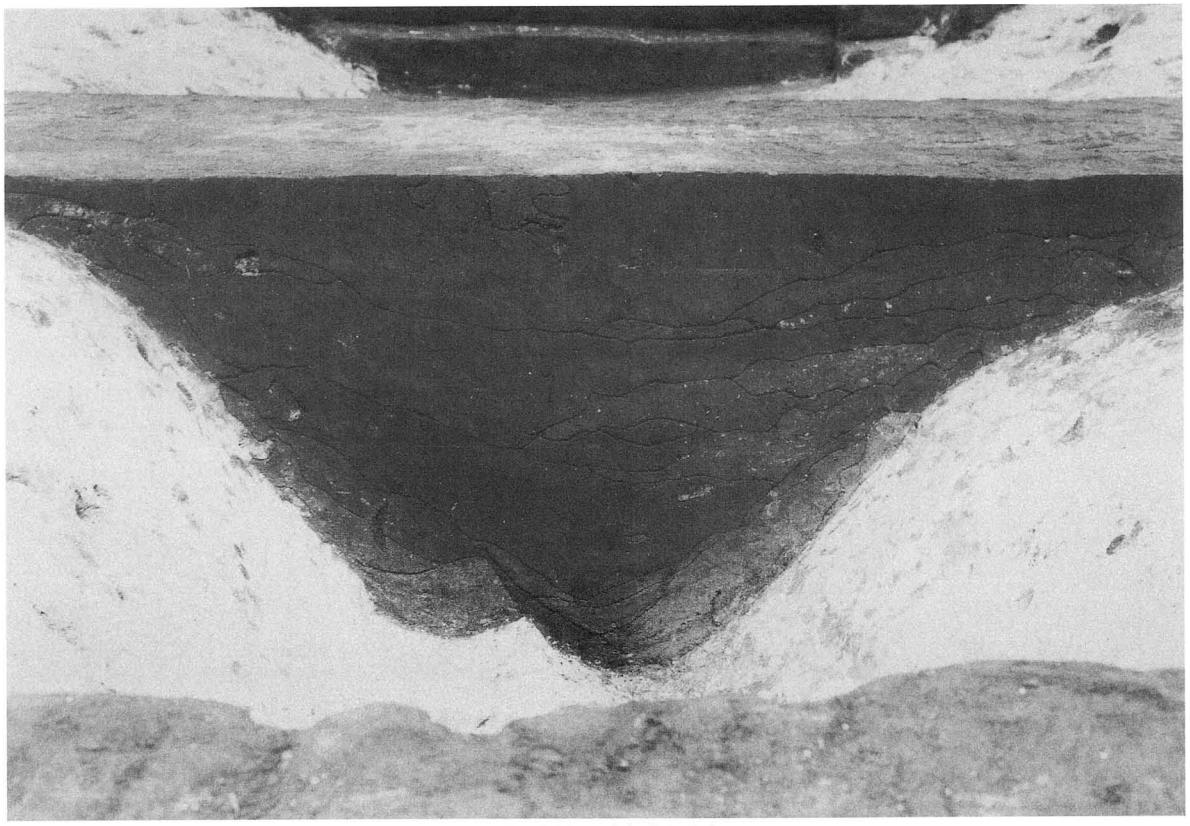
溝跡断面Ｂ－Ｂ′（西から）

現地説明会

写真図版14　溝跡・現地説明会



１号堀跡完掘全景（南東から）



１号堀跡断面（南東から）

写真図版15　１号堀跡

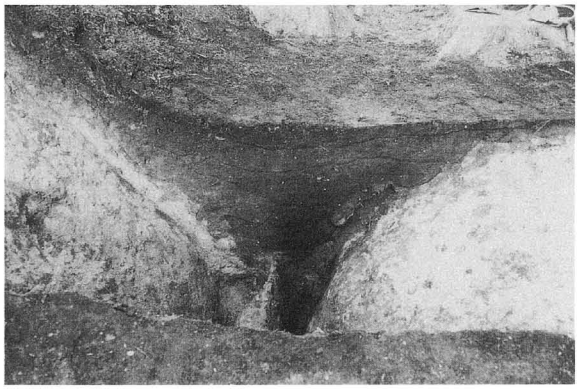
２号堀跡完掘全景（北西から）

２号堀跡断面（南東から）

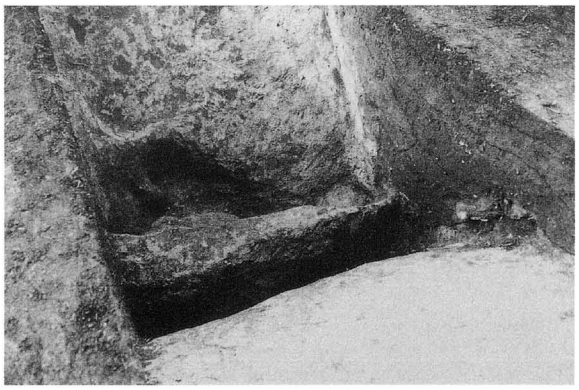
写真図版16　２号堀跡

３号堀跡完掘全景（南西から）

３号堀跡断面Ｂ－Ｂ′（南西から）



３号堀跡断面Ｂ－Ｂ′（南西から）



３号堀跡底部（北西から）

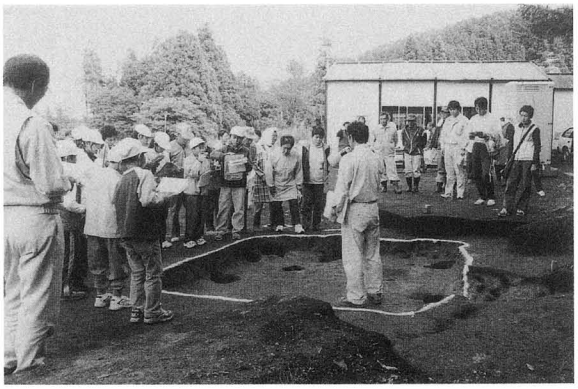
３号堀跡底部（北西から）

写真図版17　３号堀跡

４号堀跡完掘全景（南東から）

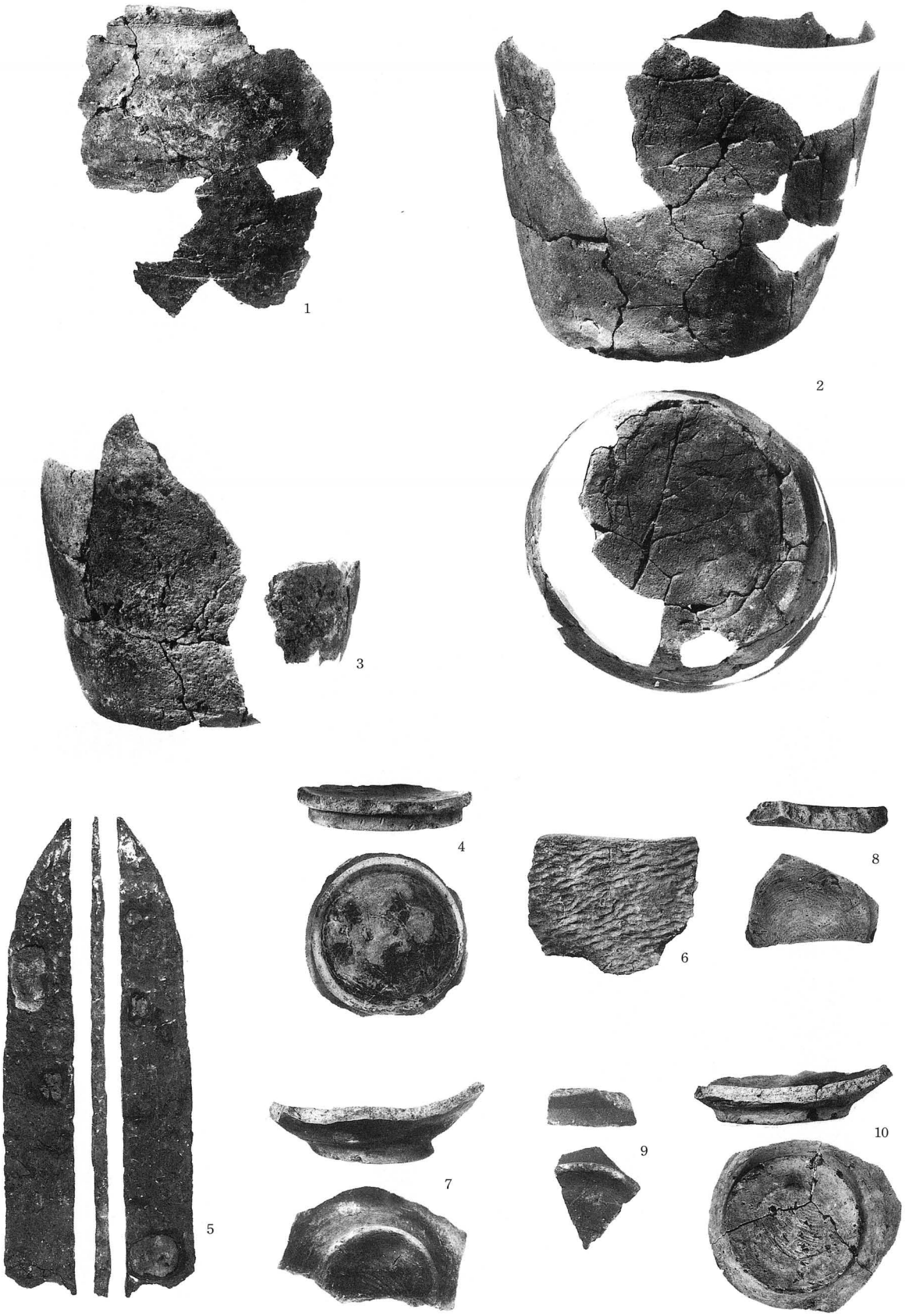
４号堀跡断面（南東から）

作業の様子

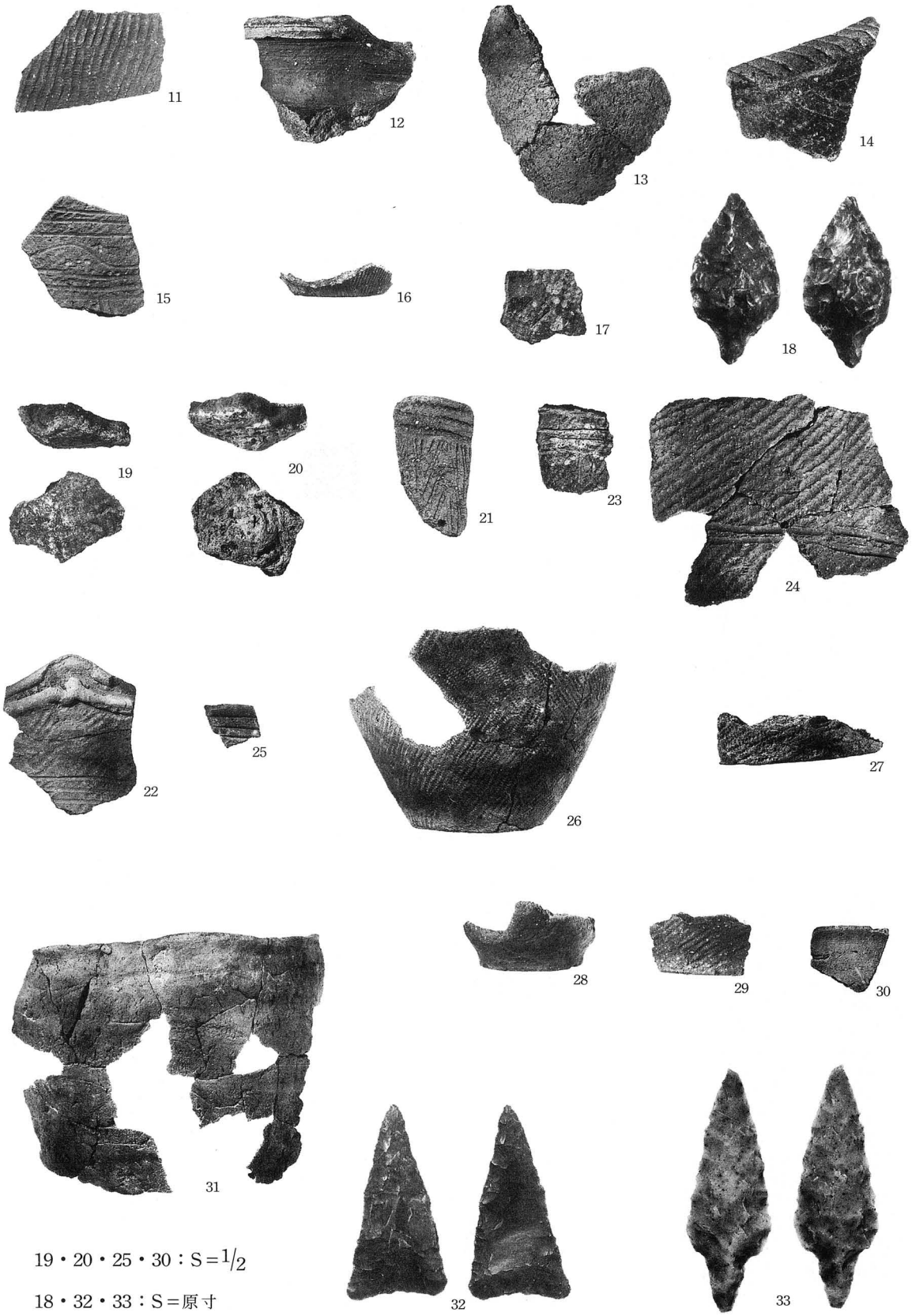


現地説明会

写真図版18　４号堀跡、現地説明会



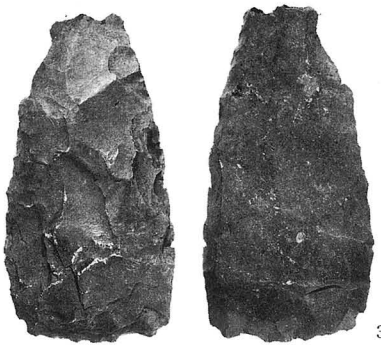
写真図版19　遺構内出土遺物(1)



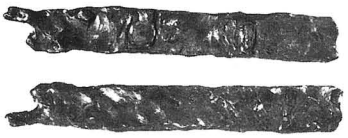
19・20・25・30：S＝1/2

18・32・33：S＝原寸

写真図版20　遺構内出土遺物(2)・遺構外出土遺物(1)



34



35

34：S＝1/2

35：S＝2/3

写真図版21　遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	きたのじょうやかたあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	北の城館跡発掘調査報告書
副書名	中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第438集
編著者名	佐々木信一
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　　TEL 019－638－9001・9002
発行年月日	西暦2003年11月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたのじょうやかたあと 北の城館跡	いわてけんいわてぐん 岩手県岩手郡 あしろちょうあざいしがみ 安代町字石神 43－1ほか	03523	JE55 －1261	36度 7分 17秒	140度 4分 27秒	2002.07.01 ～ 2002.10.11	3,920㎡	中山間地域総合整備事業に係わる緊急発掘調査
				世界側地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北の城館跡	集落跡 城館跡	平安時代 中世 不明	竪穴住居跡　2棟 住居状遺構　1棟 土坑　2基 竪穴住居跡　1棟 堀跡　4条 溝跡　1条 土坑　7基 柱穴状小土坑　6基	縄文土器（前期、中期、晩期） 土師器・須恵器 鉄製品（刀剣、刀子） 石器	二重堀を持つ城館跡 平安時代の竪穴住居跡から刀剣出土

平成15年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所　　長　木村　昇　　副所長　平野允苗

〔管理課〕

課長	韮沢正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山岸直美	〃	湯沢邦子
主査	中嶋賢一	〃	沼田テル子
主事	猿橋幸子	〃	伊藤滋子

〔調査第一課〕

課長	佐々木勝	文化財調査員	北村忠昭
課長補佐	佐々木清文	〃	八木勝枝
文化財専門員	金子昭彦	〃	丸山浩治
文化財調査員	吉田充	〃	北田勲
〃	亀大二郎	〃	島原弘征
〃	野中真盛	期限付調査員	坂部恵造
〃	新妻伸也	〃	小林弘卓
〃	阿部勝則	〃	藤原大輔
〃	杉沢昭太郎	〃	小針大志
〃	西澤正晴	〃	太田代一彦
〃	村木敬	〃	新井田えり子

〔調査第二課〕

課長	三浦謙一	文化財調査員	星雅之
課長補佐	中川重紀	〃	佐藤淳一
〃	高橋義介	〃	星幸文
文化財専門員	小山内透	〃	溜浩二郎
〃	金子佐知子	〃	本多準一郎
〃	濱田宏	〃	丸山直美
文化財調査員	赤石登	〃	福島正和
〃	阿部眞澄	〃	米田寛
〃	水上明博	〃	須原拓
〃	阿部憲	〃	中村絵美
〃	早坂淳	〃	川又晋
〃	小松則也	〃	村田淳
〃	阿部徳幸	〃	(村上拓)
〃	窓岩伸吾	期限付調査員	齋藤麻紀子
〃	亀澤盛行	〃	石崎高臣
〃	飯坂一重	〃	吉田里和
〃	鈴木裕明	〃	立花裕
〃	林勲	〃	江藤敦
〃	阿部孝明	〃	駒木野智寛
〃	羽柴直人		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第438集

北の城館跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業浅沢地区埋蔵文化財発掘調査

印刷　平成15年11月21日
発行　平成15年11月28日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
TEL　(019) 638－9001・9002
FAX　(019) 638－8563

印　刷　有限会社　内　海　印　刷
盛岡営業所　〒020-0875　岩手県盛岡市清水町８－８－108
TEL　(019) 622－0288
本　社　〒026-0041　岩手県釜石市上中島町４－２－４
TEL　(0193) 23－5511

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003